

東 郷 遺 跡

- I 東郷遺跡 (第47次調査)
- II 東郷遺跡 (第48次調査)
- III 東郷遺跡 (第60次調査)
- IV 東郷遺跡 (第72次調査)

2010年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

この度、平成6・15・21年度に実施しました東郷遺跡第47次・第48次・第60次・第72次調査の整理業務が完了し、発掘調査報告書を上梓する運びになりました。

今回報告する東郷遺跡は、大阪府八尾市中北部の八尾市桜ヶ丘一～三丁目、光町一・二丁目、本町一・七丁目、東本町一～五丁目、荘内町一・二丁目一帯の旧地名に由来した遺跡であります。

東郷遺跡一帯は、現在においても八尾市役所を中心とした市の主要建物群や近鉄大阪線八尾駅(光町一丁目)および主要幹線道路を中核とした政治・経済・交通の中心地であります。このため、開発行為に伴う発掘調査が随所で継続的に行われてきました。特に、昭和55(1980)年以降、近鉄大阪線八尾駅前開発に伴う駅舎移設により、駅の北部を中心に急速な開発行為が顕在化し、発掘調査の件数が増加しました。発掘調査の件数は73件(平成21年度末)におよんでおり、八尾市域の遺跡群のなかでも発掘調査件数が多く、遺跡の実態が比較的明らかな遺跡の一つとして認識されています。

これまでに行われた調査結果から、東郷遺跡は弥生時代中期後半から近世に至る複合遺跡であると認識されています。

なかでも、古墳時代初頭(3C)～前期(4C)にかけては、集落域が継続して広範囲に営まれている他、集落内から出土した数多くの他地域から持ち込まれた搬入土器類の存在は他地域との活発な交流があったことを証左するものであります。また、南部に位置する小阪合遺跡・中田遺跡等を含む長瀬川と玉串川に挟まれた遺跡群は、東郷・中田遺跡群と総称されており、河内地域の当該期を代表する遺跡として位置付けられています。

今回報告する第47次・第48次・第60次調査においても、古墳時代前期を中心とする遺構・遺物が数多く検出されており、当該期の実態を知るうえで貴重な資料を提供する結果となりました。

本書が地域の歴史を解明していく資料として、また埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して多大な御支援、御協力をいただきました関係諸機関の皆様には深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会
理事長 西 浦 昭 夫

序

1. 本書は、大阪府八尾市の萱振遺跡で平成6・15・21年度に実施した発掘調査の報告書を収録したもので、内業整理および本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成22年1月を以って終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責・編集はⅠ・Ⅱ原田昌則、Ⅲ樋口 薫、Ⅳ木村健明で、全体の編集は原田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図(昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成19年度版)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、国土地院第Ⅵ系〔日本測地系〕の座標北を示す。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
1. 遺構は下記の略号で示した。
竪穴住居—SI 掘立柱建物—SB 井戸—SE 土坑—SK 溝—SD 土器集積—SW
落ち込み—SO 小穴・柱穴—SP 自然河川—NR
1. 遺構図面の縮尺は適宜決定した。
1. 遺物図面の縮尺は1/4を基本とする。実測図断面については、弥生土器・土師器・黒色土器・瓦器は白、須恵器は黒、屋瓦・石器・木製品は斜線を用いた。なお、黒色土器の煤附着範囲については粗い水玉を使用した。
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目 次

はしがき

序

Ⅰ 東郷遺跡第47次調査(TG94-47)	1
Ⅱ 東郷遺跡第48次調査(TG94-48)	47
Ⅲ 東郷遺跡第60次調査(TG2003-60)	103
Ⅳ 東郷遺跡第72次調査(TG2008-72)	141

I 東郷遺跡第47次調査 (T G94-47)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市桜ヶ丘一丁目34. 37番地で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第47次調査(TG94-47)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成6年8月1日～同年9月30日(実働40日間)にかけて岡田清一が担当した。調査面積は約760㎡を測る。
1. 現地調査においては、大西謙太郎・辻野優子・富永勝也(現 財団法人北海道埋蔵文化財センター)・奥儀徳保・吉田由美恵が参加した。
1. 整理業務は、調査終了後随時行い、平成22年1月末に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-沢村妙子・辻野・吉田、図面トレース-市森千恵子・山内千恵子、図面レイアウト岡田・原田昌則・山内、遺物撮影-岡田・北原清子、写真図版作成-尾崎良史が行った。
1. 本書の執筆・編集は終了報告を基に原田が行った。

本 文 目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 地理・歴史的環境	1
第3章 調査概要	9
第1節 調査の方法と経過	9
第2節 層序	11
第3節 検出遺構と出土遺物	12
1) 第1面	12
2) 第2面	33
3) 遺構に伴わない出土遺物	37
4) 出土遺物法量表	43
第4章 小結	50

挿 図 目 次

第1図	調査地周辺図	2
第2図	調査地地区割り図	9
第3図	西壁断面図	10
第4図	第1面 平面図	13
第5図	S B 101～106平断面図	15
第6図	S B 107～110平断面図	16
第7図	S E 101～103平断面図	17
第8図	S E 101、S E 103出土遺物実測図	18
第9図	S E 104平断面図	19
第10図	S E 104出土遺物実測図-1	20
第11図	S E 104出土遺物実測図-2	21
第12図	S E 104出土遺物実測図-3	22
第13図	S E 104出土遺物実測図-4	23
第14図	S E 105平断面図	24
第15図	S E 106平断面図	25
第16図	S E 106出土遺物実測図	25
第17図	S E 107出土遺物実測図	25
第18図	S E 107平断面図	26
第19図	S K 101、102平断面図	27
第20図	S K 103出土遺物実測図	27
第21図	S K 103平断面図	28
第22図	第2面検出遺構平面図	33
第23図	S D 201断面図	34
第24図	S D 201出土遺物実測図	35
第25図	S W 201平面図	36
第26図	S W 201出土遺物実測図	37
第27図	第IV層、第V層、第VI層出土遺物実測図	38
第28図	第VII層出土遺物実測図-1	40
第29図	第VII層出土遺物実測図-2	41

表 目 次

第1表	周辺の発掘調査一覧表	3
第2表	小穴・柱穴法量表	29
第3表	布留式期の土器編年対照表	42

図版目次

- | | | | |
|------|---|------|-----------------------|
| 図版 一 | 第1面北区全景 | 図版 八 | SE103、SE104出土遺物 |
| 図版 二 | 第1面南区全景 | 図版 九 | SE104出土遺物 |
| 図版 三 | SE101~103検出状況
SE104検出状況 | 図版一〇 | SE104出土遺物 |
| 図版 四 | SE104検出状況
SE104井戸側内完掘状況
SE104井戸側下部内遺物出土状況
SE104井戸側 | 図版一一 | SE104出土遺物 |
| 図版 五 | SE106検出状況
同上 掘方断割り状況 | 図版一二 | SE104出土遺物 |
| 図版 六 | SE107検出状況
SK103検出状況 | 図版一三 | SE106、SE107、SK103出土遺物 |
| 図版 七 | 第2面全景
SW201遺物出土状況 | 図版一四 | SK103出土遺物 |
| | | 図版一五 | SD201出土遺物 |
| | | 図版一六 | SD201、SW201出土遺物 |
| | | 図版一七 | 第IV層、第V層、第VI層出土遺物 |
| | | 図版一八 | 第VII層出土遺物 |
| | | 図版一九 | 第VII層出土遺物 |
| | | 図版二〇 | 第VII層出土遺物 |

第1章 調査に至る経過

東郷遺跡は、長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地に位置する弥生時代中期～近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では大阪府八尾市中央部の北本町一・二丁目、本町一・七丁目、東本町一～五丁目、光町一・二丁目、桜ヶ丘一～四丁目、荳内町一・二丁目の東西1.3km、南北0.9kmがその範囲とされている。遺跡範囲内のほぼ中央部を近鉄大阪線が横断しており、これを境に北部が近鉄八尾駅を中心とする商業地域、南部が市街地および市役所を中心とした施設が集中する地域に二分されている。北部地域については、昭和55(1980)年度以降、近鉄八尾駅の移転に伴う区画整理地区内や周辺部での開発に関連した発掘調査が継続して実施されている。一方、南部地域においては、平成3(1991)年度に行われた現市役所の建替えに伴う第37次調査(TG91-37)等の調査が実施されている。なかでも、北部地域においては発掘調査が集中して実施されており、調査件数、面積ともに多い。これらの調査では、弥生時代中期末～近世に至る遺構・遺物が検出されている。なかでも、古墳時代初頭(庄内式期)から古墳時代前期(布留式期)においては、居住域と墓域の推移が明らかにされており、当該期の集落動態を知る上で貴重な資料を提供している。

今回報告する第47次調査(TG94-47)は、東郷遺跡の北部地区にあたる桜ヶ丘一丁目で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査である。平成6年6月14日に八尾市教育委員会文化財課により遺構確認調査(吉田1995)が実施された結果、古墳時代から鎌倉時代を中心とする遺構・遺物の存在が確認されたことから発掘調査を実施するに至ったものである。発掘調査の業務は事業者・八尾市教育委員会・(財)八尾市文化財調査研究会の三者間で締結された協定書に基づいて当調査研究会が事業者から委託を受けて行った。現地調査の期間は平成6年8月1日～9月30日までの実働40日間である。調査面積は約760㎡を測る。報告書作成に関わる業務は、現地発掘調査終了後、平成22年1月末まで随時実施した。

第2章 地理・歴史的環境

東郷遺跡は、大阪府八尾市のほぼ中央部に位置する弥生時代中期～近世に至る複合遺跡である。東郷遺跡の位置する八尾市の中央部は、東を生駒山地、西を上町台地、南を羽曳野丘陵、北を淀川に画された河内平野の中南部にあたる。

河内平野の形成過程については、地質学の方野から後氷期の古大阪平野の時代から大阪平野Ⅱの時代に至る九つの時代の発達史が示されている他、地理的には、旧大和川主流の長瀬川・玉串川をはじめとする数多くの中小河川による堆積作用により、南から北にかけて扇状地性低地(氾濫原)・三角州性低地・潟湖性低地の順に地形形成が行われたものとされている。河内平野の中南部に成立した遺跡群は、このような地形的条件に左右されながらも基本的には、旧大和川水系のもたらす豊富な水量と豊かな土壌を背景に、水稲耕作の初期段階から数多くの遺跡が成立してきた。東郷遺跡はこのような遺跡のひとつであり、旧大和川水系中の長瀬川と玉串川に挟まれた扇状地性低地(氾濫原)に位置している。近年の研究では、遺跡範囲の東部付近に南北に流下した小阪合



第1図 調査地周辺図

第1表 周辺の発掘調査一覧表

番号	調査名 (略号)	調査 主体	所在地	調査期間	文 献
1	東郷道跡 第1次(TG80-1)	市教委	桜ヶ丘三丁目	S86/1/10~ 1/21	高萩千秋 1981 『東郷道跡発掘調査報告』『八尾市遺跡・東郷道跡発掘調査報告』米田敏幸1983 『八尾市文化財調査報告』6 昭和55年度国庫補助事業
2	第2次 (TG81-2)	市教委	桜ヶ丘三丁目	S86/4/15	米田敏幸 1983 『第8章 東郷道跡発掘調査報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1980、1981年度『八尾市教育委員会』
3	第3次 (TG81-3)	市教委	光町一丁目	S86/4/13~ 4/15	高萩千秋 1983 『第8章 東郷道跡発掘調査報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1980、1981年度『八尾市教育委員会』
4	第4次 (TG81-4)	市教委	北本町二丁目	S86/5/13~ 5/26	高萩千秋 1983 『第8章 東郷道跡発掘調査報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1980、1981年度『八尾市教育委員会』
5	第5次 (TG81-5)	市教委	光町一丁目	S86/6/8~ 7/7	高萩千秋 1983 『第8章 東郷道跡発掘調査報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1980、1981年度『八尾市教育委員会』
6	第6次 (TG81-6)	市教委	桜ヶ丘三丁目	S86/7/25~ 8/5	高萩千秋 1983 『第8章 東郷道跡発掘調査報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1980、1981年度『八尾市教育委員会』
7	第7次 (TG81-7)	市教委	桜ヶ丘三丁目	S86/9/21~ 10/31	祭報告
8	第8次 (TG81-8)	市教委	光町二丁目	S86/10/13~ 12/4	高萩千秋 1983 『第8章 東郷道跡発掘調査報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1980、1981年度『八尾市教育委員会』
9	第9次 (TG81-9)	市教委	光町一丁目	S86/12/4~ 12/23	高萩千秋 1983 『第8章 東郷道跡発掘調査報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1980、1981年度『八尾市教育委員会』
10	第10次 (TG82-10)	市教委	光町二丁目	S86/2/1~ 3/12	高萩千秋 1983 『第8章 東郷道跡発掘調査報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』1980、1981年度『八尾市教育委員会』
11	第11次 (TG82-11)	八文研	光町二丁目	S87/5/8~ 6/10	高萩千秋 1989 『東郷道跡・『東郷道跡・田井中遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 (財)八尾市文化財調査研究会
12	第12次 (TG82-12)	八文研	北本町二丁目	S87/5/5~ 8/27	高萩千秋 1989 『東郷道跡・『東郷道跡・田井中遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 (財)八尾市文化財調査研究会
13	第13次 (TG82-13)	八文研	桜ヶ丘三丁目	S87/9/16~ 10/12	高萩千秋 1989 『東郷道跡・『東郷道跡・田井中遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 (財)八尾市文化財調査研究会
14	第14次 (TG82-14)	八文研	光町一丁目	S88/3/18~ 4/21	高萩千秋 1989 『東郷道跡・『東郷道跡・田井中遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 (財)八尾市文化財調査研究会
15	第15次 (TG83-15)	八文研	光町一丁目	S88/5/13~ 5/25	高萩千秋 1989 『東郷道跡・『東郷道跡・田井中遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 (財)八尾市文化財調査研究会
16	第16次 (TG83-16)	八文研	光町一丁目・北本町二丁目	S88/4/1~ 5/13	高萩千秋 1989 『東郷道跡・『東郷道跡・田井中遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 (財)八尾市文化財調査研究会
17	第17次 (TG83-17)	八文研	光町一丁目	S88/11/24~ 12/15	駒沢 敦 1985 『I 東郷道跡発掘調査報告』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』米田敏幸1985年度『八尾市文化財調査研究会報告』0
18	第18次 (TG83-18)	八文研	北本町二丁目	S89/3/1~ 4/10	高萩千秋 1989 『東郷道跡・『東郷道跡・田井中遺跡』財団法人八尾市文化財調査研究会報告17 (財)八尾市文化財調査研究会
19	第19次 (TG85-19)	市教委	北本町二丁目	S86/4/1~ 4/27	福村友子 1986 『I 東郷道跡の調査』『八尾市内遺跡昭和60年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告12 昭和60年度国庫補助事業
20	第20次 (TG85-20)	八文研	光町二丁目	S86/10/29~ S81/3/10	原田昌則 1987 『東郷道跡第20次調査』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』13 『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』財団法人八尾市文化財調査研究会報告13
21	第21次 (TG86-21)	市教委	光町一丁目	S81/10/6~ 10/28	米田敏幸 1986 『東郷道跡第21次埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査報告13 八尾市教育委員会
22	第22次 (TG86-22)	市教委	桜ヶ丘一丁目	S81/12/15~ 12/27	米田敏幸 1987 『東郷道跡第22次発掘調査報告』『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告15 八尾市教育委員会
23	第23次 (TG86-23)	八文研	荻内町一丁目	S82/2/16~ 3/18	高萩千秋 1991 『第2章 第23次調査』『東郷道跡』一第23次・第24次発掘調査報告一』財団法人八尾市文化財調査研究会報告29
24	第24次 (TG87-24)	八文研	桜ヶ丘三丁目	S82/4/8~ 4/23	高萩千秋 1991 『第3章 第24次調査』『東郷道跡』一第23次・第24次発掘調査報告一』財団法人八尾市文化財調査研究会報告29
25	第25次 (TG87-25)	八文研	北本町二丁目	S82/7/20~ 9/17	西村公助 1995 『I 東郷道跡(第25次調査)』『財団法人八尾市文化財調査研究会報告45』(財)八尾市文化財調査研究会
26	第26次 (TG87-26)	八文研	荻内町一丁目	S83/1/16~ 1/29	西村公助 1988 『15. 東郷道跡』『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告16 (財)八尾市文化財調査研究会
27	第27次 (TG87-27)	市教委	光町二丁目	S82/1/23~ 1/26・5/12	米田敏幸 1988 『東郷道跡発掘調査報告』『八尾市内遺跡昭和62年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告18 八尾市教育委員会
28	第28次 (TG88-28)	八文研	光町一丁目	S83/7/26~ 8/11	西村公助 1989 『3 東郷道跡(第28次調査)』『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告25
29	第29次 (TG88-29)	八文研	光町二丁目	111/3/6~ 3/25	西村公助 1989 『4 東郷道跡(第29次調査)』『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告25
30	第30次 (TG89-30)	八文研	光町七丁目	111/4/17~ 4/27	西村公助 1995 『I 東郷道跡(第30次調査)』『東郷道跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』(財)八尾市文化財調査研究会
31	第31次 (TG89-31)	八文研	光町一丁目	111/8/18~ 7/5	原田昌則 1990 『3. 東郷道跡(TG89-31)』『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告28
32	第32次 (TG89-32)	八文研	光町二丁目	111/9/25~ 10/7	成瀬佳子 1990 『4. 東郷道跡(TG89-32)』『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』財団法人八尾市文化財調査研究会報告28
33	第33次 (TG90-33)	八文研	桜ヶ丘一丁目	112/1/10~ 6/1	高萩千秋 1993 『IV 東郷道跡第33次調査(TG90-33)』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人八尾市文化財調査研究会報告41
34	第34次 (TG90-34)	八文研	本町七丁目	113/1/8~ 1/23	原田昌則 1999 『I 東郷道跡(第34次調査)』『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』(財)八尾市文化財調査研究会
35	第35次 (TG90-35)	八文研	光町二丁目	113/3/4~ 3/19	坪田西一 1993 『V 東郷道跡第35次調査(TG90-35)』『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書』財団法人八尾市文化財調査研究会報告41
36	第36次 (TG91-36)	八文研	光町一丁目	113/5/20~ 6/18	坪田西一 2007 『II 東郷道跡第36次調査(TG91-36)』『財団法人八尾市文化財調査研究会報告91』(財)八尾市文化財調査研究会

番号	調査名 (略号)	調査 主体	所在地	調査期間	文 献
37	第37次(T091-37)	八文研	本町一丁目	H3/6/3~ 9/30	原田昌剛 1999「Ⅱ東郷道跡(第37次調査)『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』(財)八尾市文化財調査研究会
38	第38次(T091-38)	八文研	本町二丁目	H4/2/19~ 2/20	岡田清一 1992「Ⅱ東郷道跡第38次調査(T091-38)」『八尾市立歴史文化財楽福調査報告』財団法人八尾市文化財調査研究会報告34
39	第39次(T092-39)	八文研	庄内町二丁目	H4/10/26~ 11/7	高萩千秋 1993「Ⅱ東郷道跡第39次調査(T092-39)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告39』(財)八尾市文化財調査研究会
40	第40次(T093-40)	八文研	光町一丁目	H5/6/3~ 6/25	高萩千秋 1994「Ⅱ東郷道跡第40次調査(T093-40)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
41	第41次(T093-41)	八文研	北本町二丁目	H5/8/30~ 9/6	高萩千秋 1994「Ⅱ東郷道跡第41次調査(T093-41)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
42	第42次(T093-42)	八文研	庄内町一丁目	H5/12/11~ 12/13	岡田清一 1995「Ⅱ東郷道跡(第42次調査)」『東郷道跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』(財)八尾市文化財調査研究会
43	第43次(T093-43)	八文研	庄内町二丁目	H5/12/13~ 12/27	高萩千秋 1994「Ⅱ東郷道跡第43次調査(T093-43)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
44	第44次(T093-44)	八文研	光町一丁目	H6/1/10~ 2/9	坪田真一 1998「Ⅱ東郷道跡第44次調査(T093-44)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』(財)八尾市文化財調査研究会
45	第45次(T093-45)	八文研	桜ヶ丘三丁目	H6/3/16~ 4/1	岡田清一 1995「Ⅱ東郷道跡(第45次調査)」『東郷道跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』
46	第46次(T094-46)	八文研	東本町一〜四丁目	H6/7/11~ 9/27	西村公助 1995「Ⅱ東郷道跡(第46次調査)」『東郷道跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告48』(財)八尾市文化財調査研究会
47	第47次(T094-47)	八文研	桜ヶ丘一丁目	H6/8/1~ 9/30	岡田清一 1995「Ⅱ東郷道跡第47次調査(T094-47)」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会 本書I
48	第48次(T094-48)	八文研	桜ヶ丘一丁目	H6/10/24~ 12/14	岡田清一 1995「Ⅱ東郷道跡第48次調査(T094-48)」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会 本書II
49	第49次(T095-49)	八文研	光町二丁目	H7/6/14~ 6/23	原田昌剛 1996「Ⅱ東郷道跡(第49次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』(財)八尾市文化財調査研究会
50	第50次(T095-50)	八文研	庄内町	H8/1/10~ 1/24	岡田清一 1999「Ⅱ東郷道跡第50次調査(T G95-50)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告63』(財)八尾市文化財調査研究会
51	第51次(T095-51)	八文研	東本町四丁目	H8/3/18~ 3/25	高萩千秋 1996「Ⅱ東郷道跡(第51次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』(財)八尾市文化財調査研究会
52	第52次(T096-52)	八文研	桜ヶ丘一丁目	H8/10/29~ 11/12	高萩千秋 1998「Ⅱ東郷道跡第52次調査(T G96-52)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
53	第53次(T096-53)	八文研	北本町二丁目	H8/12/2~ 12/12	高萩千秋 1998「Ⅱ東郷道跡第53次調査(T G96-53)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
54	第54次(T097-54)	八文研	北本町二丁目	H9/6/16~ 6/19	磯口 薫 2000「Ⅱ東郷道跡第54次調査(T G97-54)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
55	第55次(T099-55)	八文研	庄内町二丁目	H12/2/3~ 2/23	磯口 薫 2001「Ⅱ東郷道跡第55次調査」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会
56	第56次(T02000-56)	八文研	光町二丁目	H12/8/29~ 9/25	森本めぐみ 2003「Ⅰ.東郷道跡第56次調査(TG2000-56)」『八尾市立歴史文化財調査センター報告4 平成14年度』市教委。(財)八尾市文化財調査研究会
57	第57次(T02002-57)	八文研	本町一〜四丁目	H14/6/14~ 10/31	西村公助 2003「東郷道跡(第57次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』(財)八尾市文化財調査研究会
58	第58次(T02002-58)	八文研	桜ヶ丘一丁目	H14/12/2~ 12/24	磯口 薫 2005「Ⅱ東郷道跡第58次調査(T G2002-58)」『八尾市立歴史文化財調査センター報告6 平成16年度』市教委。(財)八尾市文化財調査研究会
59	第59次(T02003-59)	八文研	桜ヶ丘三丁目	H15/4/21~ 5/12	西村公助 2006「Ⅱ東郷道跡第59次調査(T02003-59)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告90』(財)八尾市文化財調査研究会
60	第60次(T02003-60)	八文研	桜ヶ丘三丁目	H15/5/6~ 6/11	磯口 薫 2004「23.東郷道跡第60次調査(TG2003-60)」『平成15年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』本書Ⅱ
61	第61次(T02003-61)	八文研	光町二丁目	H15/6/25~ 7/2	岡田清一 2004「Ⅰ.東郷道跡第61次調査(TG2003-61)」『八尾市立歴史文化財調査センター報告5 平成16年度』市教委。(財)八尾市文化財調査研究会
62	第62次(T02003-62)	八文研	桜ヶ丘一丁目	H15/12/15~ H6/1/15	西村公助 2006「Ⅱ東郷道跡第62次調査(T02003-62)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告90』(財)八尾市文化財調査研究会
63	第63次(T02003-63)	八文研	光町二丁目	H16/10/18~ H17/3/7	岡田清一 2005「Ⅱ東郷道跡第63次調査(TG2004-63)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告84』(財)八尾市文化財調査研究会
64	第64次(T02005-64)	八文研	光町二丁目	H17/7/4~ 10/4	坪田真一、島田裕弘、前井佳奈、村田恵理 2006「22.東郷道跡第64次調査(TG2005-64)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財
65	第65次(T02005-65)	八文研	光町一丁目	H18/1/26~ 2/28	室川和哉 2007「Ⅱ東郷道跡(第65次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告99』(財)八尾市文化財調査研究会
66	第66次(T02005-66)	八文研	光町一丁目	H18/3/17~ 3/20	西村公助 2007「Ⅱ東郷道跡(第66次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告91』(財)八尾市文化財調査研究会
67	第67次(T02006-67)	八文研	東本町三丁目	H18/4/10~ 4/25	西村公助 2007「Ⅱ東郷道跡(第67次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告97』(財)八尾市文化財調査研究会
68	第68次(T02007-68)	八文研	桜ヶ丘二丁目	H19/5/24~ 6/21	成瀬佳子 2009「東郷道跡第68次調査(T G2007-68)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告127』(財)八尾市文化財調査研究会
69	第69次(T02007-69)	八文研	北本町二丁目	H19/10/1~ 11/8	成瀬佳子 2009「東郷道跡第69次調査(T G2007-69)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告127』(財)八尾市文化財調査研究会
70	第70次(T02007-70)	八文研	本町七丁目	H20/3/3~ 4/25	坪田真一 2008「14.東郷道跡第70次調査(T G2007-70)」『平成19年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
71	第71次(T02008-71)	八文研	光町一丁目	H20/11/25~ 12/24	矢井友史 2009「9.東郷道跡第71次調査(T G2008-71)」『平成20年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
72	第72次(T02008-72)	八文研	光町二丁目	H21/1/19~ 2/4	木村健明 2009「10.東郷道跡第72次調査(T G2008-72)」『平成20年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』本書Ⅱ

番号	調査名(番号)	調査主体	所在地	調査期間	文 献
①	東郷瑞寺	八文研	桜ヶ丘二丁目	H11/9/6~9/16	高森千秋 2000『1. 東郷瑞寺遺跡第1次調査(TGT99-1)』『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告』八教委・(財)八尾市文化財調査研究会
②	市教委	市教委	本町一丁目	S56/3/3~3/27	末箱吉
③	市教委(90-531)	市教委	桜ヶ丘二丁目	H3/10/14	宿 審 1992『9. 東郷遺跡(90-531)の調査』『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業
④	市教委(91-330)	市教委	本町七丁目	H6/9/7	宿 審 1992『20. 東郷遺跡(91-330)の調査』『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業
⑤	市教委(91-303)	市教委	本町一丁目	H3/4/22~5/1	米田敏幸 1995『13. 東郷遺跡(91-303)の調査』『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告33 平成6年度国庫補助事業
⑥	市教委(94-730)	市教委	桜ヶ丘二丁目	H7/3/23・24	宿 審 1995『11. 東郷瑞寺(94-730)の調査』『八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書1』八尾市文化財調査報告33 平成7年度国庫補助事業
⑦	市教委(98-96)	市教委	桜ヶ丘二丁目	H20/6/6・9	磯口 薫 2009『12. 東郷瑞寺(2008-96)』『八尾市内遺跡平成20年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告69 平成20年度国庫補助事業
⑧	府教委62・63年度調査	府教委	桜ヶ丘・旭ヶ丘五丁目	S62/5~11	奥 和之ほか 1989『東郷遺跡発掘調査報告』I 大阪府教育委員会
⑨	東郷・成法寺 府教委第9次	府教委	町一四・五丁目、庄内町一丁目	H7/7~	1997『東郷・成法寺遺跡発掘調査報告』IX 大阪府教育委員会
⑩	東郷・成法寺 府教委第10次	府教委	庄内町一丁目	H8/6~	1997『東郷・成法寺遺跡発掘調査報告』IX 大阪府教育委員会

市教委・八尾市教育委員会 八文研・(財)八尾市文化財調査研究会 府教委・大阪府教育委員会 府調一・大阪府文化財調査研究センター

分流路の存在が指摘されており、遺跡の成立や推移を推定する手懸りを与えている。東郷遺跡の成立を見たこの扇状地性低地(氾濫原)は、八尾市の二俣地区を起点として北西方向にデルタ状に展開しており、南から東弓削・中田・矢作・小阪合・成法寺・東郷・佐堂・美園・萱振・西郡廃寺・山賀の各遺跡が連鎖的に存在している。これらの遺跡の大半が弥生時代前期～後期に成立しており、それ以降の時期も比較的周密な遺跡分布が看取され、発掘調査件数の増加と相俟って考古学的な資料の蓄積も多い。以下、東郷遺跡を中心として遺跡内の集落動態を時期毎に概観する。

弥生時代

東郷遺跡の成立は、周辺の遺跡群のなかでは比較的遅く、弥生時代中期後半(畿内第IV様式)である。この時期の集落は、遺跡範囲の中央部の第15次・第49次で検出されているが、散発的で時間的にも限定されていることから、比較的短期間で小規模な集落であったことが推定される。なお、第49次からは、紀伊産の土器が出土しており、当時の地域間交流の一端が窺える。続く弥生時代後期においては、居住域が遺跡範囲東部の第13次・第24次・第33次・第47次と西部の第69次で検出されている他、北部の第65次では墓域が検出されている。また、特筆すべき遺物としては、府教委による昭和62～63(1987～1988)年度の楠根川改修に伴う調査で古備地方産の向木見型特殊器台の小片が出土しており特殊器台の流通経路を推定するうえで注目される。

古墳時代

古墳時代初頭(庄内式期)～前期(布留式期)の集落は、遺跡範囲の北部、東部、南西部で検出されている。古墳時代初頭(庄内式期)の集落は、遺跡範囲内のほぼ中央部を横断する近鉄大阪線より北側を中心とする一帯で広範囲に亘って検出されている。そのうち、居住域については、近鉄八尾駅より北側の光町一～二丁目、北本町二丁目一帯に広がる西部居住域(第4次・第5次・第8次・第11次・第12次・第14次・第19次・第25次・第35次・第36次・第44次調査地)と近鉄八尾駅より東部に位置する桜ヶ丘一丁目、庄内町一丁目一帯に広がる東部居住域(第13次・第23次・第58次)がある。共に庄内式古相段階に成立した居住域で、西部居住域は庄内式期を通じて存続・拡大化を図るが、東部居住域は古相のみの居住域である。西部居住域からは、堅穴住居と掘立柱礎

物を中核とする住居構成が形成されており、第8次調査では床面に礫層を持つ堅穴住居が検出されている。墓域としては、西部居住域の北方および北西方に近接する第17次(1基)・第21次(1基)・第64次(23基)を中心とする北部墓域と南東部に近接する第20次(7基)の東部墓域の2箇所がある。成立時期は、北部墓域が庄内式古相、東部墓域が庄内式新相である。生産域は西部居住域の第25次で検出されており、さらに西部に拡がるのが推定される。なお、庄内式期の西部居住域の南端部分にあたる第46次のD区で検出されたNR-201以南は沼沢地が拡がっていたものと推定されており、それらを総合すれば庄内式期の集落は、集落域の南部を南東から北西方向に流下した自然河川の北側に形成された微高地を中心に展開しており、その規模は東西約550m、南北約450mが想定される。当該時期の集落からは東郷遺跡のみならず、中河内地域で検出された数多くの遺跡から、他地域産の土器類の搬入が顕在化している。土器型式ならびに胎土分析結果では、山陰・吉備・播磨・摂津・但馬・丹波・伊予・讃岐・阿波・近江・東海・南関東の各地域から搬入されており、瀬戸内海や北方に広がる河内湖および集落域の東部に存在した小阪合分流路を始めとする古大和川水系を媒介として各地域との活発な交流が窺える。

続く、古墳時代前期前半の布留式古相においては、中河内地域全域において集落数が爆発的に増加したことが明晰にされている。本遺跡においてもその傾向は顕著で、前代に比して集落の分散と拡大が認められており、概ね西部居住域、東部居住域、南西部居住域の3箇所にて区別できる。西部居住域は庄内式期の西部居住域を踏襲するもので、第5次・第28次・第44次が中心とする東西100m、南北150mの範囲に展開している。東部居住域は庄内式期の東部居住域を包括して南北方向に展開している。北から市教委86-419・第60次・第61次・第24次・第22次・第48次・第47次・第33次・第58次・第39次・第43次・第42次の調査地で、東西約150m、南北約750mに展開している。南西部居住域は遺跡範囲の南西端にあたる市教委昭和56年度調査(八尾小学校プール)地から南の成法寺遺跡に続く居住域である。居住域の規模においては、東部居住域が最も大きく南北方向に連鎖状に広がるため、東接し南北方向に流路を持つ小阪合分流路の西岸に展開した居住域であったものと想定される。布留式期の居住域の在り方は、急激に集落域の拡大を図るものの、存続期間は布留式古相の範囲内を中心とする比較的短期間のもので大半を占めている。布留式中～新相段階の居住域の動態は、遺跡範囲北部の第64次を除けば散発的で、当該期の居住域の中心は北東接する萱振遺跡南部一帯が想定される。墓域としては、遺跡北部の第64次・第24次で4世紀中葉から後期に比定される古墳が検出されている。第64次調査では、一辺約22mを測る中河内最古級の方墳や幡付円筒埴輪等が検出されており、東接する萱振遺跡南部に存在した集落や南東部に近接する小阪合遺跡北西部に展開した集落を包括した地域首長の存在が想定される。

古墳時代中期の居住域は遺跡範囲の北東部に集中して検出されている。居住域は北から第45次・市94-369・第60次・第1次・市88-499・第2次・第13次・第47次の東西約200m、南北約350mの範囲に広がっている。居住域はTK208型式(5世紀中葉)段階に北部で成立し、TK47型式(5世紀末)段階にかけて南部に拡大したことが窺える。

続く、後期の居住域は中期の居住域にほぼ重複する形で推移している。居住域は北から第45次・第1次・第23次・第6次で検出されている。古墳としては、遺跡範囲北西部の第54次・第69次付近が想定され、古墳周溝の検出や耳環等の遺物が出土している。

飛鳥時代～奈良時代

飛鳥時代の集落は遺跡範囲の東部および南西部で検出されている。東部では、第45次で検出されている他、桜ヶ丘2丁目59では平成3年1月の市教委(90-531)の調査で「東郷廃寺」と命名された古代寺院跡の存在が確認されている。東郷廃寺は原山廃寺式の軒丸瓦を創建瓦とするもので、出土した屋瓦から飛鳥時代中期(7世紀中葉)～平安時代(9世紀前半)の存続が推定されている。東郷廃寺の西部一帯では、古墳時代後期から存続する集落が存在しており、これらが東郷廃寺の建立を推進した古代氏族の居住地と推定される他、寺院跡に東接する地点で行われた河川改修工事に伴う調査では統一新羅系土器が出土しており、造営氏族の出自を考える上で示唆的である。奈良時代の集落も前代と同様、東郷廃寺の西部を中心に展開しており、東郷遺跡の南約200m地点の若草町で平成9年～平成10年に大阪文化財調査研究センターにより実施された小阪合遺跡第1次調査では、居住域を構成する遺構群が検出されている。なお、当遺跡発見の嚆矢となった東本町2丁目(光明寺裏付近)出土の墨書人面土器については、遺物の性格からみて南方の成法寺遺跡内で検出された集落との関係が推定される。

平安時代～鎌倉時代

平安時代、東郷遺跡範囲は若江郡に属していた。『和名類聚抄』によれば、若江郡は北から川俣郷・余戸郷・新治郷・鉾織郷・巨麻郷・刑部郷・弓削郷の7郷に分かれ、そのうち東郷遺跡の範囲は刑部郷の北部に含まれていたものと推定される。遺跡範囲内の式内社としては、長柄神社、栗栖神社がある。

平安時代の集落は、前期では遺跡東部の東郷廃寺周辺の第1次・第33次・第47次・第48次・第52次で検出されている。これらの居住域は、前期のみに集中する傾向が顕著であり、東郷廃寺の衰退と同調して、集落域の移動を余儀なくされたものと推定される。その後、新たに集落が形成されるのは平安時代後期で、遺跡の中央部から西部にかけての広い範囲でその拡がり確認されている。なかでも、第28次調査からは、「永」ではじまる紀年名が記された平安時代後期の曲物井戸側が検出されている。「永保」(1081～084)、「永長」(1096～1097)、「永久」(1113～1118)のいずれかに該当するもので、当該期の土師器皿、瓦器柄の実年代を推定するうえでの基準資料となっている。そのほか、遺跡西部の常光寺や式内社の栗栖神社(現八尾神社)周辺で検出された平安時代後期(12世紀前半)の集落はその後、鎌倉時代後半(13世紀)に至るまで継続している。そのほか、常光寺の東部一帯からは、平安時代後期から鎌倉時代の屋瓦が出土しており、この付近に寺院建物が存在していた可能性が高い。

室町時代～戦国時代

南北朝の動乱期には、遺跡範囲西部の常光寺・栗栖神社(現八尾神社)を含む八尾城は南北朝攻防の最前線であったようで、延元二(1337)年十月には八尾城の堂舎、仏閣、矢蔵、役所が焼失したことが『和田文書』に記されている。その後、南北朝の動乱が終息した元中二(1385)年に又五郎大夫藤原盛継により常光寺の新伽藍が建立されている。常光寺の北西地点で行われた発掘調査では、14世紀代の遺物ともに焼土が検出されており、これらが延元二(1337)年の戦記に関わる可能性がある。室町時代末期には畠山氏の家督継承に端を発する応仁の乱が勃発し、八尾城も菅振城や東大阪市の若江城などと共に、30年の長きにわたって戦乱の巻となっている。天正八(1580)年の織田信長の近畿統一後、八尾城はキリシタン大名の池田丹後守教正の配下になっている。当

時八尾には、800人のキリシタンと仮聖堂2箇所があったことが記されており、西郷共同墓地からは天正十(1582)年銘のあるキリシタン墓碑が見ついている。この様に、室町時代～戦国時代の長きにわたって河内地域は戦乱の渦中で、この時期の集落は、防御を目的として集約された集村化を余儀なくされたようである。この時期の集村化は中河内地域の全域で見られる現象で、東郷遺跡においても14世紀以降の集落は、八尾城の周辺で僅かに検出されているに過ぎない。

注記

註1 東郷遺跡周辺の郡名については、諸説がある。

- ・ 人田 亮 大正14年『日本国誌資料叢書 河内』では、刑部郷
- ・ 『日本地理志料』刑部郷
- ・ 『大阪府の地名』では東郷村を巨麻郷

註2

「永(□□□) □ 二月廿三日福 □□□」

- ・ 原田昌則 1989「3 東郷遺跡(第28次調査:光町1丁目47)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度(財)八尾市文化財調査研究会報告25』(財)八尾市文化財調査研究会

参考文献

- ・ 沢井浩三 1958「第三章 第五節」『八尾市史』八尾市史編纂委員会
- ・ 榎橋利光 1977『式内社調査報告 第四巻 河内国』式内社研究会
- ・ 1977「一、考古出土品 人面土器」『八尾市史 文化財編』八尾市史編集委員会
- ・ 森田康雄 1980「八尾編年史<古代・中世編>」『八尾市民文化双書No.1』八尾市立図書館
- ・ 前田航二郎 1982『城と陣屋シリーズ 147号 八尾城』日本古城友の会
- ・ 榎橋利光 1983『城と陣屋シリーズ 152号 河内豊振城』日本古城友の会
- ・ 奥 和之他 1989『東郷遺跡発掘調査概要・I』大阪府教育委員会
- ・ 中井 均 1991「中世の民館・寺そして集落—西国を中心として—」『中世の城と考古学』御新人物往来社
- ・ 原田昌則 2008「I 萱振遺跡(第12次調査) II 萱振遺跡(第14次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告 109』(財)八尾市文化財調査研究会

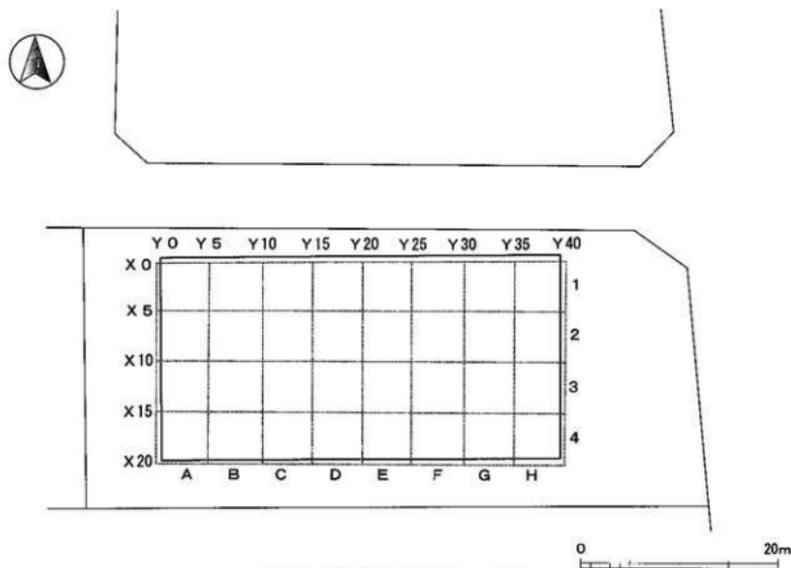
第3章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

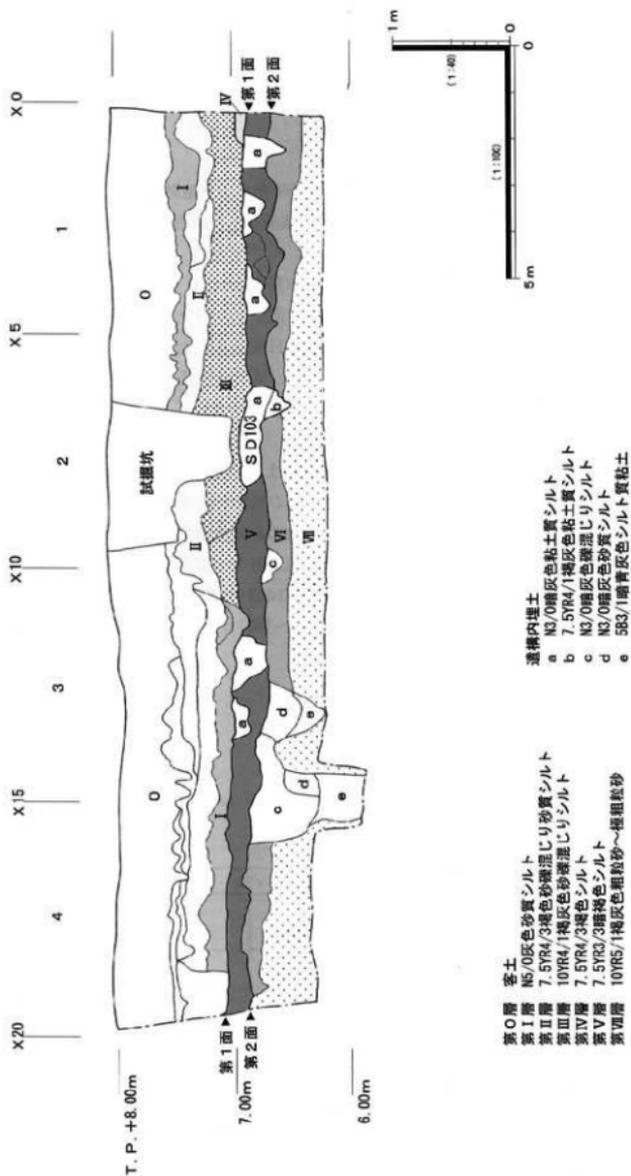
今回の調査は共同住宅建設工事に伴うもので、当研究会が本遺跡内で実施した第47次調査(TG94-47)にあたる。調査範囲は共同住宅建設により破壊される東西約38m×南北約20mで面積は約760㎡を測る。

調査区内の地区割りは、調査地の北西部に任意の基準点(X0・Y0)を設け、そこから5m単位に区画した。地区名は北西隅を基点として東西方向がアルファベット(西からA～H)、南北方向が算用数字(北から1～4)で示し、1A地区～4H地区とした。地点の表記については、X・Y軸の交点の数値で示した。調査面の呼称については、人力による調査で検出された面を上部より「第1面」とした。遺構番号は、遺構略号の後に面番号を付与し、3～4桁の遺構番号を合わせて表記した。

掘削方法は、現地表から0.5m前後間に堆積する盛土(第0層)、さらに0.2m前後の耕作土層(第I層)を重機によって排除した後、以下、0.5m前後の堆積層を人力で掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。残土処理の関係から、調査区を東西方向に北区と南区に二分する方法を取り、南部から調査を実施した。2面に亘る調査を実施した結果、第1面で古墳時代中期から平安時代前期に比定される掘立柱礎物10棟(SB101～110)、柱穴210個(SP101～1210)、井戸7基(SE101～107)、古墳時代中期に比定される土坑3基(SK101～103)、溝3条(SD101～103)を検出した。



第2図 調査地地区割り図(S=1/500)



第3図 西壁断面図(水平S=1/100、垂直S=1/40)

第2面では、南区の東部を対象に調査を実施した結果、古墳時代前期の柱穴3個(S P 201~203)、溝1条(S D 201)、落ち込み1箇所(S O 201)、土器集積1箇所(S W 201)を検出した。出土遺物は弥生時代中期から鎌倉時代に比定される弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、屋瓦、土製品、木製品、石製品等が出土しており、総数はコンテナ15箱に及ぶ。

第2節 層序(第3図)

南区の南半分程度が東西方向に伸びる島畑間の水田部分にあたるため、この部分については、上部から約60cm程度の削平を受けていた。それ以外については、シルトの優勢な比較的安定した層相が認められた。ここでは普遍的に存在した8層(0~Ⅶ層)を抽出して基本層序とした。

第0層：客土。層厚0.05~0.85m前後。

第Ⅰ層：N5/0灰色砂質シルト。作土層。層厚0.25m前後。近・現代のものである。

第Ⅱ層：7.5YR4/3褐色砂礫混じり砂質シルト。層厚0.1~0.25m。調査区のほぼ全域に分布する。

中世の作土層で全般に淘汰が不良である。細片化した中世遺物を含む。

第Ⅲ層：10YR4/1褐灰色砂礫混じりシルト。層厚0.15~0.4m。上部は酸化鉄の斑点が多く付着している。古墳時代中期~平安時代の遺物を含む。

第Ⅳ層：7.5YR4/3褐色シルト。層厚0.1~0.3m。主に北区を中心に堆積している。飛鳥時代から平安時代前期の遺物が含まれている。土壌化が著しく、硬く締まっている。

第Ⅴ層：7.5YR3/3暗褐色シルト。層厚0.15~0.3m。土壌化が顕著で、上部には酸化鉄の斑点が数多く認められる。飛鳥時代から平安時代前期の遺物を含む。上面で古墳時代中期から平安時代前期の遺構を検出している(第1面)。

第Ⅵ層：5YR5/2灰褐色砂礫混じりシルト。層厚0.1~0.3m。古墳時代初頭から飛鳥時代までの遺物を含む。南区の南東部のみで調査を実施しており、古墳時代前期の柱穴・溝・土器集積を検出している(第2面)。

第Ⅶ層：10YR5/1褐灰色粗粒砂~極粗粒砂。層厚0.5m以上。層中から弥生時代中期から古墳時代前期の遺物を含む。既往調査の成果から、弥生時代後期以前の河川堆積層が想定される。部分的に極細粒砂~シルト層の砂泥互層が認められ、上層部には粗粒砂層中にシルト質細粒砂のラミナが挟在する。

第3節 検出遺構と出土遺物

1) 第1面〔古墳時代中期から平安時代前期〕(第4図、図版一・二)

現地地表1.2m前後(T.P.+6.9m前後)に存在する第V層上面で、古墳時代中期から平安時代前期に比定される掘立柱建物10棟(SB101~110)、井戸7基(SE101~107)、柱穴211個(SP101~1211)、古墳時代中期に比定される土坑3基(SK101~103)、溝3条(SD101~103)を検出した。

掘立柱建物(SB)

掘立柱建物10棟(SB101~110)検出した。調査地のほぼ全域にわたって分布している。建物の主軸方位の偏在性から、主軸をN32°~40°Wに持つSB101・102・105・109のAグループ、N15°~18°Wに持つSB103・104・110のBグループ、ほぼ磁北に持つSB106~108のCグループに分類できる。

Aグループには、平地式のSB101・105・109と高床式のSB102があり、建物を構成した柱穴や建物の周辺に点在する柱穴・小穴から出土した遺物から帰属時期は飛鳥時代前期が推定される。

Bグループは、SE101~103との関わりが推定されるため帰属時期は奈良時代後期が推定される。Cグループについては、建物に付随したSE104~107からみて平安時代前期が推定される。これらの掘立柱建物を構成した柱穴内からは、土器類のほか、根石とみられる花崗岩あるいは凝灰岩や焼土塊が混入するものが確認された。また、深さが10cmに満たないものも存在することから考えて、中世以降の耕地化に伴い、かなり削平を受けたことが窺われる。なお、各柱穴の形状・法量・出土遺物の詳細については、第2表に掲載した。

SB101(第5図)

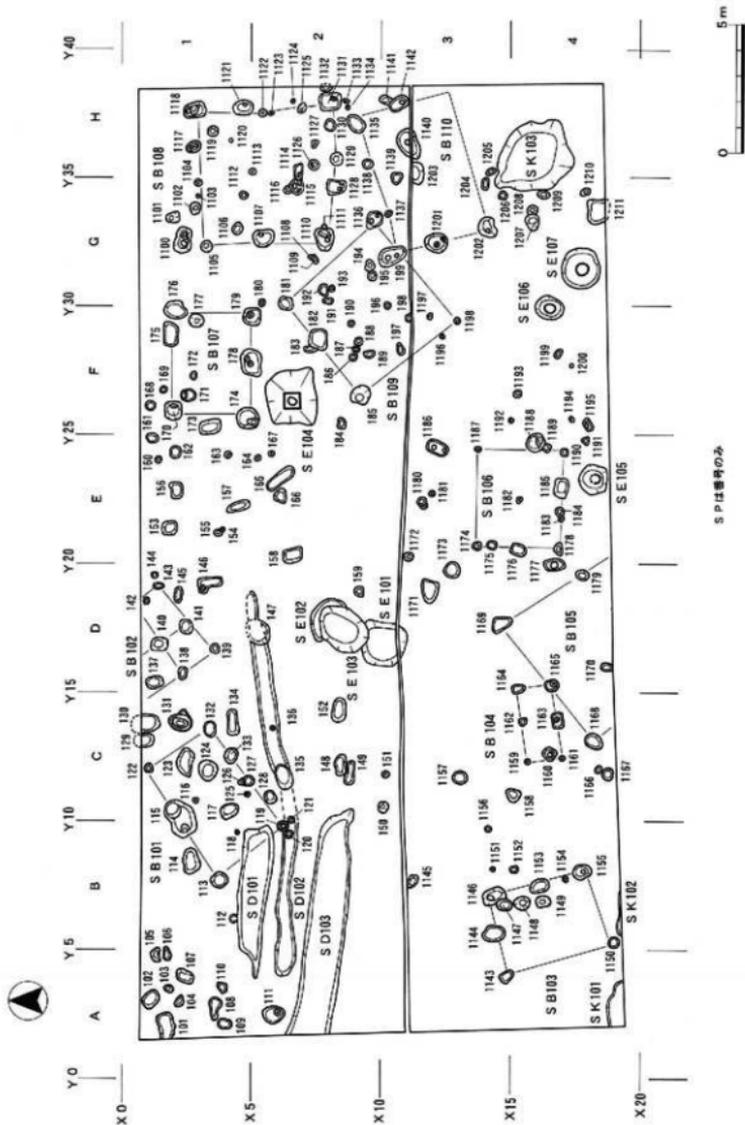
調査区北西部の1・2BC地区で検出した。一部の柱穴は確認できていないが、北西-南東1間(2.9~3.2m)、北東-南西2間(4.8m)を測る。桁行(北東-南西)方向の柱間2.2~2.5m、梁間(北西-南東)方向の柱間2.8~3.2mを測る。主軸方向はN38°Wで、床面積14.4㎡を測る。柱穴はSP113・115・119・122・127・132で構成されている。柱穴の形状は円形ないし楕円形で、規模は幅37~60cm、深さ13~29cmを測る。埋土は10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルトである。柱穴のうち、SP122の底面には根石と考えられる一辺20cm前後、厚さ8cm前後の方形を呈する花崗岩が水平に置かれていた。

SB102(第5図)

SB101の東に近接している。北部は調査区外に至るため全容は不明であるが、柱穴の配列からSB101と同様に主軸方向は北東-南西方向である。確認できた柱穴はSP138~141・143で、復元規模は北西-南東2間(3.5m)以上、北東-南西2間(3.2m)を測る。柱穴の形状は不整形が大半で、規模は幅38~64cm、深さ10~53cmを測る。埋土は10YR5/1褐灰色細粒砂混じりシルトである。柱根を検出したSP140からみて高床構造の建物が想定される。

SB103(第5図)

調査地南西部の3・4AB地区で検出した。一部の柱穴を欠くが、規模は北西-南東2間(3.8~4.2m)、北東-南西2間(3.0m)を測る。桁行(北西-南東)方向の柱間1.0m、梁間(北東-南西)方向の柱間1.5mを測る。主軸方向はN18°Wで、床面積12㎡を測る。柱穴はSP1143・1144・1146・1150・1153・1155で構成される。柱穴の形状は円形、方形が中心で幅38~64cm、深さ10~53cmを



第4図 第I面 平面図(S=1/200)

測る。埋土は10YR5/1褐色細粒砂混じりシルトである。

SB104(第5図)

4CD地区で検出した。東西2間(2.8m)、南北1間(1.2m)を測る小規模な掘立柱建物である。桁行(東西)方向の柱間2.8m、梁間(南北)方向の柱間1.2mを測る。主軸方向はN6°Wで、床面積3.4㎡を測る。柱穴はSP1159・1161~1165で構成されている。柱穴の形状は円形および方形で規模は幅30~68cm、深さ10~30cmを測る。埋土は10YR5/1褐色細粒砂混じりシルトである。

SB105(第5図)

SB104と隣接している。南東部分が調査区外のため全容は不明である。検出部分で東西2間(5.7m)、南北2間以上(5.6m以上)を測る。主軸方向はN32°Wである。柱穴の形状は不定形で規模は幅45~98cm、深さ15~23cmを測る。根石がSP1169で確認されている。

SB106(第5図)

SB105の東に隣接している。部分的に柱穴が確認できない箇所はあったが、規模は東西3間(3.7m)×南北2間(3.2m)を測る東西棟建物である。桁行(東西)方向の柱間1.0~1.2m、梁間(南北)方向の柱間1.5m前後を測る。主軸方向は磁北で、床面積11.5㎡を測る。柱穴はSP1174・1176・1178・1183・1185・1187・1190で構成される。柱穴の形状は円形ないしは不整形で規模は幅29~68cm、深さ11~18cmを測る。埋土は10YR6/1褐色細粒砂混じりシルトである。

SB107(第6図)

調査区北東部の1F地区で検出した。一部柱穴が確認できない箇所はあったが、規模は東西2間(4.0m)、南北1間(2.8m)を測る東西棟建物である。桁行(東西)方向の柱間2.0m前後、梁間(南北)方向の柱間2.8mを測る。主軸方向は磁北で、床面積12㎡を測る。柱穴はSP170・174・176・178・179で構成される。柱穴の形状は円形および方形で、規模は幅68~100cm、深さ21~55cmを測る。埋土は2.5Y6/1黄灰色砂礫混じりシルトである。

SB108(第6図)

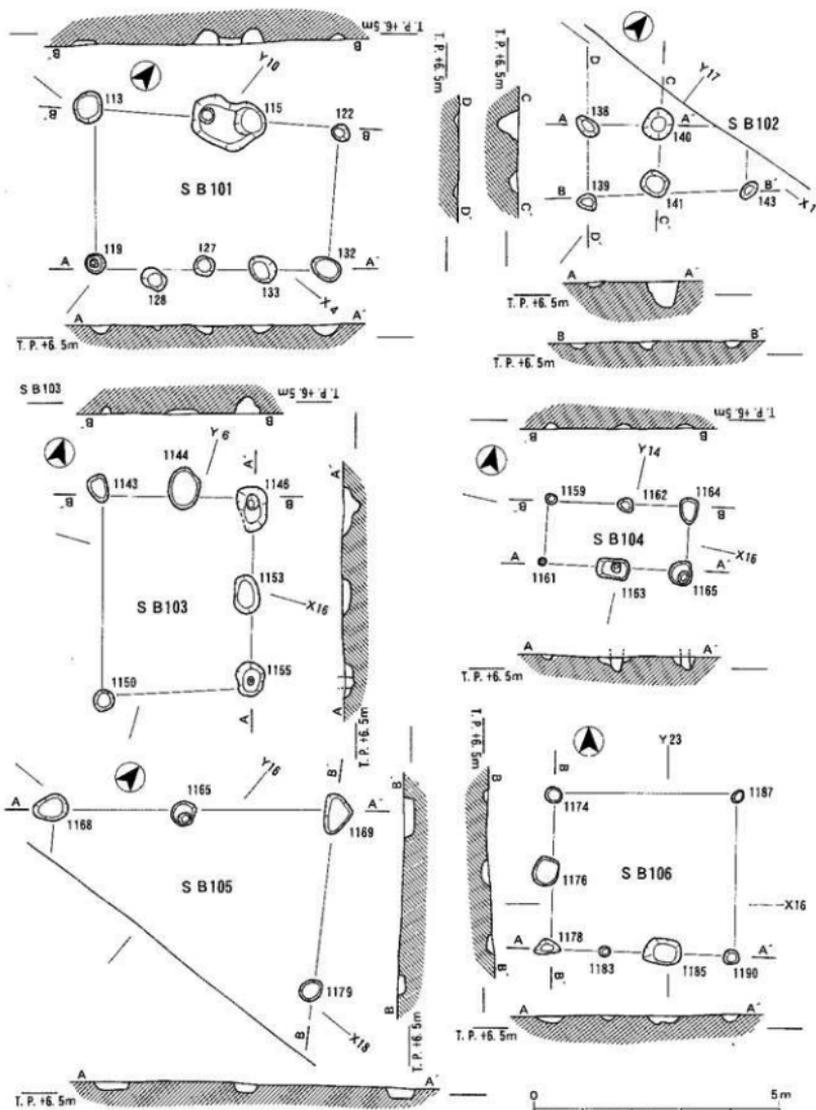
SB107の東に隣接して検出された。部分的に削平される柱穴はあったが、規模は東西2間(5.5m)、南北2間(5.5m)を測る東西棟建物である。桁行(東西)方向の柱間2.5~2.8m、梁間(南北)方向の柱間2.3~2.5mを測る。主軸方向は磁北で、床面積30.3㎡を測る。柱穴はSP1104・1105・1107・1110・1118・1122・1129・1131で構成される。今回検出したなかでは最大規模を有する。柱穴の形状は方形、不整形が大半で幅18~88cm、深さ7~15cmを測る。埋土は2.5Y6/1黄灰色砂礫混じりシルトである。

SB109(第6図)

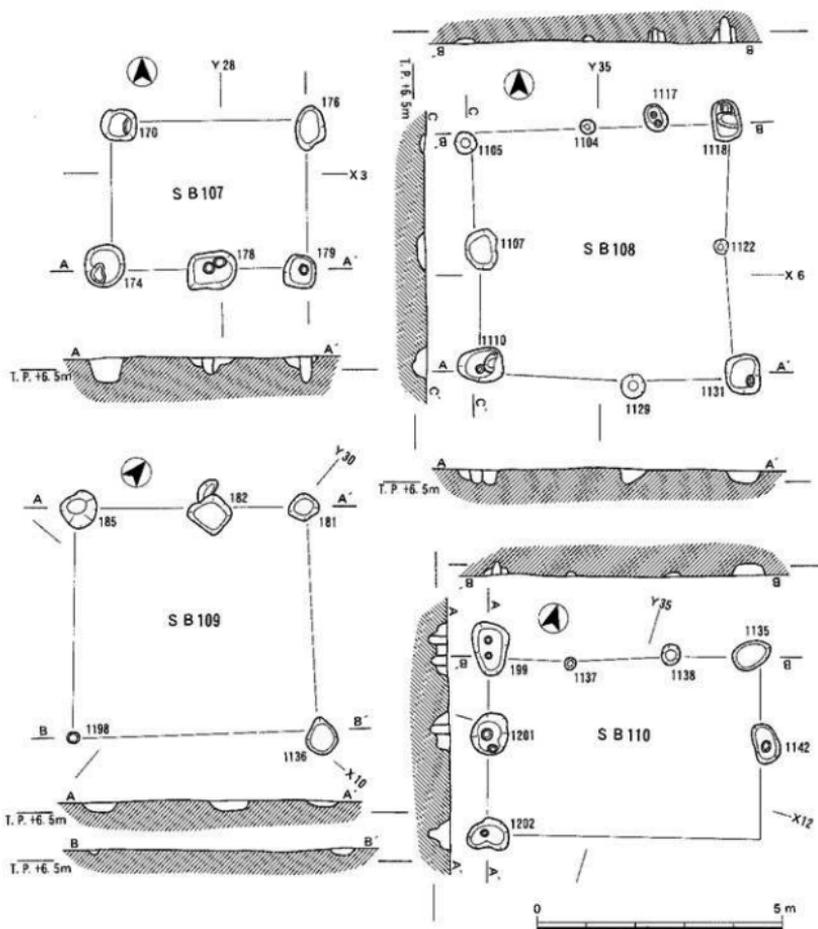
SB107・108・110と隣接している。一部の柱穴は確認できていないが、北西-南東1間(4.7m)、北東-南西2間(5.0m)を測る。桁行(北東-南西)方向の柱間2.0~2.7m、梁間(北西-南東)方向の柱間4.7mを測る。主軸方向はN37°Wで、床面積23.5㎡を測る。柱穴はSP181・182・185・1136・1198で構成されている。柱穴の形状は不整形が大半で幅47~75cm、深さ11~21cmを測る。埋土は2.5Y6/1黄灰色砂礫混じりシルトである。

SB110(第6図)

SB109の東で検出した。部分的に削平された柱穴はあるが、規模は北西-南東2間(4.0m)、北東-南西3間(5.3m)を測る。桁行(北東-南西)方向の柱間1.5~2.0m、梁間(北西-南東)方向



第5圖 SB101~106平断面圖(S=1/100)



第6図 SB107~110 平面図 (S=1/100)

の柱間2.0mを測る。主軸方向はN15° Wで、床面積21.2㎡を測る。柱穴はSP 199・1201・1202・1137・1138・1135・1142で構成される。柱穴の形状は楕円形、不整形楕円形が中心で幅40~113cm、深さ11~40cmを測る。埋土は2.5V6/1黄灰色砂礫混じりシルトである。

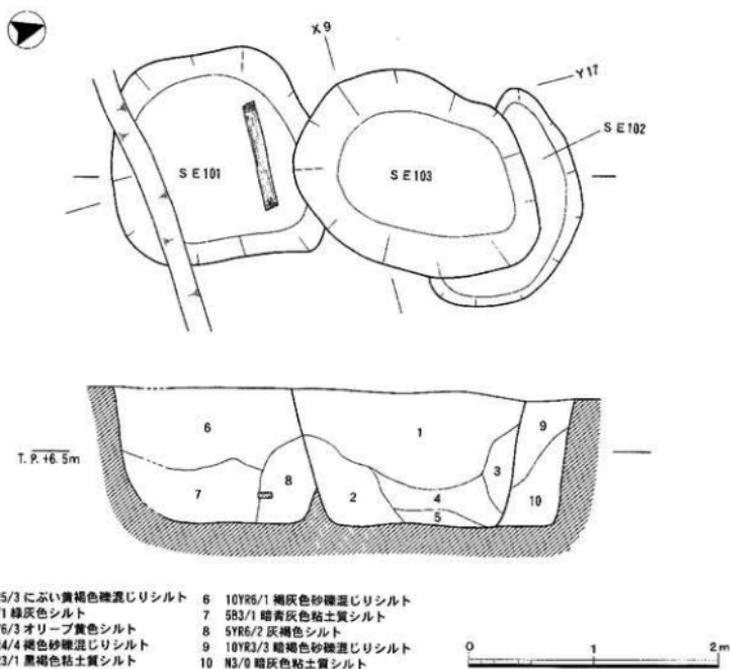
井戸(SE)

SE101~103(第7・8図、図版三・八)

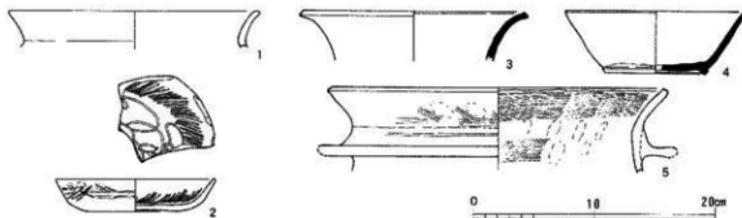
SE101~103の3基は、2・3D区で互いに切り合った状態で検出した。SE103がSE101の掘方北部とSE102の掘方南西部を切っている。掘方の平面形状については、3基ともに検出状況から楕円形、断面は逆台形を呈する。井戸側については、SE101・103の埋土内から板材、さらに埋土断面で観察される抜き取りの痕跡から、桶状の井戸側が使用されていたものと推定されるが、SE102についてはSE103により大部分が削平されており、詳細は不明である。

各井戸の法量は、SE101が長径(復元)2.00m、短径1.70m、SE102が長径1.80m、短径(復元)1.0m、SE103が長径2.10m、短径1.50mを測る。深さは各井戸ともに1.0m前後を測る。

遺物は各井戸から奈良時代後期を中心とする須恵器杯・壺、土師器杯・甕、部材が少量出土している。数量ではSE101-13片、SE102-7片、SE103-21片を数える。そのうち図化できたものは、SE101から土師器羽釜蓋1点(5)、SE103から土師器甕1点(1)・杯1点(2)、須恵器壺1点(3)・杯1点(4)の5点である。1は土師器甕の口縁部細片。2は土師器杯Aの細片。内面に放射状暗文と螺旋状暗文が施文される。3は須恵器壺の口縁部細片。口縁部は外反し、外傾する小端面を作る。4は須恵器杯Bで1/2が残存。平底の外周付近に高台を貼り付けたもので、



第7図 SE101~103 平断面図(S=1/40)

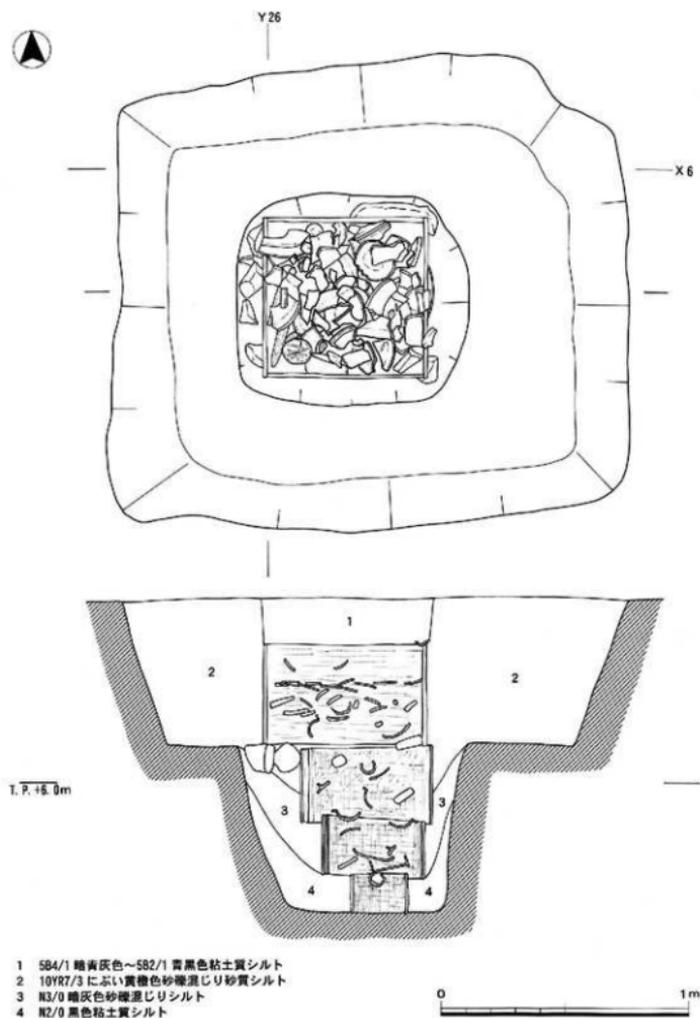


第8図 SE101(5)、SE103(1~4)出土遺物実測図

口縁・体部は斜上方へ直線的に伸びる。5は土師器羽釜片である。切り合い関係からみて最も新しい時期に比定されるSE103からは、2のようにやや古い時期のものを除けば奈良時代後期を中心とする遺物が出土していることから、SE101・102についてはそれ以前の構築が推定される。

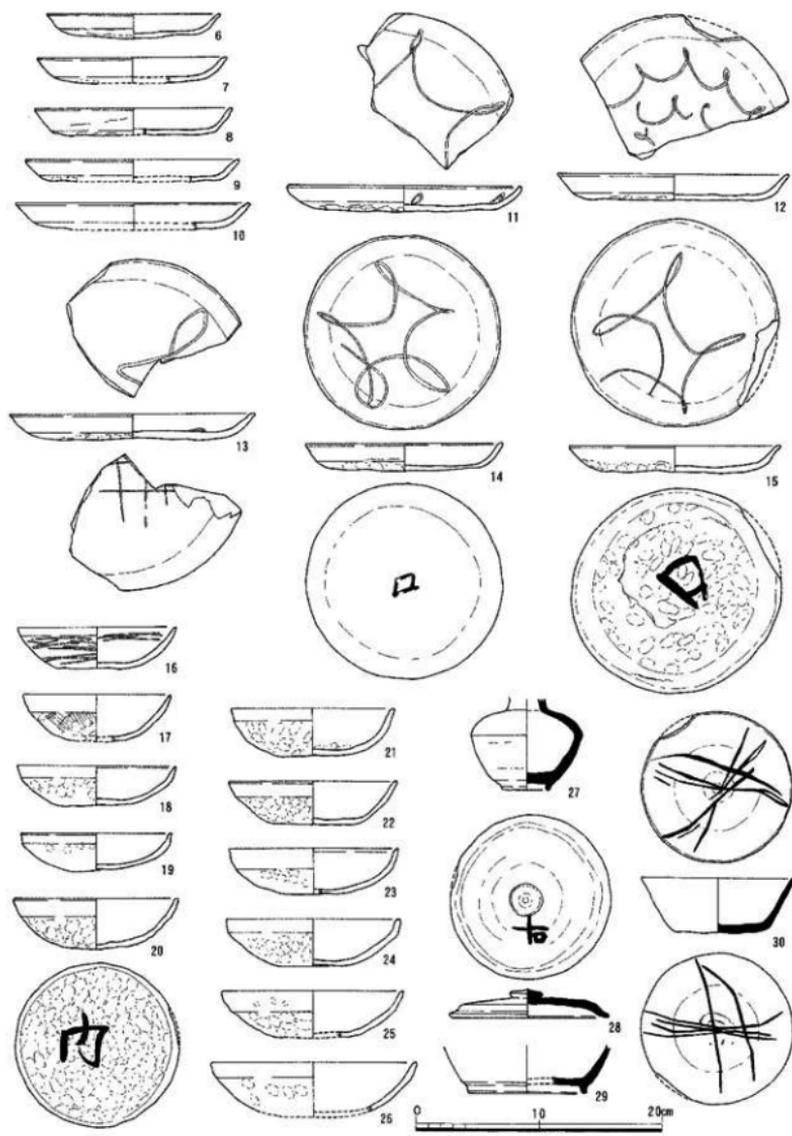
SE104(第9~13図、図版三・四・九~十二)

2F地区で検出した。SB107の南側、SB109の北西側に隣接している。横板井籠組と曲物を井戸側を持つ井戸である。掘方は平面が一辺2m前後の方形、断面は深さ約1.28mを測る逆凸形を呈する。井戸側となる木組みは、長さ0.65m前後、幅0.4m前後、厚さ0.04m前後を測る横板4枚分を井籠組にしている。さらにその下方には曲物3段が埋設されている。各曲物の法量は、上段一径54cm・高さ30cm、中段一径42cm・高さ25cm、下段一径22cm・高さ16cmを測る。埋土は4層で、そのうち1層が井戸側内である。井戸側内からは、奈良時代末~平安時代初頭にかけての土師器皿・杯・甕・鉢・羽釜、須恵器蓋杯・杯・壺のほか、ミニチュア土製品、砥石、墨瓦、横櫛など多岐にわたる遺物が多量に出土している。破片を含めた総数は217片を数える。そのうち図化できたものは、土師器皿10点(6~15)、土師器椀11点(16~26)、須恵器小型壺1点(27)、須恵器蓋杯1点(28)、杯2点(29・30)、土師器壺6点(31~36)、土師器羽釜6点(37~42)、ミニチュア壺1点(43)、ミニチュア甕1点(44)、把手1点(45)、土師器鉢1点(46)、砥石2点(47・48)、平瓦3点(49~51)、曲物容器1点(52)、横櫛2点(53・54)、井戸側部材5点(55~59)の計54点である。6~15は土師器皿Bで、口径が14~20cm、器高が2cm前後を測る。色調は11・12が白色系で、それ以外は黄橙~褐色系を呈する。口縁端部の形態では丸みをもつもの6・9・11・14・15と、外側につまみ出すもの7・8・10・12・13に分類できる。11~15の内底面には螺旋状の暗文が施される。また、13の外底面には焼成後に九字紋のヘラ記号、14・15の外底面には「口」の字状の文様の墨書が認められる。16~26は土師器椀Aである。16のみ内外面にヘラミガキ調整が行われているが、他については、口縁部外面にヨコナデ、以下の体部外面が指頭圧成形で、内面については全体にナデが行われている。20の外底面には「内」の墨書が見られる。27は須恵器壺で、口頸部を欠く。肩の張る小型品で、すばまった底部外周に貼り付けの小さな高台が付く。28は須恵器蓋杯の完形品である。扁平な摘みを有し、天井部から口縁部にかけての屈曲が顕著である。また、上面の摘みに近接して「右」の字状の墨書がある。内面の全面に墨が認められるため転用硯の可能性がある。29は須恵器杯の細片。底部外周に高台を貼り付ける。30は須恵器杯の完形品。平坦な底部から斜上方へ直線的に伸びる口縁・体部を有する。内外面には、焼成時の重ね焼きの際に生じた火禰と呼ばれる条痕が明瞭に残る。31~36は土師器壺Bである。口径の数値から12.9~14.3cmを測る小形品(31~33)と17.0~18.0cmを測る中形品(34~36)に区別できる。球形の体部

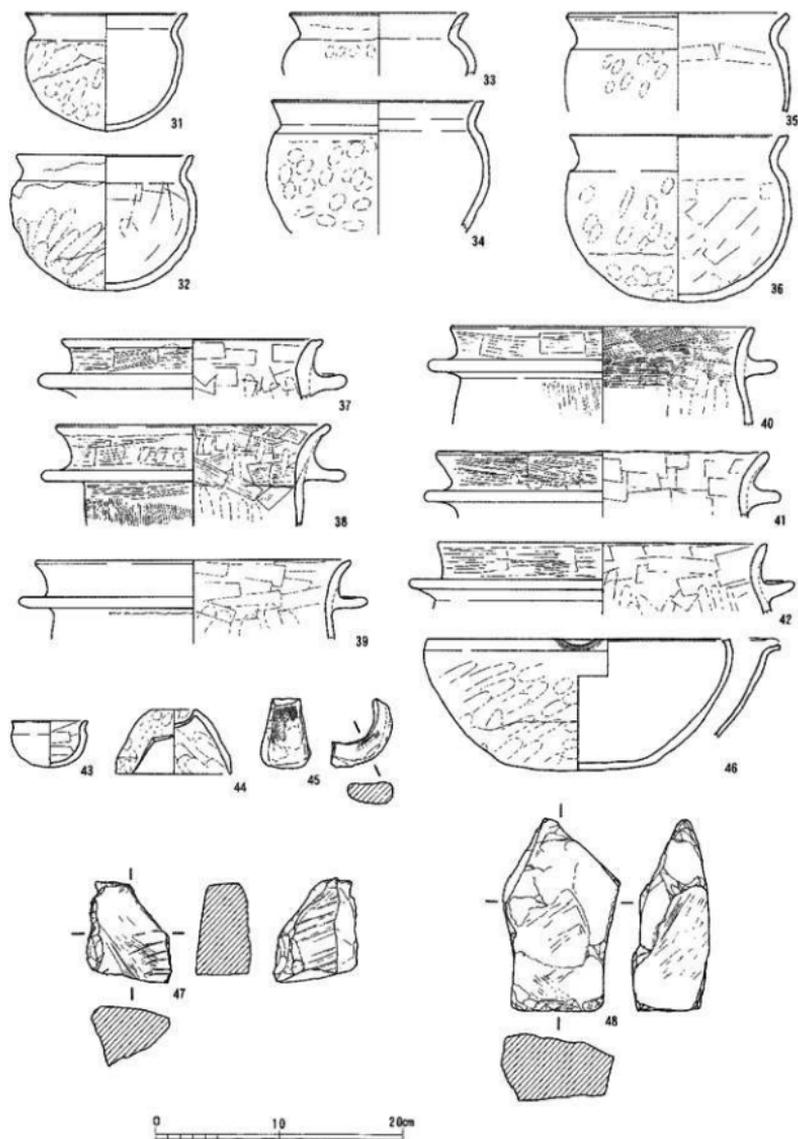


第9図 SE104 平面図(S=1/20)

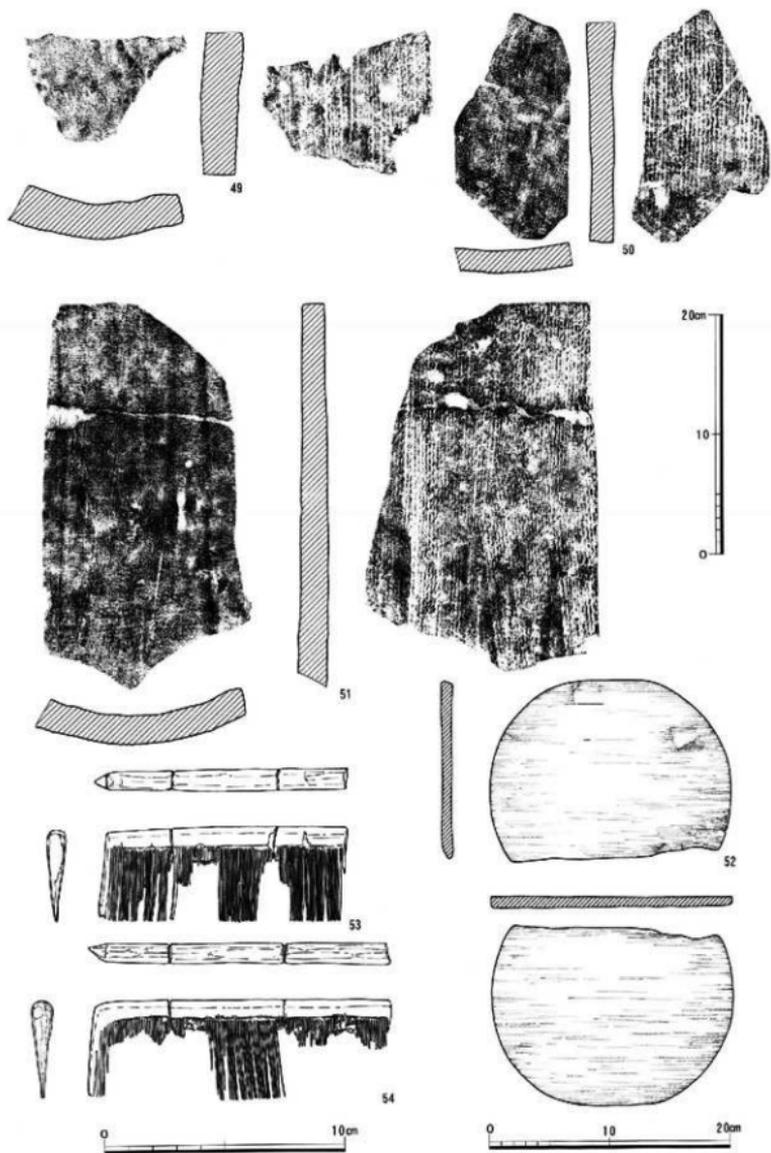
から緩やかに屈曲して外反気味に伸びる口縁部に至る。体部外面にはユビナゲないしは指頭圧痕が顕著に認められる。37～42は土師器羽釜片である。いずれも口縁部直下にほぼ水平で短い鏝を巡らすもので、体部は欠損しているがいわゆる「砲弾形」を呈するものと思われる。すべて胎土中に角閃石を含む生駒西麓産で、色調は茶褐色系を呈する。菅原正明氏分類(菅原1982)の河内A型



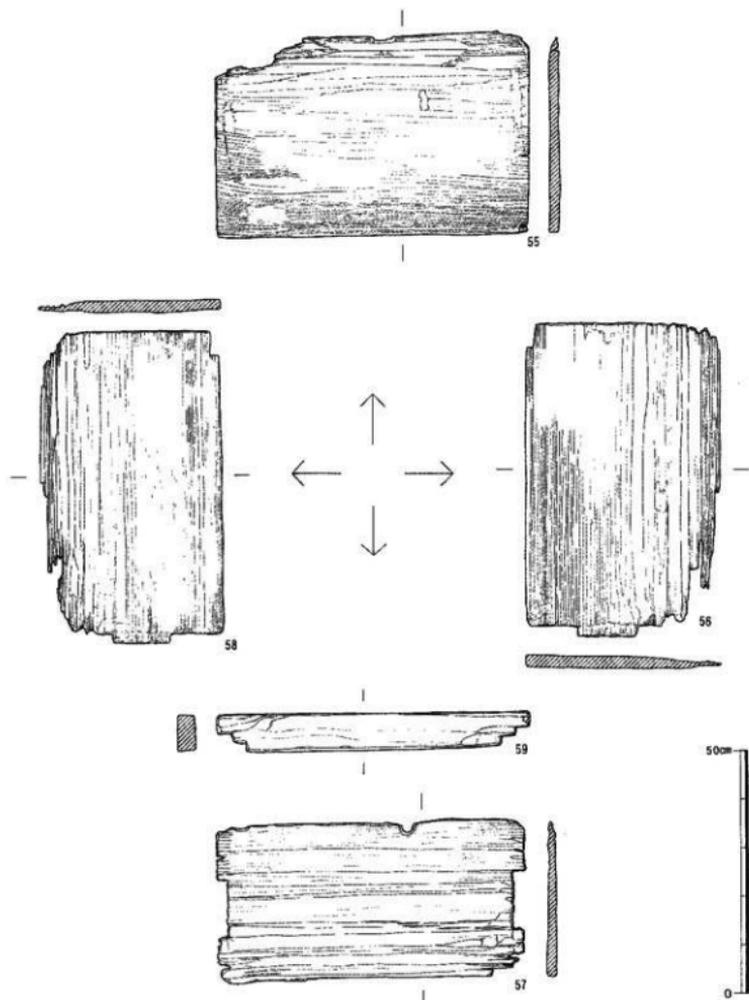
第10圖 SE104出土遺物実測図—1



第11圖 SE104出土遺物実測圖—2



第12圖 SE104出土遺物実測圖—3



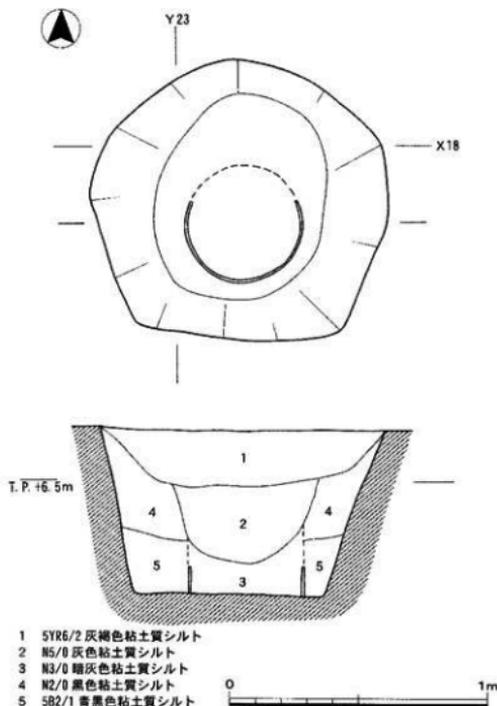
第13図 SE104出土遺物実測図—4

に比定される。43は土師器のミニチュア壺で形態は土師器壺Bにあたる。半球形の体部に短く外反する口縁部を有する。44は土師器のミニチュア甕。手づくね品で、器壁が比較的薄い。焚口部分の底が省略されている。45は土師器甕の把手であろう。46は注口を持つ土師器鉢。体部は口縁部付近で強く内彎するもので、口縁端部はやや内傾する平坦面をもつ。47・48は砥石。47は表裏

の2面、48は片面と側面の2面に使用痕が認められる。石材は47が砂岩製、48が輝石安山岩製である。49～51の平瓦片はいずれも凹面に布目、凸面に縄目タタキが認められる。東部に近接した東郷庵寺のものと考えられる。52は曲物の底板である。径20cm、厚さ7mmを測る。樹種はスギである。53・54は挽歯横槽の断片である。『木器集成図録近畿古代篇』の分類では、共に長方形のΛ型式にあたり、肩部が角張る53がΛⅠ型式、肩部に丸味を持つ54がΛⅡ型式に分類される。歯の間隔は密で3cmあたり29本を数える。樹種は未同定であるがおそらくツゲであろう。55～58は井戸側として用いられた4枚の横板、59は内側から支えた補助材である。55には加工が見られない。56と58は片方を凸状に加工し、57の両端の凹状部分と組み合わせるようになっている。さらに、56と58の片側隅部分には切込みがあり、59の階段状に加工された部分と組み合わせずようになっている。樹種はスギである。土器類の帰属時期については、佐藤隆氏(佐藤1992)による中河内地域の平安時代土器編年の平安時代Ⅰ期(8世紀末から9世紀初頭)に比定される。井戸の掘方および井戸側の設置方向が、堅穴住居群のなかでCグループに分類したSB106～108の構築方向と共通しており、同時期に共存した可能性が高い。

SE105(第14図、図版四)

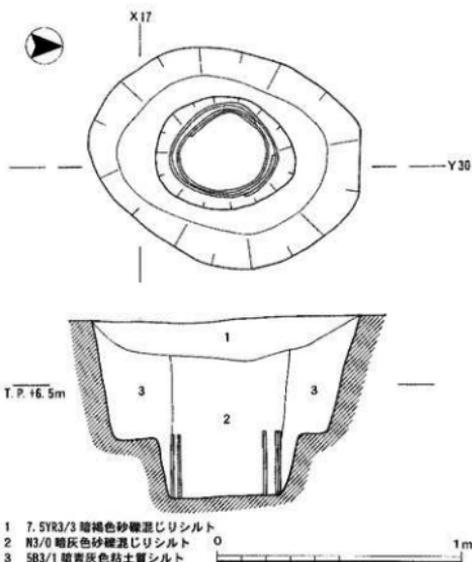
4E地区で検出した。SB106の南側、SB105の東側に隣接している。井戸側に曲物を使用した曲物積上げ井戸である。掘方の平面は一辺1～1.2mの不整隅丸方形を呈し、断面は逆台形を呈する。深さは0.64mを測る。曲物井戸側は、掘方内のやや南部に設けられており、調査では最下段および2段目の痕跡が確認できた。なお、埋土の状況から本来井戸側としての曲物は3段以上あったものと推定される。遺存していた曲物の法量は、推定復元で径43cm、高さ13cmを測る。埋土は5層で、そのうち2・3層が井戸側内である。遺物は曲物井戸側内の2・3層から奈良時代末から平安時代初頭に比定される土師器皿、須恵器杯等の細片が少量出土したが、図化できるものはなかった。遺構の配置関係からSB106と共存したものと推定される。



第14図 SE105 平断面図(S=1/20)

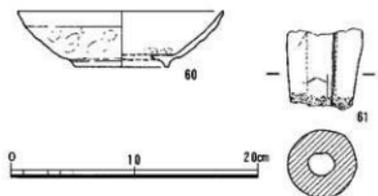
SE106(第15・16図、図版五・一三)

調査地南東部の4FG地区で検出した。曲物を井戸側に持つ曲物積上げ井戸である。掘方の平面は南北にやや長い楕円形を呈し、断面は逆凸形を呈する。規模は、南北径1.13m、東西径0.88mで深さは0.75mを測る。曲物は検出面から47cm前後のところで最下段の1段分確認したが、埋土の状況から本来はそれ以上あったものと推定される。最下段の曲物は径45cm、高さ28cmを測る。埋土は3層でそのうち2層は井戸側内である。遺物は曲物井戸側内から奈良時代末～平安時代初頭頃に比定される土師器皿・椀、須恵器杯、輪羽口の細片が少量出土している。2点



第15図 SE106 平面図(S=1/20)

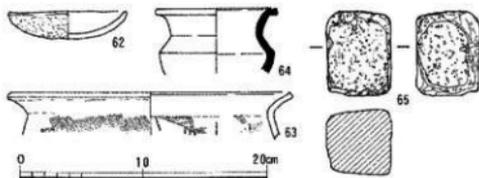
(60・61)を図化した。60は貼付け高台を有する土師器椀Bである。約1/4が残存している。復元口径16.5cm、器高4.6cm、高台径7.3cm、高台高0.6cmを測る。体部内面から口縁部外面に丁寧なヨコナデが施されているが、体部外面は指頭圧痕やクラックが目立つ。61は土師器の輪羽口である。直線羽口片で元口部分を欠く。通風孔は楕円形で最大径2.2cmを測る。先端部分が溶解しており灰色に変化している。遺構の帰属時期は平安時代前期である。



第16図 SE106 出土遺物実測図

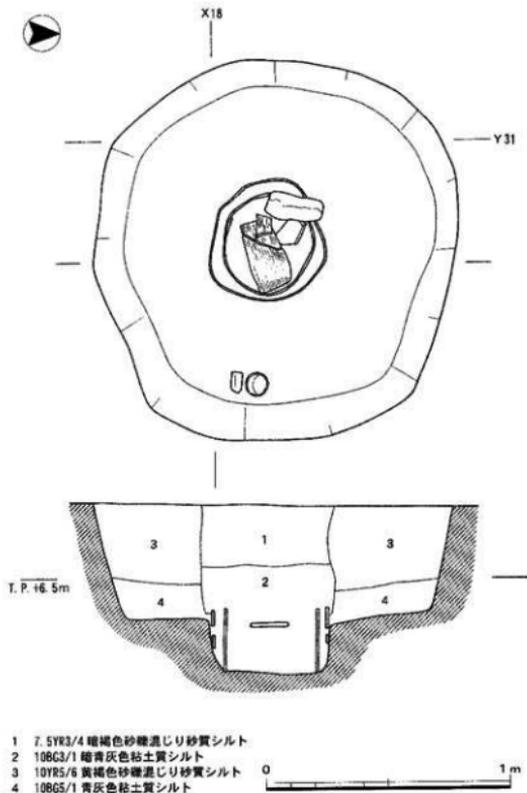
SE107(第17・18図、図版六・一三)

SE106の南東側に隣接する位置で検出された曲物積上げ井戸である。掘方の平面形は東西にやや長い楕円形を呈し、断面は逆凸形を呈する。規模は南北径1.45m、東西径1.62m、深さは0.7mを測る。曲物井戸側は掘方中央部よりやや西に設けられている。曲物井戸側は検出面から38cm前後のところで2段目を確認、さらにその内側へ「入れ子」状態で最下段が設置されていた。木井戸も井戸側については、SE105、SE106



第17図 SE107 出土遺物実測図

と同様に埋土の状況から2段以上あったものと推定される。各曲物の法量は最下段が径43cm、高さ27cm、2段目が径52cm、高さ15cmを測る。埋土は4層で、そのうち1・2層が井戸側内である。遺物は曲物井戸側内の2層から奈良時代末から平安時代初頭頃に比定される土師器皿・杯、須恵器壺の細片、石製品等が少量出土している。そのうち図化したものは4点(62~65)である。62は完形の土師器皿。外面は口縁部がヨコナデ、体部は指頭圧痕を残す。口縁部に灯芯痕が1個所に残る。63は土師器甕Aの細片である。体部外面はハケ調整を多用している。64は肩部に稜角を持つ須恵器小形壺(壺H)の細片である。65は砥石である。2面に使用面が認められる。石材は流紋岩である。



- 1 7.5YR3/4 暗褐色砂礫混じり砂質シルト
- 2 10B6/1 暗青灰色粘土質シルト
- 3 10YR5/6 黄褐色砂礫混じり砂質シルト
- 4 10B6/1 青灰色粘土質シルト

第18図 SE107 平断面図(S=1/20)

土坑(SK)

SK101(第19図)

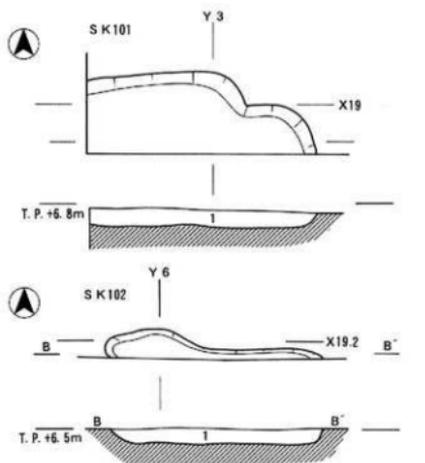
調査区南西隅にあたる4A地区で検出した。西部および南部が調査区外に至るため、全容は不明である。検出部分が南北長0.58m、東西長1.84m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色砂礫混じりシルトの単一層である。遺物は古墳時代中期~後期に比定される須恵器壺杯の細片が少量出土したが、図化出来たものはない。

SK102(第19図)

SK101の東側にあたる4B地区で検出した。南部が調査区外に至るため、全容は不明である。検出部分が東西長1.73m、南北長0.24m、深さ0.11mを測る。埋土は黒褐色砂礫混じりシルトの単一層である。遺物は古墳時代中期~後期に比定される須恵器蓋杯の細片が少量出土したが、図化出来たものはない。

S K 103(第20・21図、図版六・一三・一四)

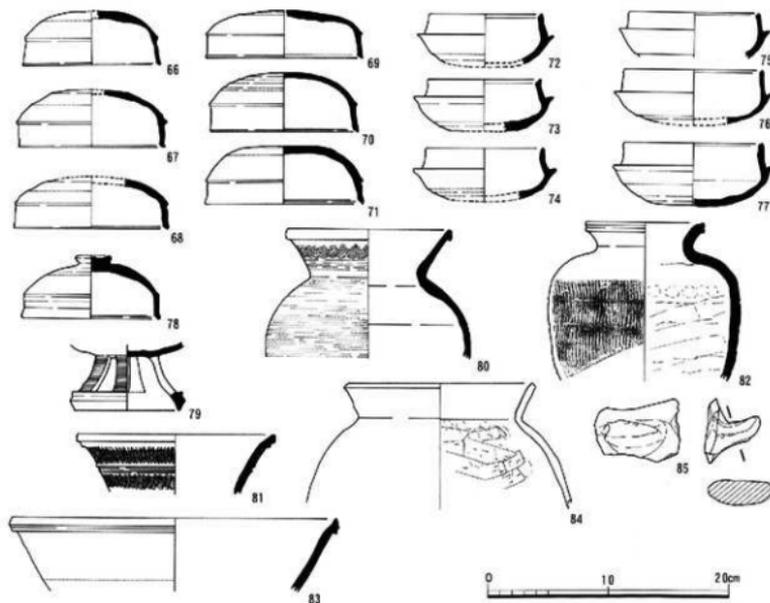
調査区南東隅にあたる3・4GH地区で検出した。SB110の南に隣接している。掘方の平面は北西-南東方向に長い不定形で、断面は逆台形を呈する。規模は東西幅2.62m、南北幅3.42m、深さ0.74mを測る。埋土は1~4層に分層される。遺物は各層内から古墳時代中期~後期に比定される須恵器杯・壺・甕・鉢・高杯・器台、土師器壺・甕等の細片が計48片出土した。そのうち図化できたものは、須恵器では杯蓋6点(66~71)、杯身6点(72~77)、高杯蓋1点(78)、高杯1点(79)、壺3点(80~82)、器台1点(83)、土師器では甕1点(84)と銅の把手と思われるもの1点(85)の計20点である。66~



1 7.5YR3/2 黒褐色砂礫混シルト



第19図 SK101、102 断面図(S=1/40)



第20図 SK103 出土遺物実測図

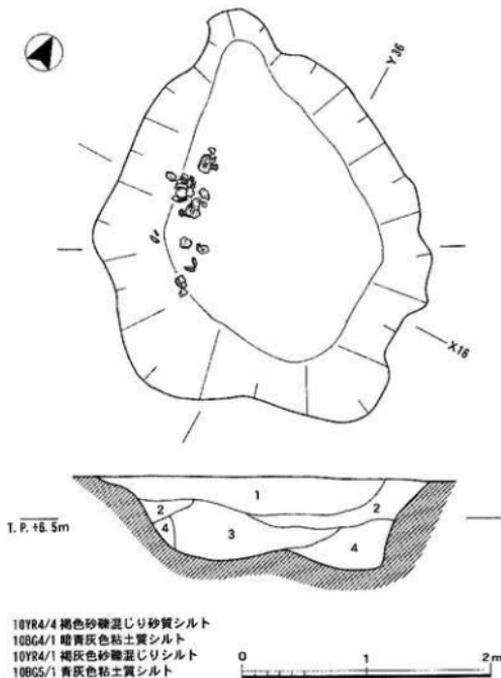
71は須恵器杯蓋。田辺編年のTK23型式～TK47型式にあたるものである。形態で分類すると口縁端部が外傾して平端面をもつ66・67・69、外傾し凹面をもつ68・70・71の2種類に分かれる。また、天井部では扁平な69以外はすべて半球状を呈する。須恵器杯身72～77については、72～74が最も小型化するTK47型式で、立ち上がりは内傾する72・73、内傾した後に直上方に伸びる74がある。口縁端部は内傾する小端面を持つ72・73と丸みをもつ74がある。75～77はTK23型式にあたる。立ち上がりは直立気味で高く、口縁端部は内傾して平坦な小端面を作る。78は有蓋高杯の蓋。丸味をもつ天井部に中央部が窪む擠みが付く。79は有蓋高杯の体部から

脚部片である。脚部外面はカキメ調整、三方に長方形の透かし孔を有する。78・79はTK23型式にあたる。80・81は広口壺で、口頭部外面はいずれも波状文で加飾するが、80が1帯に対し、81は頭部中位に2条の凸帯を廻らしその上下に波状文を施す。82は肩部の張る短頸壺で、外反する口縁部の端面に凹線を廻らす。体部外面には縦方向のタタキの後、多条の直線文が施文されている。器壁は全体に厚めである。83は器台杯部の細片である。口頭部外面は無文で、口縁端部は上下に肥厚する。84は土師器長胴甕の細片である。体部内面にはヘラケズリが行われている。85は土師器鍋の把手と推定される。出土遺物から遺構の帰属時期は古墳時代中期末が推定される。

溝(SD)

SD101～SD103

調査区北西部にあたる1・2A～D地区で検出した。東西方向に併行して伸びる溝である。各溝の法量は、SD101-幅0.8～1.2m、長さ6.0m、SD102-幅0.4～0.8m、長さ15.0m、SD103-幅1.3～1.8m、長さ0.92mで、深さは各溝ともに0.15～0.2mを測る。埋土は各溝ともににぶい褐色砂礫混じりシルトの単一層である。遺物は各溝内から奈良時代末～平安時代初頭の土師器皿・杯、須恵器蓋杯・甕の細片が少量出土したが、図化できるものはなかった。



第21図 SK103 平断面図 (S=1/40)

小穴・柱穴(SP)

調査地のほぼ全面に分布している。柱穴を構成するものを含めて総数で210個(SP101~1210)を検出した。各小穴・柱穴の法量、出土遺物等の詳細については第2表に示した。

第2表 小穴・柱穴法量表

番号	地点	平面形	法量(cm)			出土遺物	備考
			長径	短径	深さ		
SP101	1A	不定	(108)	62	27		西部は調査区外
SP102	"	楕円	74	57	15		
SP103	"	"	37	28	11		
SP104	"	"	52	38	18		焼土塊を含む
SP105	1AB	"	54	34	19	土師器	
SP106	"	"	53	28	27		
SP107	1A	隅丸	76	44	36	土師器、須恵器	
SP108	"	不定	102	34	16		
SP109	"	"	54	37	15	土師器	
SP110	"	"	40	37	23	土師器、須恵器 7C代	
SP111	2A	"	84	68	32	土師器	
SP112	1B	円	33	31	12		
SP113	"	"	(60)	55	13		SB101 焼土塊を含む
SP114	"	楕円	100	58	16		
SP115	1BC	不定	160	101	22		SB101
SP116	1C	円	25	21	23	土師器	
SP117	"	楕円	18	17	19	土師器、須恵器	
SP118	1B	"	45	42	18		
SP119	2B	円	34	32	7		SB101
SP120	"	"	23	22	14	土師器	
SP121	2BC	"	37	30	19		
SP122	1C	"	37	30	17		SB101
SP123	"	不定	115	75	22	土師器、須恵器	
SP124	"	円	95	75	30	土師器、須恵器	柱根遺存
SP125	"	"	21	20	16		
SP126	"	楕円	23	15	15	土師器、須恵器	SB101
SP127	1-2C	円	40	35	18	土師器	SB101
SP128	2C	"	51	38	24		
SP129	1C	不定	50 (43)	33	33	土師器	北部は調査区外
SP130	"	"	74 (69)	30			北部は調査区外
SP131	"	"	91	89	30	土師器	
SP132	"	円	62	48	29		SB101 焼土塊を含む
SP133	"	"	61	51	21		SB101
SP134	"	楕円	101	37	30	土師器、須恵器	
SP135	2C	"	100	60	28		
SP136	"	円	20	18	19	土師器 7C代	
SP137	1D	楕円	68	41	63	土師器、須恵器 7C代	
SP138	"	"	46	33	9	土師器 7C代	SB102
SP139	"	円	39	35	11		SB102
SP140	"	"	69	56	40		SB102 柱根遺存
SP141	"	"	55	48	22		SB102
SP142	"	"	27	21	10	土師器	
SP143	"	楕円	37	26	13		SB102
SP144	"	円	27	26	12		
SP145	"	楕円	62	30	12		
SP146	"	不定	84	38	34		焼土塊を含む
SP147	2D	楕円	88 (63)	27			
SP148	2C	"	82	36	33	土師器、須恵器	
SP149	"	"	92	27	5		

番号	地点	平面形	法量 (cm)			出土遺物	備考
			長径	短径	深さ		
SP150	2・3 C	円	43	39	18		
SP151	3 C	#	27	26	9		
SP152	2 C	楕円	97	49	26		
SP153	1 E	隅丸	58	53	22	土師器、須恵器	
SP154	#	円	22	21	10	土師器	
SP155	#	#	55	51	6	土師器、須恵器	
SP156	#	隅丸	67	41	15		
SP157	#	楕円	91	34	43	土師器	
SP158	2 E	隅丸	87	57	14	土師器、須恵器	
SP159	2 D	円	40	38	9	土師器、須恵器	
SP160	1 E	#	27	26	11		
SP161	#	楕円	50	39	16		
SP162	#	円	48	43	15	土師器	
SP163	#	#	27	27	10	土師器	
SP164	2 E	#	23	20	7		
SP165	#	楕円	127	42	10		
SP166	#	円	53	48	38	土師器	
SP167	#	#	22	21	6	土師器、須恵器	5 C代
SP168	1 F	#	37	35	16	土師器、須恵器	
SP169	#	#	25	25	19	土師器、須恵器	6 C代
SP170	#	#	71	63	24		SB107
SP171	#	楕円	59	45	20		
SP172	#	円	33	23	8		
SP173	#	楕円	89	55	23		
SP174	1・2 F	円	84	81	33		SB107
SP175	1 F	隅丸	91	54	36		
SP176	1 F G	不定	91	63	50	土師器、須恵器	SB107
SP177	1 F	円	57	(49)	34		
SP178	1・2 F	隅丸	100	75	16		SB107
SP179	#	隅丸方	70	65	29		SB107
SP180	2 F G	円	34	25	7		
SP181	#	隅丸	54	48	13	土師器	SB109
SP182	2 F	#	89	71	21	土師器、須恵器	7 C代
SP183	#	楕円	56	30	12	土師器、須恵器	
SP184	#	#	42	29	17		炭化物を含む
SP185	#	円	77	68	19		SB109
SP186	#	#	33	29	11		
SP187	#	#	27	24	8		炭化物を含む
SP188	#	#	34	33	10		
SP189	#	楕円	43	27	9	土師器、須恵器	
SP190	#	円	28	25	8		
SP191	2 G	楕円	41	21	4	須恵器	炭化物を含む
SP192	#	円	46	34	7		
SP193	#	#	26	25	8		
SP194	#	#	39	36	26		柱根遺存
SP195	#	#	33	33	12	土師器	
SP196	3 F G	#	28	27	12		
SP197	3 F	楕円	48	(24)	7		
SP198	#	不定	34	(24)	24	土師器	
SP199	3 G	楕円	113	65	23		SB110
SP1100	1 G	隅丸	100	54	31		
SP1101	#	楕円	54	39	30		
SP1102	#	円	48	41	19		炭化物を含む
SP1103	#	#	13	12	5		
SP1104	#	#	29	29	8		SB108
SP1105	#	#	47	42	10		SB108
SP1106	#	楕円	45	35	17		
SP1107	2 G	#	83	62	20		SB108

番号	地点	平面形	法量(cm)			出土遺物	備考
			長径	短径	深さ		
SP1108	2 G	円	18	15	6		
SP1109	#	不定	36	(22)	8		
SP1110	#	#	91	70	25		SB108
SP1111	#	円	18	17	17		
SP1112	1 G	#	34	32	13		
SP1113	1・2 H	#	28	(22)	15		
SP1114	2 GH	#	65	32	27		
SP1115	2 G	#	60	56	19		
SP1116	#	#	32	22	11		
SP1117	1 H	楕円	56	42	17	土師器	SB108
SP1118	#	隅丸	85	56	39	土師器	SB108
SP1119	#	円	41	38	37	土師器、須恵器	
SP1120	#	#	16	14	9		
SP1121	#	楕円	74	57	15	土師器、須恵器	
SP1122	2 H	円	32	27	12	土師器	SB108
SP1123	#	#	20	16	6		
SP1124	#	#	15	13	6		
SP1125	#	#	38	32	7		
SP1126	#	#	41	40	13	土師器、須恵器	板石
SP1127	#	楕円	33	25	4	土師器、須恵器	
SP1128	2 G	隅丸	73	54	16	土師器	
SP1129	2 H	円	50	50	21	土師器、須恵器	SB108
SP1130	#	#	(47)	41	6	土師器	
SP1131	#	隅丸方	84	67	21	土師器	SB108
SP1132	#	不定	39	(19)	11		
SP1133	#	楕円	25	15	6		
SP1134	#	円	18	17	17		
SP1135	#	楕円	80	54	7		SB110
SP1136	2・3 G	#	76	61	14	土師器、須恵器	SB109
SP1137	3 G	円	25	22	14	土師器	SB110
SP1138	2 H	#	40	39	13	土師器、須恵器	SB110
SP1139	3 GH	#	46	42	16	土師器、須恵器	7 C代
SP1140	3 H	#	121	69	34		施土塊を含む
SP1141	2・3 H	円	43	35	16	土師器、須恵器	
SP1142	3 H	隅丸	77	46	21	土師器	SB110
SP1143	3・4 A	楕円	56	37	17	土師器	SB103
SP1144	3 B	#	86	62	6	土師器	SB103
SP1145	#	不定	53	(39)	(19)		
SP1146	#	隅丸	94	85	18	土師器	SB103
SP1147	3・4 B	円	59	48	11	土師器	
SP1148	4 B	#	63	53	12		
SP1149	#	隅丸	52	41	15		
SP1150	#	円	44	42	25		SB103
SP1151	3 B	#	19	17	8		
SP1152	4 B	#	33	26	10		
SP1153	#	楕円	76	50	20		SB103
SP1154	#	円	26	22	5		
SP1155	#	楕円	68	50	22		SB103
SP1156	3 B	円	29	28	16		
SP1157	3 C	#	55	52	7	土師器	
SP1158	3・4 C	楕円	59	48	16		
SP1159	4 C	円	24	22	9		SB104
SP1160	#	隅丸	57	55	12	土師器	
SP1161	#	円	(20)	18	3		SB104
SP1162	#	#	32	28	8		SB104
SP1163	#	隅丸	64	39	15	土師器、須恵器	7 C代
SP1164	4 CD	楕円	51	35	7	土師器、須恵器	SB104

番号	地点	平面形	法量 (cm)			出土遺物	備考
			長径	短径	深さ		
SP1165	4D	円	51	49	17	土師器	SB104・SB105
SP1166	4C	#	31	26	8	土師器	
SP1167	#	#	48	40	14	土師器、須恵器5C代	
SP1168	#	楕円	72	53	17	土師器、須恵器	SB105
SP1169	3・4D	#	82	53	20		SB105 柱礎遺存
SP1170	4D	#	49	(35)	16	右宙式礎	
SP1171	3D	楕円	86	(63)	17		
SP1172	3E	円	(32)	31	14	土師器	
SP1173	3DE	#	62	59	18	土師器、須恵器	
SP1174	3E	#	36	31	11		SB106
SP1175	#	#	38	36	13		
SP1176	4E	隅丸方	57	47	20	土師器、須恵器	SB106
SP1177	4DE	#	87	45	23		
SP1178	4E	#	54	31	15		SB106
SP1179	4D	円	50	39	15		SB105
SP1180	3E	#	48	30	16	土師器、須恵器 7C代	
SP1181	#	#	21	20	14		
SP1182	4E	#	24	18	13		SB106
SP1183	#	#	23	22	8		SB106
SP1184	#	#	36	34	14		
SP1185	#	隅丸	71	66	16	土師器、須恵器	SB106
SP1186	3E	楕円	88	54	20		
SP1187	#	円	28	20	12	土師器、須恵器 7C代	SB106
SP1188	4EF	#	71	(66)	(34)		
SP1189	4E	不定	37	32	40		
SP1190	#	円	33	31	14		SB106
SP1191	#	#	32	31	16	土師器	
SP1192	3・4F	#	(20)	19	11	土師器	
SP1193	4F	#	18	16	9		
SP1194	#	#	23	17	10		柱礎遺存
SP1195	#	隅丸	48	(30)	(16)		
SP1196	3F	円	20	18	9	土師器	
SP1197	#	#	22	(20)	6		柱礎遺存
SP1198	#	#	27	24	12	土師器、須恵器	SB109
SP1199	4F	楕円	40	27	21	土師器	
SP1200	#	円	16	14	4		
SP1201	3G	#	90	72	27		SB110
SP1202	#	隅丸方	84	58	25		SB110
SP1203	3GII	#	83	(40)	36	土師器	
SP1204	3G	楕円	47	39	27	土師器、須恵器	
SP1205	3II	#	38	24	21		
SP1206	3G	円	36	33	18		
SP1207	4G	#	65	64	14	土師器	
SP1208	#	#	42	35	18	土師器、須恵器 7C代	
SP1209	#	#	44	33	13		
SP1210	#	楕円	43	24	11	土師器	
SP1211	#	不定	98	(64)	29		

2) 第2面〔古墳時代前期前半(布留式古相)〕(第22図、図版七)

南区の東部で、第1面よりさらに0.2~0.3m下部(T.P.+6.9~6.7m)に存在する第VI層上面を構築面とする古墳時代前期前半の小穴3個(S P 201~203)、溝1条(S D 201)、落ち込み1箇所(S O 201)、土器集積1箇所(S W 201)を検出した。

柱穴(S P)

S P 201

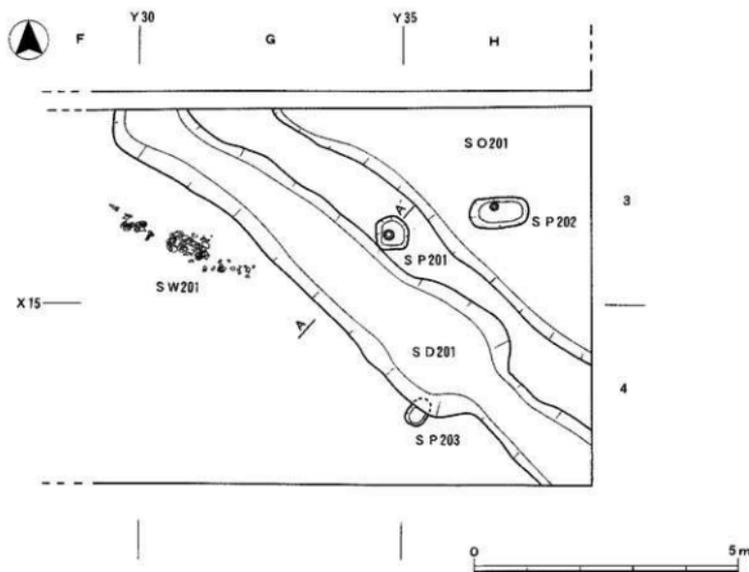
3 G H地区で検出した。一辺0.7m前後を測る隅丸方形の掘方中央部に径0.25m前後、深さ0.42m測る柱穴が設けられている。埋土は掘方内が暗灰色シルト、柱穴内が10YR5/1褐色シルトで、遺物は柱穴内から古式土師器の小型丸底壺の破片が数点出土したが、図化できなかった。

S P 202

3 H地区のS O 201内で検出した。掘方は東西方向に長い隅丸長方形を呈するもので長径1.12m、短径0.63mを測る。柱穴は掘方の南西部に設けられており径0.2m、深さ0.24mを測る。埋土は掘方内がN5/0灰色シルト、柱穴内が10YR5/1褐色シルトで、遺物は掘方内から古式土師器の甕および高杯の破片が数点出土したが、図化できなかった。

S P 203

4 H地区で検出した。掘方の北東部分はS D 201によって切られるが、検出状況から北東-南西方向にやや長い楕円形を呈するものと思われる。分量は推定復元で、長径0.62m、短径0.48m、



第22図 第2面検出遺構平面図(S=1/100)

深さ0.15mを測る。埋土は10BG4/1暗青灰色粘土質シルトの単一層で、遺物は出土しなかった。SP201、SP202とは埋土にも相違がある。時期的には、古墳時代前期前半(布留式古相)に比定されるSD201に切られている関係から、埴輪時期は古墳時代前期前半(布留式古相)以前が想定される。

溝(SD)

SD201(第23・24図、図版一五・一六)

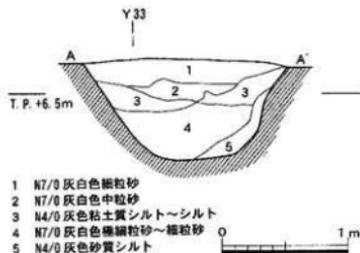
3F～3・4GH地区において検出した。南東-北西方向に伸びる溝で、南東部は調査区外に至り、北西部では確認することができなかった。規模は検出部分で幅1.1～2.2m、長さ11.5mを測る。深さは0.62～0.84mで、底面のレベルは北西部が南東部より0.2m前後低くなっている。埋土は灰白色の極細粒砂～中粒砂が優勢な5層から成る。遺物は各層から古式土師器の小型丸底壺、壺、甕、高杯、器台、鉢等の細片が217片出土した。そのうち図化できたものは、小形丸底壺2点(86・87)、直口壺1点(88)、短頸壺1点(89)、複合口縁壺1点(90)、甕6点(91～96)、高杯2点(97・98)、小型器台1点(99)、砥石1点(100)の計15点である。

86・87は精製品の小形丸底壺(小形壺B₃)である。口径が体部径を凌駕するもので、口縁部内面および外面全体は密なヘラミガキが施される。88は直口壺A₁である。体部外面にハケ調整を施す。89は短頸壺Bである。卵形の体部を有するもので、底部はやや尖り気味である。口縁部は斜上方へ直線的に伸び、端部は丸くおさめる。90は複合口縁壺B₁である。直立気味の頸部から屈曲して、2段階に外反する口縁部を有する。91は吉備系甕(甕J₄)の細片である。直立気味の口縁部端面に擬凹線を廻らす。92は球形の体部から「く」の字形に屈曲する口縁部を呈し、端部は受け口状に小さく内彎する。体部外面がハケ調整、内面はヘラケズリを行う。形態や調整等から布留式影響の庄内式甕(甕D)に分類される。93は屈曲部のヘラケズリ位置や体部外面におけるハケ調整などの布留式甕の属性を持つ布留傾向甕(甕E)にあたる。94～96は布留式甕(甕F₁)である。97・98は精製品の有稜高杯(高杯A₁)の杯部である。内外面の器面調整は、97が内外面ともに密なヘラミガキ、98は一次調整のタテハケ後、外面のみ横位の密なヘラミガキを行う。99は受部と脚部が貫通する小形器台(器台C)の脚部である。精製品で脚部の外面に横位の密なヘラミガキが施されている。100は丁寧に研磨された棒状の石材で、一方の先端に使用痕が認められる。石材は砂岩である。土器組成から、遺構の埴輪時期は古墳時代前期前半の布留II期に位置づけられる。

落ち込み(SO)

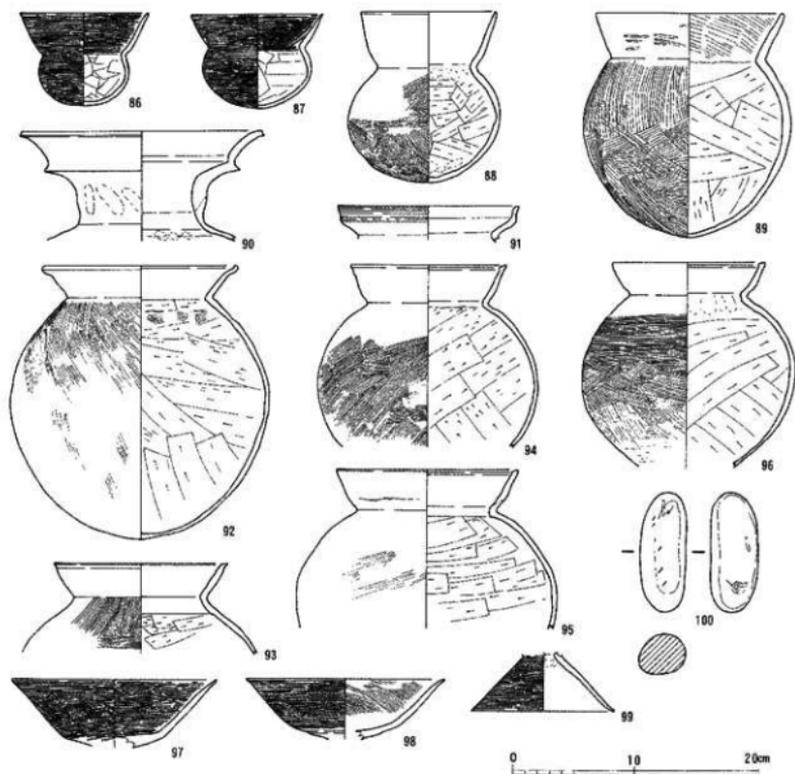
SO201

3・4GH地区で検出した。南西から北東方向に向かって落ち込むもので、東部は調査区外に至り、北部は確認することができなかった。検出部分で東西長6.2m、南北長5.2m、深さは0.2m前後を測る。埋土は灰黄褐色砂礫混じりシルトの単一層である。遺物は古式土師器の細片が極少量出土したが、図化できるものはなかった。



- 1 N7/0 灰白色極粒砂
- 2 N7/0 灰白色中粒砂
- 3 N4/0 灰白色粘土質シルト～シルト
- 4 N7/0 灰白色極細粒砂～極粒砂
- 5 N4/0 灰白色砂質シルト

第23図 SD201断面図(S=1/40)



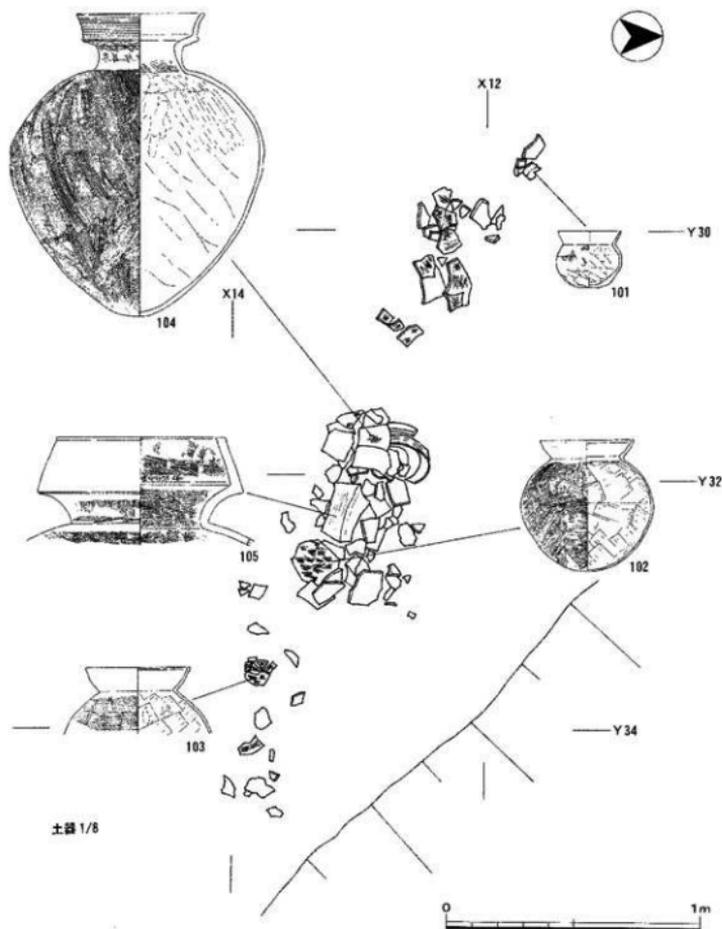
第24図 SD201出土遺物実測図

土器集積(SW)

SW201(第25・26図、図版七・一六)

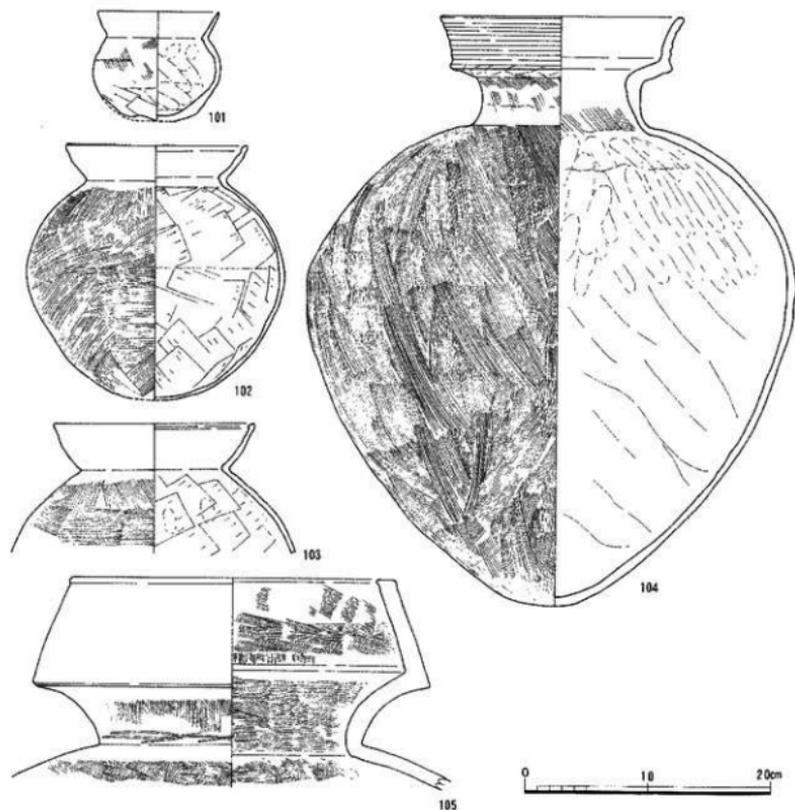
3FG地区で検出した。明瞭な掘方等は無いが、SD201の西肩ラインに沿って、概ね南北幅3.0m、東西長0.6mの範囲に土器類が列状に集積していた。遺物量は、古式土師器の壺、甕、鉢の細片化したものが中心で総数312片を数える。接合復元した結果、小型丸底壺1点(101)、甕2点(102・103)、複合口縁壺2点(104・105)の5点を実測した。

101は球形の体部から屈曲して内彎気味に口縁部が伸びる。口縁端部は尖り気味である。体部外面下半はヘラケズリによる雑な調整が行われている。102・103は布留式壺(壺F₂)である。102は球形の体部を有し、口縁部は内彎して端部が内側に肥厚する。体部外面の器面調整は全体に密なハケ調整が行われている。103は体部外面の最上位にタテハケとヨコハケが施されている。104は大形の二重口縁壺である。体部は最大径が上位にある倒卵形で、底部は尖り底を呈する。図面上で完形に復元が可能で、口径19.6cm、器高48.4cm、体部最大径39.8cmを測る。緩やかに外反して



第25図 SW201平面図

伸びる口縁部外面に多条の凹線文を施文する他、体部外面にはハケ調整が多用されている。徳島県の吉野川下流で多見される東部四国系のもので推定される。105は東部四国系の大形の複合口縁壺(複合口縁壺E₁)である。口縁部から体部上位が残存しており口径26.0cmを測る。口縁部は大きく外反する頸部から内傾して直線的に伸びるもので、口縁端部は上面に幅広で平坦な面を有する。器壁は全体を通して厚い。色調は褐灰色で胎土中に角閃石の含有が認められる。SW201出土の土器類は組成からみて古墳時代前期前半の布留Ⅱ期に比定される。隣接するSD201の埴輪時期と符合するため、SD201の機能していた時期に形成された土器集積と推定される。



第26図 SW201 出土遺物実測図

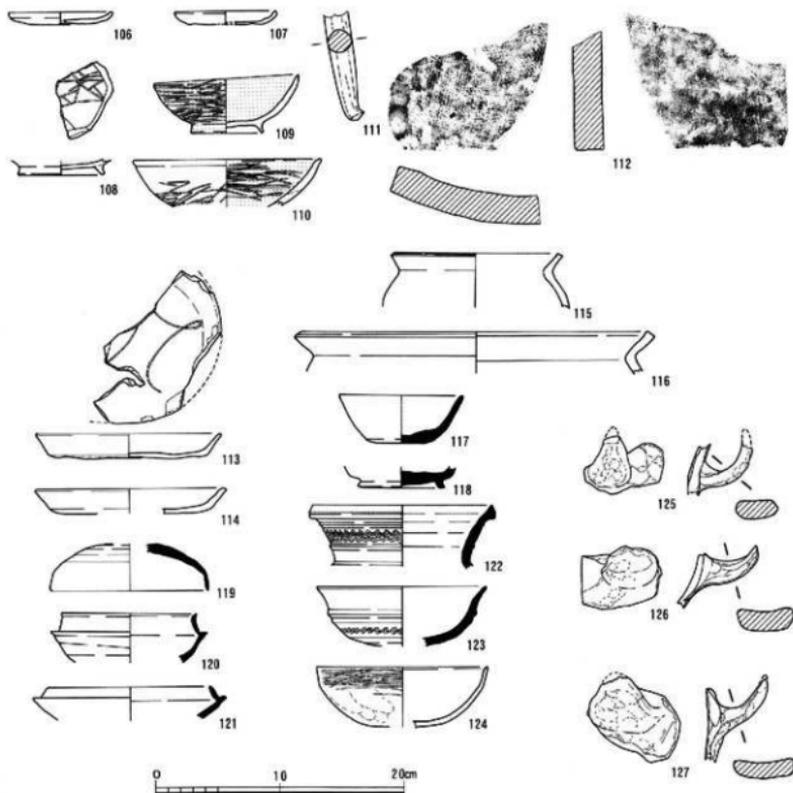
3) 遺構に伴わない出土遺物(第IV～VII層)

第IV層(第27図、図版一七)

平安時代後期から鎌倉時代の遺物が出土している。7点(106～112)を図化した。106・107は土師器小皿である。2点とも12世紀代の所産である。108～110は黒色土器碗で、108・110が内黒のA類碗、109が両黒のB類碗である。108は断面三角形の高台を「ハ」の字形に貼り付ける。見込みのヘラミガキは粗い。109は小形品である。高台は高台高が高く重厚な貼り付け高台である。外面は密なヘラミガキが施されるが、内面はナデ調整のみである。110は器壁が比較的厚く、内外面のヘラミガキは粗い。以上は10世紀代の所産と考えられる。111は瓦質三足釜の脚部で、12世紀末頃の所産と思われる。112は平瓦片で凹面は布目、凸面に縄目叩きの丁寧なナデが施されている。

第V層(第27図、図版一七)

飛鳥時代から平安時代初頭の遺物が出土している。6点(113～118)を図化した。113・114の土



第27図 第四層(106~112)、第五層(113~118)、第六層(119~127)出土遺物実測図

師器皿Bは、平坦な底部から斜上方へ短く立ち上がる口縁部を呈する。端部については113が丸く収め、114は外傾する面を有する。また、113の見込みには螺旋状の暗文が施される。これらは平安時代初頭の所産である。115・116の土師器甕の細片。115が甕B、116が甕Aに分類される。共に口縁端部は外傾して端面に沈線が廻る。いずれも平安時代初頭の所産と思われる。117・118は須恵器杯である。117は平坦な底部から斜上方に直線的に伸びる口縁部を呈し、端部は丸く収める。118は底部の内側寄りに高台を貼り付けたものである。これらは飛鳥時代後半の所産である。

第六層(第27図、図版一七)

古墳時代中期から飛鳥時代の遺物が出土している。9点(119~127)を図化した。119~121は須恵器蓋杯で、119は杯蓋、20・121は杯身である。119は稜が消失し、丸みをもつ。口縁端部は内傾する凹面をもつ。TK10型式(6世紀中葉)にあたる。120は立ち上がりの外反度が強く、端部は内傾する凹面を呈する。それとは対照的に121の立ち上がりは低く内傾する。120がTK47型式(6

世紀前半)、121がTK43型式(6世紀後半)に比定される。122の須恵器広口壺は外反して伸びる口縁部を呈し、端部はつまみ上げ、下方に肥厚する。123は須恵器無蓋高杯で、杯部のみの残存である。122・123はTK43型式～TK209型式の所産と思われる。124は土師器塼Aで、平坦な底部から内彎して立ち上がる口縁、体部に至る。口縁端部は丸く収める。9世紀前半ごろに比定される。125～127は鍋の把手と推定される。

第Ⅶ層(第28～29図、図版一八～二〇)

弥生時代中期から古墳時代前期前半の遺物が出土しているが、古墳時代前期前半(布留式古相)に比定されるものが大半を占めている。43点(128～170)を図化した。

壺(128～142) 128は小形の長頸壺である。弥生時代後期後半。129～132は精製品の土師器小形丸底壺である。129・130は口径が体部径を凌駕するもので小形壺B₁、131・132は偏球形の体部に大きく開く口縁部が付くもので小形壺B₂にあたる。4点ともに器面調整は丁寧で、横方向のヘラミガキが多用されている。129・130が布留I期、131・132が布留II期に盛行するものである。

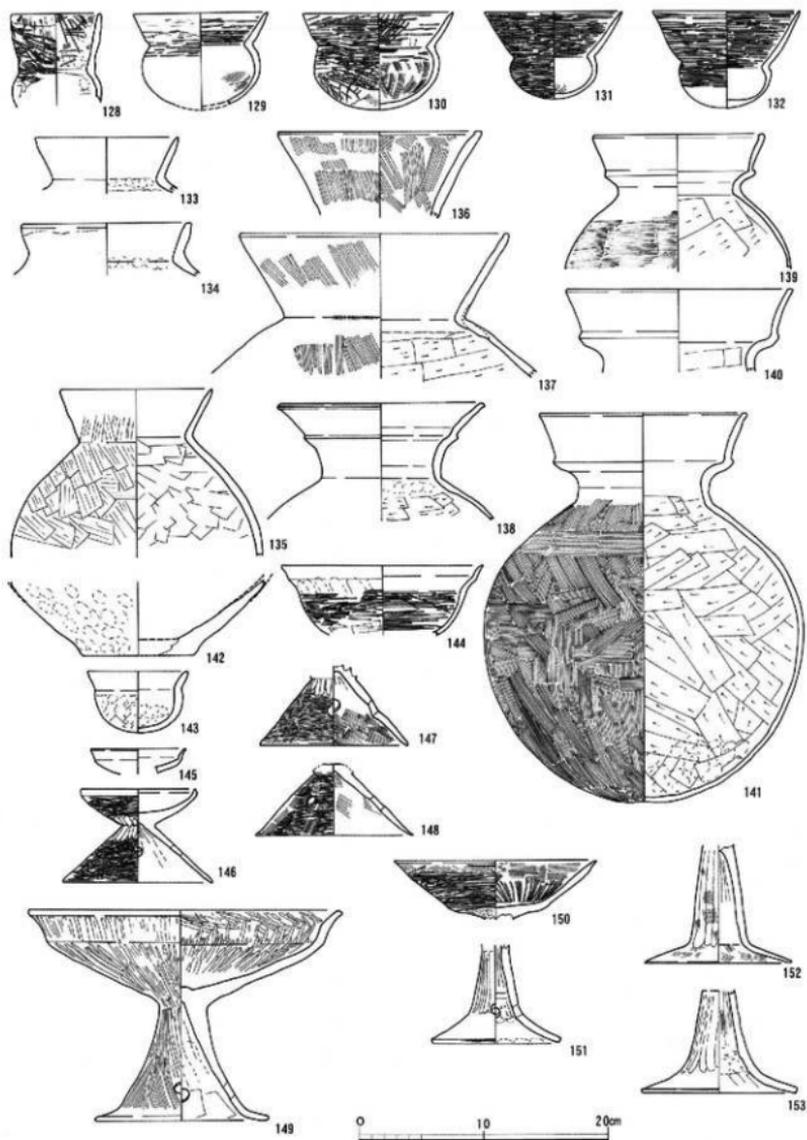
133～135は土師器の短頸直口壺である。136・137は土師器の大形直口壺(大形直口壺)にあたる。136・137は角閃石を含む生駒西麓産である。138～141は二重口縁壺で、外反する頸部から明瞭な段を成して外上方へ大きく開く口縁部を有する。そのうち139～141については、胎土および色調から山陰系のものと考えられる。142は弥生土器の壺底部。器面の風化が著しい。

鉢(143・144) 143は半円形の体部に短い口縁部が付く小形の鉢(鉢G)である。庄内式新相に比定される。144は半球形の体部に二段に屈曲する口縁部が付く精製品の有段小形鉢(鉢H₂)である。全体的に器壁は薄く、体部の内外面の器面調整は密なヘラミガキが行われている。布留式古相に盛行するものである。

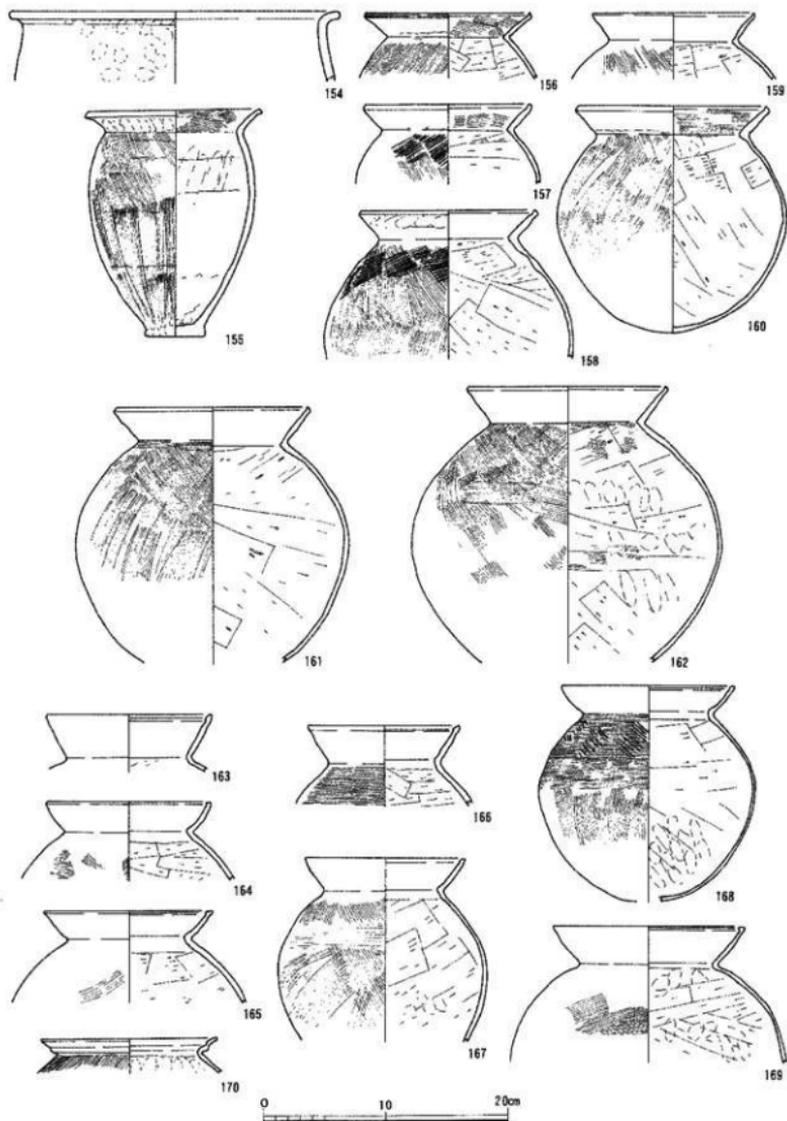
小形器台(145～148) 皿状の受部に「ハ」の字に開く脚部が付く小形精製の器台(器台B₁)である。145は杯部、146は完形、147・148は脚部が残存している。146～148は受部と脚部間は貫通しないもので、脚部には3～4箇所の円孔が穿たれる。古墳時代初頭後半(庄内式後半)～布留式前半(布留式古相)にかけての資料である。

高杯(149～153) 149は斜上方に伸びる杯体部から短く外反する口縁部を有するもので弥生時代後期後半に比定される。150は深みのある杯部を有し、口縁部は斜上方へ直線的に伸びる精製品の有段高杯の杯部である。古墳時代前期前半(布留式古相)のものである。151～153は脚部部のみの残存であるが、形態と外面の調整から古墳時代前期前半(布留式古相)に比定されるものと考えられる。

甕(154～169) 154・155が弥生土器、156～169は古式土師器である。154はいわゆる「如意形口縁」を呈する弥生時代前期の甕の細片である。155は小形甕である。倒卵形の体部に外反気味に伸びる口縁部が付くもので口縁端部は外傾して小端面を作る。体部の分割成形が顕著に窺える。弥生時代後期前半に比定される。156～158・162は古墳時代初頭後半(庄内式新相)から前期前半(布留式古相)に比定される庄内式甕(甕B₁)で、体部から鋭く「く」の字に屈曲した口縁部を有し、端部は上方につまみ上げる。159～162は形態的には庄内式甕と同様であるが、体部外面にハケ調整を行うもので、布留式影響の庄内式甕(甕D)にあたる。古墳時代前期前半(布留式古相)に盛行する器種である。163～169は口縁部が内彎して端部が肥厚する布留式甕(甕F₁)である。すべて、古墳時代前期前半(布留式古相)に位置づけられるもので、特に166～169の様に、体部外面上位に



第28图 第Ⅶ层出土文物实测图—1



第29圖 第Ⅵ層出土遺物実測図—2

水平方向のハケ調整が施されるものは布留式甕の成立段階に共通した特徴の一つである。170は口縁部が「S」字形を呈する東海系甕である。

〔参考文献〕

- ・古田野乃 1995「11, 東郷遺跡(94-144)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告31 平成6年度国庫補助事業 八尾市教育委員会
- 〔出土遺物の形式・編年・時期概念等で参考とした文献について〕
- ・奈良国立文化財研究所 1978『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所学報第32冊
- ・古代の土器研究会編 1992『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』
- ・古代の土器研究会編 1993『古代の土器Ⅱ 都城の土器集成』
- ・奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 史料第27冊
- ・菅原正明 1982「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論集』同期舎
- ・佐藤 隆 1992「第2節 平安時代における長原遺跡の動向 ii)長原遺跡における平安時代の土器編年」『大阪市平野区 長原遺跡発掘調査報告Ⅴ 市営長吉長原住宅建設に伴う発掘調査報告書 後編』(財)大阪市文化財協会
- ・田辺昭三 1996『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- ・田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- ・原田昌則 1993「第5章 まとめ 3)中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『Ⅱ久宝寺遺跡(第1次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37
- ・杉本厚典 2003「河内における布留式期の細分と各地の併行関係」『古墳出現期の土師器と実年代』(財)大阪府文化財センター
- ・森岡秀人・西村 歩 2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題-最新年代学を基礎として-」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター

第3表 布留式期の土器編年対照表

群年代	270				300				350				400											
古墳時代前期	前半								中葉				後半				中期							
土器様式	布留式																							
様式区分	古相前半				古相後半				中相				新相											
原田1998	布留Ⅰ期				布留Ⅱ期				布留Ⅲ期				布留Ⅳ期				布留Ⅴ期							
杉本2006	25期	26期	27期	28期	29期	30期	31期	32期	33期	34期														
米田1991	庄内式期Ⅳ				庄内式期Ⅴ=布留式期Ⅰ				布留式期Ⅱ				布留式期Ⅲ				布留式期Ⅳ				布留式期Ⅴ			
西村2006	古段階								中段階				新段階											
寺沢1986・2002	布留0式(新)				布留1式				布留2式				布留3式				布留4式(古)				布留4式(新)			
標識資料	中田1-39		土坑2		菅原SE03		朝集殿下層溝		小若江北								船橋0I							

4) 出土遺物法量表

番号	棟号 番号	図版 番号	遺構・ 層位	器種	法量(cm)	残存率	色調	備考
1	8		SE103	古式土師器 甕	口径:(20.8)	口頸部 1/4	7.5YR5/3 にぶい褐色	内外面に煤
2	8	八	SE103	土師器 杯A	口径:(13.0) 器高:2.7	1/6	外:5YR7/8 褐色 内:7.5YR7/4 にぶい褐色	
3	8		SE103	須志器 壺	口径:(18.2)	口縁部 1/5	N5/0 灰色	口縁部内面に灰かぶり
4	8	八	SE103	須志器 杯B	口径:(14.8) 器高:5.2 高台径:8.2 高台高:0.5	1/2	N5/0 灰色	
5	8		SE101	土師器 羽釜	口径:(27.2) 器径:(29.6)	口縁部～ 胴部 1/7	7.5YR6/4 にぶい褐色	生駒正重築
6	10		SE104	土師器 皿B	口径:(14.0) 器高:2.1	1/6	5YR7/8 褐色	
7	10		SE104	土師器 皿B	口径:(15.4) 器高:(2.1)	1/6	外:5YR7/4 にぶい褐色 内:10YR7/3 にぶい黄褐色	
8	10		SE104	土師器 皿B	口径:(16.0) 器高:2.2	1/6	7.5YR7/6 褐色	
9	10		SE104	土師器 皿B	口径:(17.4) 器高:(1.8)	1/6	7.5YR7/2 明褐色	体部外面に煤付着
10	10		SE104	土師器 皿B	口径:(19.0) 器高:(2.2)	1/6	7.5YR6/3 にぶい褐色	
11	10	八	SE104	土師器 皿	口径:(18.8) 器高:2.1	1/5	10YR7/1 灰白色	内底面に螺旋状暗文
12	10	八	SE104	土師器 皿B	口径:(19.0) 器高:2.2	1/4	10YR7/1 灰白色	内底面に螺旋状暗文
13	10	八	SE104	土師器 皿B	口径:(20.0) 器高:2.1	1/5	10YR7/3 にぶい黄褐色	底部外面にヘラ記号、内面螺旋状暗文、外面に煤付着
14	10	八	SE104	土師器 皿B	口径:16.0 器高:2.3	完形	5YR7/4 にぶい褐色	底部外面に「E」字状の墨書
15	10	九	SE104	土師器 皿B	口径:17.1 器高:2.2	ほぼ完形	10YR3/4 暗褐色	底部外面に「E」字状の墨書
16	10	九	SE104	土師器 碗A	口径:13.0 器高:3.5	完形	外:10YR7/3 にぶい黄褐色 内:7.5YR7/4 にぶい褐色	
17	10		SE104	土師器 碗A	口径:(12.0) 器高:(3.8)	1/3	10YR7/4 にぶい黄褐色	体部外面に煤付着
18	10	九	SE104	土師器 碗A	口径:12.8 器高:3.3	1/2	2.5YR6/4 にぶい褐色	
19	10	九	SE104	土師器 碗A	口径:(12.2) 器高:3.2	ほぼ完形	外:10YR6/2 黄褐色 内:10YR7/4 にぶい黄褐色	
20	10	九	SE104	土師器 碗A	口径:13.3 器高:4.2	完形	10YR5/3 にぶい黄褐色	底部外面に「内」の字の墨書
21	10	九	SE104	土師器 碗A	口径:13.2 器高:3.9	完形	10YR7/4 にぶい黄褐色	
22	10	九	SE104	土師器 碗A	口径:13.6 器高:3.6	ほぼ完形	10YR7/4 にぶい黄褐色	
23	10		SE104	土師器 碗A	口径:(13.8) 器高:3.8	1/4	10YR7/4 にぶい黄褐色	
24	10		SE104	土師器 碗A	口径:(14.1) 器高:3.9	1/2	10YR7/4 にぶい黄褐色	

番号	博覧 番号	図版 番号	遺構 層位	器種	流量(cm)	残存率	色調	備考
25	10		SE104	土師器 椀A	口径:(14.6) 器高:(3.8)	1/3	外:2.5YR7/8 褐色 内:7.5YR/4 浅黄褐色	
26	10		SE104	土師器 椀A	口径:(16.6)	1/4	7.5YR/4 に近い黄褐色	
27	10	九	SE104	須恵器 壺	体部最大径:9.0 高台径:3.8 高台高:0.5	口縁部欠損	5PB4/1 暗青灰色	外面に自然輪軸帯
28	10	九	SE104	須恵器 杯蓋	口径:12.7 器高:2.3 縁み径:2.7 縁み高:0.7	完形	外:5PB5/1 青灰色 内:5PB4/1	上面に「右」の字の墨書
29	10		SE104	須恵器 杯	高台径:(9.5) 高台高:0.7	底面 1/3	5PB5/1 暗青灰色	体部外面に灰かぶり
30	10	一〇	SE104	須恵器 杯	口径:12.4 器高:4.5 底径:7.0	ほぼ完形	N7/0 灰白色	表裏面に火津の痕跡
31	11	一〇	SE104	土師器 壺B	口径:12.8 体部最大径:12.5 器高:9.5	ほぼ完形	7.5YR6/6 褐色	内外面に煤
32	11	一〇	SE104	土師器 壺B	口径:14.1 体部最大径:14.9 器高:11.0	ほぼ完形	7.5YR6/4 に近い褐色	外面に煤、内面に炭化物
33	11		SE104	土師器 壺B	口径:14.1	口縁部～ 肩部 1/6	7.5YR6/6 褐色	内外面に煤
34	11	一〇	SE104	土師器 壺B	口径:(16.9) 体部最大径:(17.9)	1/4	5YR6/4 に近い褐色	
35	11		SE104	土師器 壺B	口径:17.5 体部最大径:18.1	下半部欠損	7.5YR6/3 に近い褐色	内外面に煤
36	11	一〇	SE104	土師器 壺B	口径:17.4 体部最大径:18.1 器高:13.5	5/6	7.5YR6/4 に近い褐色	外面に煤、外面の胎面に刺痕
37	11		SE104	土師器 羽釜	口径:(20.8) 口径:(24.7)	口縁部～ 肩部 1/6	7.5YR4/3 褐色	肩部以下に煤付着、生駒西麓産
38	11	一〇	SE104	土師器 羽釜	口径:(21.8) 口径:(24.3)	口縁部～ 体部 1/4	7.5YR4/3 褐色	外面に煤、生駒西麓産
39	11	一〇	SE104	土師器 羽釜	口径:(25.4) 口径:(28.2)	口縁部～ 体部 1/8	10YR5/3 に近い黄褐色	生駒西麓産
40	11	一〇	SE104	土師器 羽釜	口径:(24.0) 口径:(28.0)			生駒西麓産
41	11		SE104	土師器 羽釜	口径:(26.4) 口径:(28.6)	口縁部～ 肩部 1/5	10YR5/3 に近い黄褐色	外面に煤付着、生駒西麓産
42	11		SE104	土師器 羽釜	口径:(26.2) 口径:(31.0)	口縁部～ 肩部 1/7	7.5YR6/6 褐色	外面に黒斑
43	11	---	SE104	土師器 ミニチュア壺	口径:6.0 体部最大径:6.0 器高:3.8	完形	7.5YR7/2 明褐色	底部内面に黒漆? 付着
44	11	---	SE104	土師器 ミニチュア壺	器高:(5.3) 底径:(9.2)	1/2	外:10YR6/2 灰黄褐色	
45	11		SE104	土師器 把手			10YR7/3 に近い黄褐色	
46	11	---	SE104	土師器 片口鉢	口径:24.2 器高:10.6	2/3	7.5YR6/4 に近い褐色	内面に黒色顔料が塗布

番号	挿図 番号	図版 番号	遺構・ 層位	器種	量量(cm)	残存率	色調	備考
47	11	---	SE104	石製品 砥石	短辺: 6.7 長辺: 8.4 厚さ: 4.3	破片	N7/0 灰白色	砂岩製
48	11	---	SE104	石製品 砥石	短辺: 9.5 長辺: 15.5 厚さ: 6.0	破片	N5/0 灰色	輝石安山岩製
49	12	---	SE104	墨瓦 平瓦	横幅: 13.5 縦幅: 11.5 厚さ: 3.0前後	破片	N6/0 灰色	
50	12	---	SE104	墨瓦 平瓦	横幅: 10.3 縦幅: 19.3 厚さ: 2.0前後	破片	N6/0 灰色	
51	12	---	SE104	墨瓦 平瓦	横幅: 19.3 縦幅: 30.05 厚さ: 2.0前後	破片	N4/0 灰色	
52	12	二	SE104	曲物 底板	径: 20.0 厚さ: 0.9	2/3		
53	12	一	SE104	横壁	幅: (10.0) 高さ: 3.9 厚さ: 0.9 歯長: 3.2	断片		A I 型式 ツゲ
54	12	二	SE104	横壁	幅: (12.4) 高さ: 4.1 厚さ: 0.9 歯長: 3.4	断片		A II 型式 ツゲ
55	13	二	SE104	井戸側 部材	横幅: 63.6 縦幅: 41.0 厚さ: 1.8			
56	13	一	SE104	井戸側 部材	横幅: 64.4 縦幅: 40.0 厚さ: 2.4			
57	13	一	SE104	井戸側 部材	横幅: 62.8 縦幅: 32.6 厚さ: 1.8			
58	13	二	SE104	井戸側 部材	横幅: 64.0 縦幅: 37.2 厚さ: 2.2			
59	13	一	SE104	井戸側 部材	横幅: 64.0 縦幅: 7.4 厚さ: 3.6			
60	16	一三	SE106	土師器 甌	口径: (16.5) 器高: 4.6 高台径: 7.3 高台高: 0.6	1/4	10YR7/3 に近い橙色	
61	16	一	SE106	土師器 幅羽口	残存長: 6.4 残存径: 6.2 孔径: 2.2	破片	7.5YR7/6 橙色	点線羽口、先端部 分解
62	17	一三	SE107	土師器 皿	口径: 9.4 器高: 3.3	完形	2.5YR7/8 橙色	灯芯痕
63	17	一	SE107	土師器 壺A	口径: (22.4)	口頸部 1/4	5YR7/6 橙色	内外面に煤付着
64	17	一三	SE107	須臾器 壺	口径: (9.8) 体部最大径: (9.3)	上半部 1/6	N6/0 灰色	
65	17	二	SE107	石製品 砥石	幅: 5.1 高さ: 6.9 厚さ: 6.2	破片	10YR8/1 灰白色	2面に使用痕、 流紋岩

番号	挿入 番号	図版 番号	遺構・ 層位	器種	法量(cm)	残存率	色調	備考
66	20	一三	SK103	須恵器 杯蓋	口径:(11.4) 稜径:(11.0) 器高:(4.5)	1/4	SPB5/1 青灰色	外面に自然釉と灰 かぶり
67	20		SK103	須恵器 杯蓋	口径:(12.0) 稜径:(12.4) 器高:(4.7)	1/6	SPB5/1 青灰色	
68	20	一三	SK103	須恵器 杯蓋	口径:(12.8) 稜径:(12.8)	1/6	SPB4/1 暗青灰色	外面に灰かぶり
69	20	一三	SK103	須恵器 杯蓋	口径:(13.0) 稜径:(13.0) 器高:4.0	1/4	SPB5/1 青灰色	外面に灰かぶり
70	20	一四	SK103	須恵器 杯蓋	口径:12.2 稜径:12.1 器高:4.9	3/4	SPB5/1 青灰色	外面に灰かぶり
71	20	一四	SK103	須恵器 杯蓋	口径:(13.0) 稜径:(13.0) 器高:4.8	1/3	SPB5/1 青灰色	
72	20		SK103	須恵器 杯身	口径:(9.2) 受部径:(11.2)	1/4	SPB5/1 青灰色	
73	20		SK103	須恵器 杯身	口径:(9.2) 受部径:(11.6)	1/3	SPB5/1 青灰色	口縁部外面に自然 釉
74	20		SK103	須恵器 杯身	口径:(9.6) 受部径:(11.8)	1/6	SPD4/1 暗青灰色	体部に黒色釉を塗 布
75	20	一四	SK103	須恵器 杯身	口径:(10.6) 受部径:(12.5)	1/6	SPB5/1 青灰色	体部外面に灰かぶ り
76	20	一四	SK103	須恵器 杯身	口径:(11.4) 受部径:(13.2)	1/5		受部に灰かぶり
77	20	一四	SK103	須恵器 杯身	口径:(11.4) 受部径:(13.4) 器高:5.2	1/2	SPB5/1 青灰色 2.5YR4/2 灰赤色	焼成やや不良
78	20	一四	SK103	須恵器 有蓋酒杯蓋	口径:11.4 稜径:11.2 器高:5.3 幅み径:3.0 幅み高:0.6	2/3	SPB5/1 青灰色	外面全体に厚目の 灰かぶり
79	20	一四	SK103	須恵器 有蓋酒杯	裾部径:(8.0)	裾部 1/2	SPB5/1 青灰色	
80	20	一四	SK103	須恵器 広口壺	口径:(13.4) 体部最大径:(17.0)	口縁部～ 体部 1/4	SPB5/1 青灰色	口縁部内面に灰か ぶり
81	20	一四	SK103	須恵器 広口壺	口径:16.2	口縁部のみ	SPB4/1 暗青灰色	口縁部内面灰かぶ り
82	20	一四	SK103	須恵器 短頸広口壺	口径:(9.7) 体部最大径:(16.0)	上半部 1/6	外:SPB4/1 暗青灰色 内:SPB5/1 青灰色	肩部外面に灰かぶ り
83	20		SK103	須恵器 器台	口径:(27.0)	口縁部～ 体部 1/6	SPB5/1 青灰色	
84	20		SK103	土師器 甕	口径:(15.2)	上半部 1/6	5YR7/8 褐色	体部外面に黒斑
85	20	一四	SK103	土師器 把手		把手ほぼ完 存	2.5YR7/8 褐色	
86	24	一五	SD201	古式土師器 小型丸底壺 (小形湯鉢)	口径:(10.4) 体部最大径:(7.2) 器高:7.7	1/2	7.5YR7/4 に近い褐色	

番号	標図 番号	図版 番号	遺構・ 層位	器 種	法量 (cm)	残存率	色 調	備 考
87	24	一五	SD201	古式土師器 小型丸底壺 (小形蓋B3)	口径: 10.6 体部最大径: 8.8 器高: 7.8	2/3	5YR7/8 橙色	精製品
88	24	一五	SD201	古式土師器 直口壺A1	口径: 11.0 体部最大径: 12.4 器高: 14.1	2/3	10YR7/1 灰白	
89	24	一五	SD201	古式土師器 短頸壺B	口径: 15.1 体部最大径: 16.8 器高: 18.6	3/5	10YR7/1 灰白色	内外面に煤、被熱 により剥離
90	24	一五	SD201	古式土師器 二重口縁壺	口径: (19.6)	口縁部～ 肩部 1/3	5YR7/8 橙色	精製品
91	24	一五	SD201	古式土師器 壺(蓋J4)	口径: (14.4)	口縁部 1/6	7.5YR7/6 橙色	古備系
92	24	一五	SD201	古式土師器 壺(蓋D)	口径: 15.6 体部最大径: 21.1 器高: 22.6	3/5	5YR7/6 橙色	内外面に煤、器面 剥離
93	24		SD201	古式土師器 壺(蓋F)	口径: (14.0)	口縁部～ 肩部 1/3	5YR7/4 にぶい橙色	
94	24	一五	SD201	古式土師器 布留式壺 (蓋F2)	口径: (12.4) 体部最大径: (17.8)	口縁部～ 体部 1/3	10YR6/2 灰黄褐色	
95	24	一五	SD201	古式土師器 布留式壺 (蓋D2)	口径: (14.7) 体部最大径: (21.2)	上半部 1/5	10YR7/2 にぶい黄褐色	外面に黒斑
96	24	一五	SD201	古式土師器 布留式壺 (蓋F2)	口径: 12.2 体部最大径: 17.4	口縁部～ 体部 3/5	5YR7/6 橙色	外面に煤
97	24	一六	SD201	古式土師器 高杯(高杯A3)	口径: 16.6 杯部高: 5.6	杯部 3/5	2.5YR7/8 橙色	
98	24		SD201	古式土師器 高杯(高杯A5)	口径: 16.2 杯部高: 5.0	杯部 4/5	5YR7/8 橙色	外面に煤
99	24	一六	SD201	古式土師器 器台(器台C)	裾部径: 11.8	裾部のみ	7.5YR8/8 橙色	
100	24	一六	SD201	擦り石	幅: 3.7 高さ: 9.9 厚さ: 3.4	完形	N6/0 灰色	砂岩製 一方の先端に使用 痕
101	26	一六	SW201	古式土師器 小型丸底壺	口径: 9.8 体部最大径: 10.4 器高: (9.1)	3/5	5YR7/6 橙色	外面に煤
102	26	一六	SW201	古式土師器 布留式壺 (蓋F2)	口径: (14.6) 体部最大径: (21.0) 器高: (20.8)	3/4	10YR7/3 にぶい黄褐色	外面に煤
103	26	一六	SW201	古式土師器 布留式壺 (蓋D2)	口径: 16.3	上半部 5/6	10YR7/3 にぶい黄褐色	
104	26	一六	SW201	古式土師器 二重口縁壺	口径: 19.6 体部最大径: 39.8 器高: 48.4	2/3	外: 5YR7/8 橙色 内: 7.5YR6/4 橙色	底部外面に黒斑 東部凹面系
105	26	一六	SW201	古式土師器 複合口縁壺	口径: 26.0	口縁部～ 肩部ほぼ完 全	7.5YR6/3 にぶい黄褐色	
106	27	一七	第IV層	土師器 皿	口径: (8.2) 器高: 1.0	1/3	10YR6/3 にぶい黄褐色	
107	27	一七	第IV層	土師器 皿	口径: (8.2) 器高: 1.2	1/3	10YR6/3 にぶい黄褐色	

番号	挿入 番号	図版 番号	遺構・ 層位	器種	量量(cm)	残存率	色調	備考
108	27		第IV層	黒色土器 A類碗	高台径：(6.0) 高台高：0.6	底部 1/3	外：7.5YR7/6 褐色 内：N2/0 黒色	
109	27	一七	第IV層	黒色土器 B類碗	口径：11.6 器高：4.7 高台径：5.7 高台高：0.6	2/3	N3/0 暗灰色	小形品
110	27		第IV層	黒色土器 A類碗	口径：(15.0)	口縁部 1/5	外：7.5YR7/6 褐色 内：N2/0 黒色	
111	27	一七	第IV層	瓦質三足足釜 脚部	残存長：8.6 体部最大径：2.0		N5/0 灰色	
112	27	一七	第IV層	墨瓦 平瓦	残存幅：11.8 厚さ：2.3 前後	破片	外面：N6/0 灰色 内面：2.5Y6/1 黄灰色	
113	27	一七	第V層	土師器 皿B	口径：(14.8) 器高：2.0	1/3	5YR7/8 褐色	口縁部外面に煤付 着
114	27		第V層	土師器 皿B	口径：(15.0) 器高：(2.0)	1/6	5YR7/8 褐色	
115	27		第V層	土師器 鉢B	口径：(13.0)	口縁部～ 肩部 1/6	10YR8/2 灰白色	
116	27	一七	第V層	土師器 壺A	口径：(27.8)	口頸部 1/5	10YR8/3 浅黄褐色	
117	27	一七	第V層	須恵器 杯	口径：(9.8) 器高：3.9	1/4	5P08/1 青灰色	
118	27		第V層	須恵器 杯	高台径：6.2 高台高：0.6	高台部残存	5P05/1 青灰色	
119	27	一七	第VI層	須恵器 杯蓋	口径：(12.6) 器高：(3.8)	1/6	2.5Y6/1 黄灰色	
120	27		第VI層	須恵器 杯身	口径：(10.8) 受形径：(12.6)	口縁部～ 体部 1/8	5P05/1 青灰色	
121	27		第VI層	須恵器 杯身	口径：(13.0) 受部径：(15.7)	口縁部～ 体部 1/6	5P04/1 暗青灰色	外面に灰かぶり
122	27	一七	第VI層	須恵器 広口壺	口径：(14.3)	口縁部 1/3	5P05/1 青灰色	
123	27	一七	第VI層	須恵器 鳥杯	口径：(13.5)	杯部 1/3	5P04/1 暗青灰色	内面に灰かぶり
124	27		第VI層	土師器 碗	口径：(13.7) 器高：(4.8)	1/4	外：2.5YR7/8 褐色 内：5YR7/8 褐色	
125	27		第VI層	土師器 把手		把手の先端 欠損	2.5YR7/8 褐色	
126	27	一七	第VI層	土師器 把手		把手完存	7.5YR7/4 にぶい褐色	
127	27	一七	第VI層	土師器 把手		把手完存	2.5YR7/8 褐色	
128	28		第VII層	弥生土器 小形壺	口径：(7.0) 体部最大径：(7.2)	口縁部～ 肩部 1/3	外：5YR7/8 褐色 内：5YR7/4 にぶい褐色	
129	28		第VII層	古式土師器 小形丸底壺 (小形壺B2)	口径：(10.8) 体部最大径：(9.6)	口縁部～ 体部 1/4	5YR7/8 褐色	体部外面に煤付着
130	28	一八	第VII層	古式土師器 小形丸底壺 (小形壺B2)	口径：12.0 体部最大径：10.1 器高：7.9	口縁部～ 部欠損	10YR8/3 浅黄褐色	
131	28		第VII層	古式土師器 小形丸底壺 (小形壺B3)	口径：11.0 体部最大径：7.0 器高：7.0	4/5	5YR7/8 褐色	

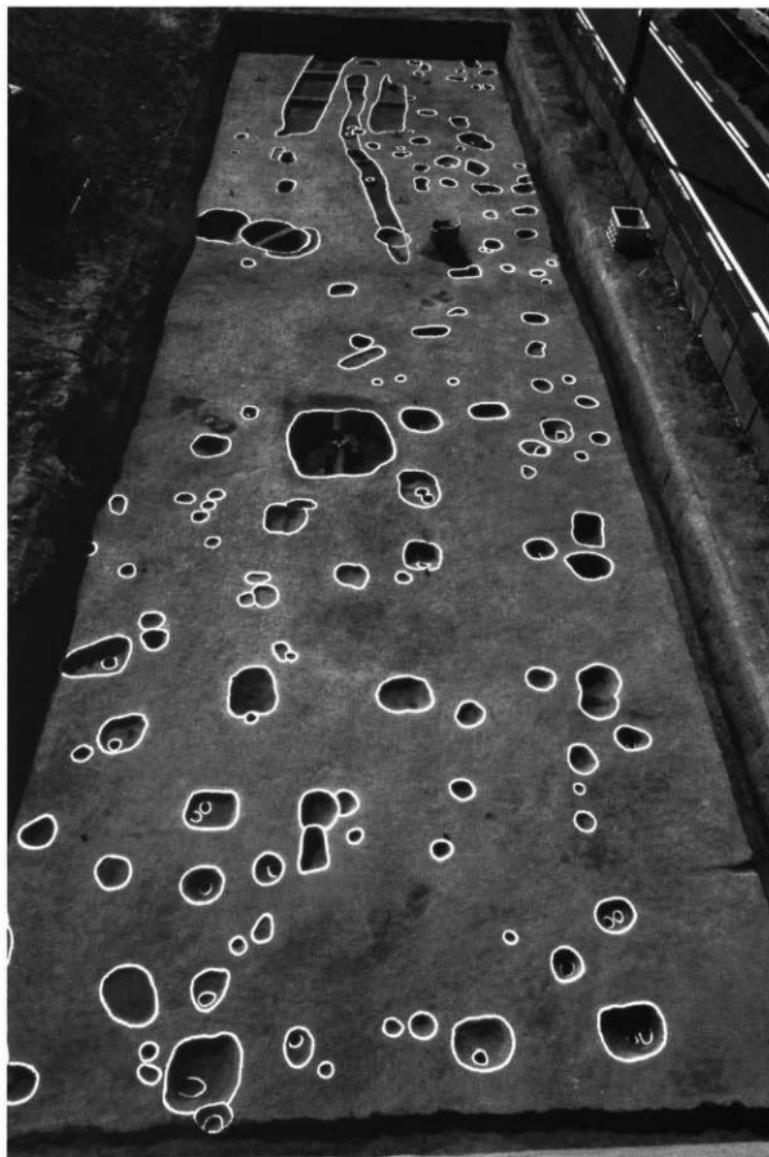
番号	標図 番号	図版 番号	遺構・ 層位	器 種	法量(cm)	残存率	色 調	備 考
132	28	一八	第四層	古式土師器 小形丸底壺 (小形垂鉢B)	口径: 11.8 体部最大径: 7.4 器高: 7.9	5/6	5YR7/8 橙色	外面に黒斑
133	28	一八	第四層	古式土師器 点口壺	口径: 11.4	口縁部完存	7.5YR4/1 褐灰色	
134	28		第四層	古式土師器 直口壺	口径: 13.4	口頸部のみ	5YR7/6 橙色	内外面に黒
135	28	一八	第四層	古式土師器 点口壺	口径: 12.2	上半部のみ	7.5YR8/4 浅黄褐色	体部外面に黒斑
136	28		第四層	古式土師器 直口壺	口径: 16.2	口縁部 4/5	10YR5/2 灰黄褐色	生駒山麓産
137	28	一八	第四層	古式土師器 点口壺	口径: (20.6)	口縁部～ 肩部 1/3	5YR7/8 橙色	生駒山麓産
138	28	一八	第四層	古式土師器 二重口縁壺	口径: (18.2)	口縁部～ 肩部 4/5	10YR8/3 浅黄褐色	山陰系
139	28	一八	第四層	古式土師器 二重口縁壺	口径: 13.5	上半部のみ	2.5YR7/8 橙色	山陰系
140	28		第四層	古式土師器 二重口縁壺	口径: (18.2)	口縁部 1/8	外: 10YR7/3 にぶい黄褐色 内: 5YR7/4 にぶい橙色	山陰系
141	28	一八	第四層	古式土師器 二重口縁壺	口径: (16.4) 体部最大径: (25.6) 器高: 31.6	1/2	10YR 7/3 にぶい黄褐色	山陰系
142	28		第四層	弥生土器 壺	口径: (8.8)	体部 1/3	外: 7.5YR7/4 にぶい橙色 内: 10YR7/2 にぶい橙色	外面に黒斑
143	28	一八	第四層	古式土師器 小形鉢(鉢G)	口径: 8.0 体部最大径: 7.1 器高: 5.0	口縁部の 欠損	外: 7.5YR7/4 にぶい橙色 内: 10YR7/2 にぶい黄褐色	口縁部外面に黒斑
144	28		第四層	古式土師器 有段鉢(鉢H2)	口径: (16.2)	口縁部～ 体部 1/5	2.5YR7/8 橙色	
145	28		第四層	古式土師器 器台(器台B)	口径: 7.6	受部 6/7	5YR7/8 橙色	
146	28	一九	第四層	古式土師器 器台(器台B)	受部径: 9.2 器高: 7.6 裾部径: 12.0	3/5	5YR7/8 橙色	裾部外面に黒斑 杯部内面に黒
147	28	一九	第四層	古式土師器 器台(器台B)	裾部径: (11.8)	裾部 1/2	5YR7/8 橙色	裾部外面に黒斑
148	28		第四層	古式土師器 器台(器台B)	裾部径: (12.6)	裾部 1/2	5YR7/8 橙色	
149	28	一九	第四層	弥生土器 高杯	口径: 25.0 器高: 17.1 底径: 13.8	裾部の一部 欠損	5YR6/6 橙色	生駒山麓産
150	28	一九	第四層	古式土師器 高杯	口径: 16.2 杯部高: 4.6	杯部 4/5	外: 5YR7/8 橙色 内: 7.5YR8/4 浅黄褐色	口縁部外面に黒斑
151	28	一九	第四層	古式土師器 高杯	裾部径: (10.2)	脚柱部 1/2	5YR7/8 橙色	
152	28		第四層	古式土師器 高杯	裾部径: (11.6)	脚柱部 2/5	5YR7/8 橙色	
153	28	一九	第四層	古式土師器 高杯	裾部径: (12.4)	脚柱部 5/6	5YR7/8 橙色	
154	29	一九	第四層	弥生土器 壺	口径: (26.6)	口頸部 1/6	5YR7/6 橙色	胎土は生駒山麓産
155	29	一九	第四層	弥生土器 壺	口径: 14.0 器高: 18.7 底径: 4.7	5/6	5YR6/4 にぶい橙色	胎土は生駒山麓産 外面下半部に黒斑
156	29	一九	第四層	古式土師器 川内式壺 (壺B4)	口径: (13.5)	口縁部～ 肩部 1/6	2.5YR7/6 橙色	

番号	採回 番号	図版 番号	遺構・ 層位	器 種	法量 (cm)	残存率	色 調	備 考
157	29		第Ⅶ層	古式土師器 川内式甕 (甕B4)	口径：(13.5)	口縁部～ 肩部 1/6	10YR6/2 灰黄褐色	外面に煤
158	29	一九	第Ⅶ層	古式土師器 庄内式甕 (甕B4)	口径：14.3	上半部のみ	5YR7/4 に近い橙色	内外面に煤
159	29	二〇	第Ⅶ層	古式土師器 壺(壺D)	口径：(13.2)	口縁部～ 肩部 1/3	7.5YR6/4 に近い橙色	生駒西麓産
160	29		第Ⅶ層	古式土師器 甕(甕D)	口径：15.6 体部最大径：18.8 器高：18.5	2/3	5YR7/4 に近い橙色	生駒西麓産
161	29	二〇	第Ⅶ層	古式土師器 甕(甕D)	口径：(15.7) 体部最大径：(22.4)	口縁部～ 体部 1/3	7.5YR4/2 灰黄褐色	内外面に煤
162	29	二〇	第Ⅶ層	古式土師器 庄内式甕 (甕B4)	口径：(16.2) 体部最大径：(25.4)	口縁部～ 体部 1/3	7.5YR4/2 灰黄褐色	外面に煤
163	29		第Ⅶ層	古式土師器 甕	口径：(13.4)	口縁部 1/3	7.5YR6/4 に近い橙色	
164	29	二〇	第Ⅶ層	古式土師器 甕	口径：(13.2)	口縁部～ 肩部 1/4	10YR5/2 灰黄褐色	
165	29	二〇	第Ⅶ層	古式土師器 甕	口径：(13.6)	口縁部～ 肩部 2/3	10YR5/2 灰黄褐色	外面に煤
166	29	二〇	第Ⅶ層	古式土師器 甕	口径：(12.2)	口縁部～ 肩部 1/3	10YR8/3 浅黄褐色	
167	29	二〇	第Ⅶ層	古式土師器 甕	口径：13.1 体部最大径：17.1	底部欠損	7.5YR8/4 浅黄褐色	内外面に煤
168	29	二〇	第Ⅶ層	古式土師器 甕	口径：14.0 体部最大径：17.1 器高：(17.7)	3/5	5YR7/6 橙色	内外面に煤
169	29		第Ⅶ層	古式土師器 甕	口径：15.6	上半部 2/3	7.5YR4/2 灰褐色	内外面に煤

第4章 小結

本調査では、古墳時代前期前半(布留式古相)、飛鳥時代前期、奈良時代後期～平安時代前期を中心とする居住域を構成した遺構・遺物を検出した。北側に隣接する第48次調査においても、本調査で検出された当該期の遺構の広がりが見出されているため総合的なまとめは第48次調査成果を総合して「本書Ⅱの第3章まとめ」に掲載した。

图 版



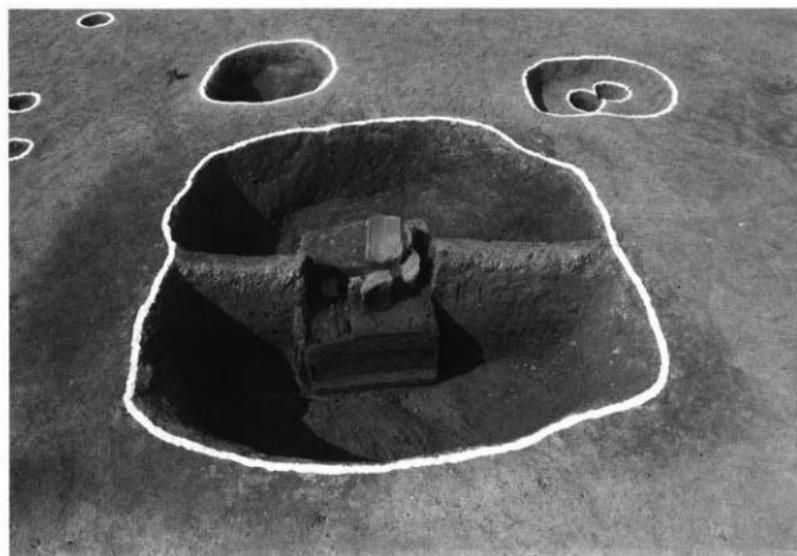
第1面北区全景(東から)



第1面南区全景(東から)



S E 101~103検出状況(南から)



S E 104検出状況(南から)



S E 104検出状況(南から)



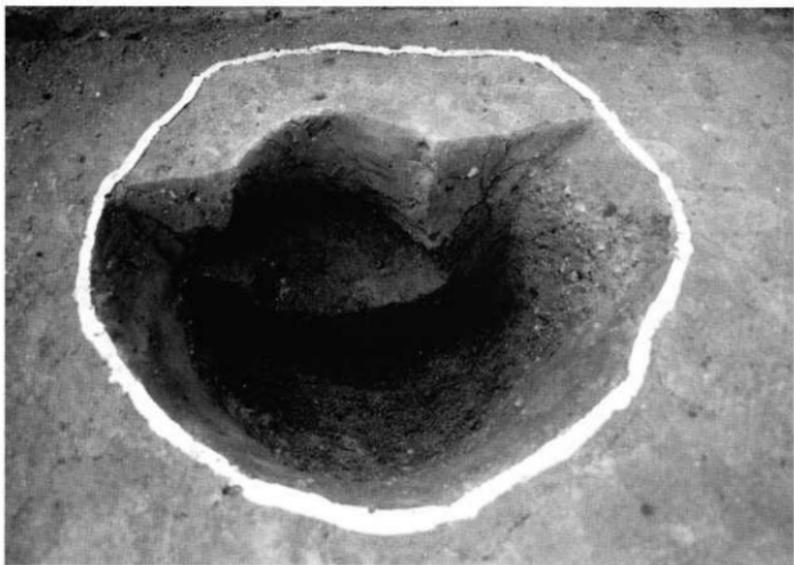
S E 104井戸側内完器状況(南から)



S E 104井戸側下部内遺物出土状況(南から)



S E 104井戸側



S E 105検出状況(北から)



SE106検出状況(南から)



同上掘方断割り状況(南から)



S E107検出状況(東から)



S K103検出状況(南から)



第2面全景(東から)



SW201遺物出土状況(東から)



2



4



11



12



13



14

SE103(2・4)、SE104(11~14)出土遺物



15



16



18



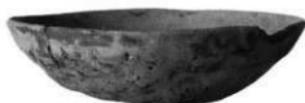
19



21



20



22



27



28

SE104 (15・16・18~22・27・28) 出土遺物



32

36

30

38

31

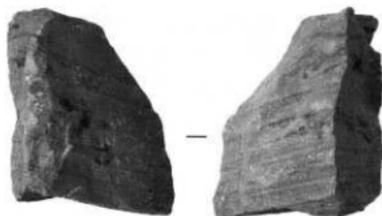
39

34

40



43



47



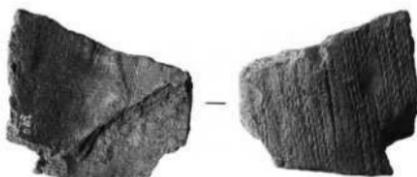
44



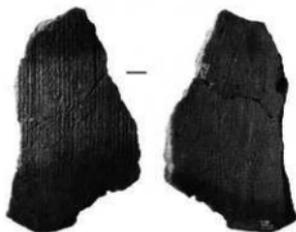
48



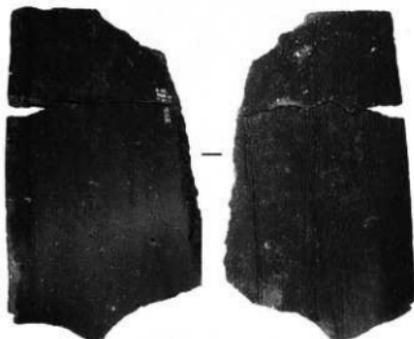
46



49



50



51



53



54



—



I



52



55



—



56



—



57



—



58



—



59



60



62



61



63



64



65



66



68



69

SE106(60·61)、SE107(62~65)、SK103(66·68·69)出土遺物



70



79



71



80



75



81



76



82



77



78



85

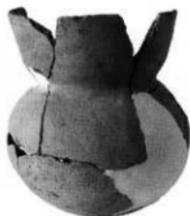
S K 103 (70・71・75~82・85) 出土遺物



86



87



88



89



90



91



92



94



95



96



97



101



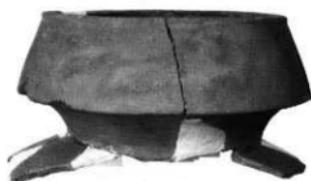
99



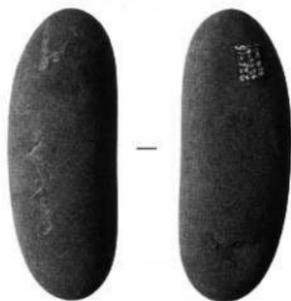
103



102



105



100



104



106



116



109



117



113



122



111



123



119



126



127



111



112



第IV層(106・109・111・112)、第V層(113・116・117)、第VI層(119・122・123・126・127)出土遺物



130



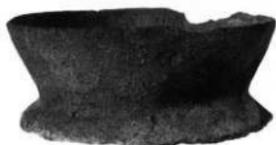
138



132



139



133



141



135



137



143



146



153



147



154



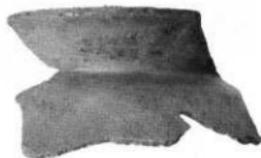
149



155



150



156



151



158



159



165



161



166



162



167



164



168

II 東郷遺跡第48次調査 (T G 94-48)

例 言

1. 本書は、大阪府八尾市桜ヶ丘一丁目23. 24番地で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第48次調査(TG94-48)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が申請者から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成6年10月24日～12月14日(実働36日間)にかけて岡田清一が担当した。調査面積は約630㎡を測る。
1. 現地調査においては、大西謙太郎・垣内洋平・辻野優子・富永勝也(現 財団法人北海道埋蔵文化財センター)・奥儀徳保・吉田由美恵が参加した。
1. 整理業務は、調査終了後随時行い、平成22年1月末に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測-沢村妙子・辻野・吉田、図面トレース-市森千恵子・山内千恵子、図面レイアウト山内・原田昌則、遺物撮影-北原清子、遺物図版-北原・尾崎良史が行った。
1. 本書の執筆・編集は終了報告書を基に原田が行った。

本文目次

第1章 はじめに	51
第2章 調査概要	52
第1節 調査の方法と経過	52
第2節 層序	52
第3節 検出遺構と出土遺物	54
1) 第1面	54
2) 第2面	68
3) 第3面	77
4) 遺構に伴わない出土遺物	86
5) 出土遺物法量表	89
第3章 まとめ	95

插图目次

第1图	調査区設定図	51
第2图	西壁断面図	53
第3图	第1面検出遺構平面図	55
第4图	S B 101～S B 104平断面図	56
第5图	S B 105、S B 106平断面図	57
第6图	S K 108平断面図	59
第7图	S K 108出土遺物実測図	59
第8图	S K 109平断面図	60
第9图	S K 109出土遺物実測図	60
第10图	S K 112平断面図	61
第11图	S K 112出土遺物実測図	62
第12图	S K 201平断面図	68
第13图	S K 201出土遺物実測図	68
第14图	第2面検出遺構平面図	69
第15图	S K 203平断面図	70
第16图	S K 203出土遺物実測図	70
第17图	S K 204平断面図	71
第18图	S K 204出土遺物実測図	71
第19图	S P 216出土遺物実測図	72
第20图	S O 201、S O 202断面図	73
第21图	S O 202出土遺物実測図	74
第22图	NR 201～NR 203断面図	75
第23图	NR 201、NR 202、NR 203出土遺物実測図	76
第24图	S I 301、S I 302平断面図	77
第25图	第3面検出遺構平面図	78
第26图	S K 302平断面図	79
第27图	S K 302出土遺物実測図	80
第28图	S K 304平断面図	81
第29图	S K 304、S K 306出土遺物実測図	81
第30图	S K 306平断面図	82
第31图	S D 308出土遺物実測図	83
第32图	S D 308、S D 310断面図	83
第33图	S D 310出土遺物実測図	84
第34图	S W 301平断面図	84
第35图	S W 302平断面図	85
第36图	S W 301、S W 302出土遺物実測図	85

第37図	第Ⅲ層出土遺物実測図	87
第38図	第Ⅳ層出土遺物実測図	88
第39図	東郷遺跡東部の弥生時代中期から後期の遺構分布図	96
第40図	東郷遺跡東部の古墳時代初頭(庄内式期)から古墳時代前期(布留式期)の遺構分布	98
第41図	東郷遺跡東部の古墳時代中期から後期の遺構分布	99
第42図	東郷遺跡東部の奈良時代から平安時代前期の遺構分布	100

表 目 次

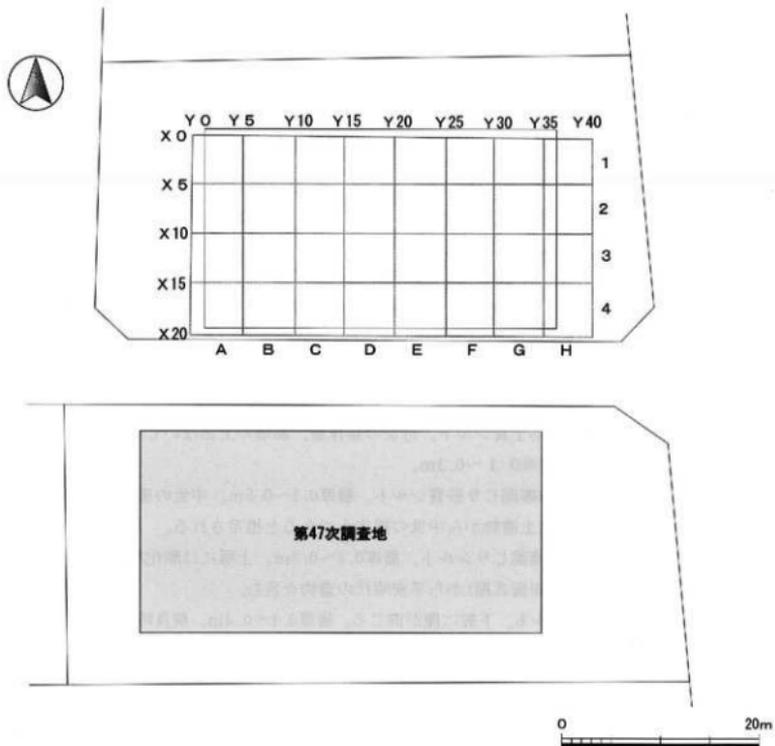
第1表	第1面	小穴・柱穴法量表	65
第2表	第2面	小穴・柱穴法量表	73
第3表	第3面	小穴・柱穴法量表	82

図 版 目 次

図版 一	南区	第1面	図版一〇	S K 108、S K 109出土遺物
	南区	S K 108検出状況	図版一一	S K 112出土遺物
図版 二	南区	S K 109検出状況	図版一二	S K 112、S K 201、S K 203出土遺物
	南区	S K 112検出状況		
図版 三	北区東部	第2面	図版一三	S K 204、S P 216出土遺物
	南区西部	第2面	図版一四	S O 202、N R 201出土遺物
図版 四	北区	S K 201	図版一五	N R 202、N R 203出土遺物
	南区	S K 203	図版一六	S K 302出土遺物
図版 五	南区	S K 204	図版一七	S K 304、S K 306、S D 308、S D 310出土遺物
	北区	S P 216		
図版 六	北区	N R 201~203	図版一八	S D 310、S W 301、S W 302出土遺物
	南区	第2・3面		
図版 七	北区	第3面	図版一九	第Ⅲ層出土遺物
	北区	S I 301・302	図版二〇	第Ⅲ層、第Ⅳ層出土遺物
図版 八	北区	S K 302	図版二一	第Ⅳ層出土遺物
	南区	S K 306		
図版 九	北区	S W 301		
	北区	S W 302		

第1章 はじめに

本調査地は、本書「I 東郷遺跡第47次調査(TG94-47)」で報告した調査地の市道を挟んだ北側に位置している。共同住宅建設工事に先立って平成6年6月28日に八尾市教育委員会文化財課により遺構確認調査(米田1995)が実施された結果、奈良時代を中心とする遺構・遺物が検出されたことから発掘調査に至ったものである。発掘調査の業務は事業者、八尾市教育委員会、(財)八尾市文化財調査研究会の三者間で締結された協定書に基づいて当調査研究会が事業者から委託を受けて行った。現地調査の期間は平成6年10月24日～12月14日までの実働36日間である。調査面積は約630㎡を測る。報告書作成に関わる業務は、現地発掘調査終了後、平成21年12月末日まで随時実施した。なお調査地周辺における既往調査や東郷遺跡周辺の地理・歴史的環境については、本書「I 東郷遺跡第47次調査(TG94-47)」の第2章を参照されたい。



第1図 調査区設定図(S=1/500)

第2章 調査概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、共同住宅建設に伴うもので、当調査研究会が本遺跡内で実施した第48次調査(TG94-48)にあたる。調査対象となる範囲は建設工事によって破壊される東西約33m、南北約19mで面積は約630㎡を測る。

調査区内の地区割りについては、本調査地の北西部に設置した任意の地点を基準点(Y0、X0)として、東西40m、南北20mにわたって設定した。一区画の単位は5m四方で、東西方向についてはアルファベット(西からA～H)、南北方向は算用数字(北から1～4)で示し、地区名の表示は1A～4H地区と呼称した。地点の表記においてはY軸、X軸の交点の数値で示した。

発掘調査では、市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に従って、現地表から1.4m前後までを重機によって掘削した後、以下、0.5m前後については人力掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。なお、残土処理の関係から調査区を北部と南部に二分する方法をとり、南部から調査を開始した。調査の結果、現地表下1.2～1.6m(T.P.+6.9～6.6m)付近に存在する第V層上面ないしは第VI層上面で古墳時代中期から平安時代前期の居住城(第1・2面)、さらに第2面から0.1～0.2m下部(T.P.+6.8～6.6m)に存在する第V層上面において古墳時代前期の居住城(第3面)を検出した。出土遺物には弥生時代後期から鎌倉時代の弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、中国製磁器、墨瓦、土製品、木製品、石製品等があり、総量はコンテナ20箱に及ぶ。

第2節 層序(第2図)

調査区の南部と北端部分で、東西方向に伸びる近世時期の島畑が確認された。このため、島畑間に存在する水田部分については、基本層序の第3層上部に削平がおよぶ部分が認められた。

それ以外については、シルトの優勢な比較的安定した層相が認められた。ここでは普遍的に存在した8層(0～VII層)を抽出して基本層序とした。

第0層：盛土(客土)層。層厚0.5m前後。

第I層：N3/0暗灰色砂質シルト。近代の耕作土層。層厚0.05～0.2m。

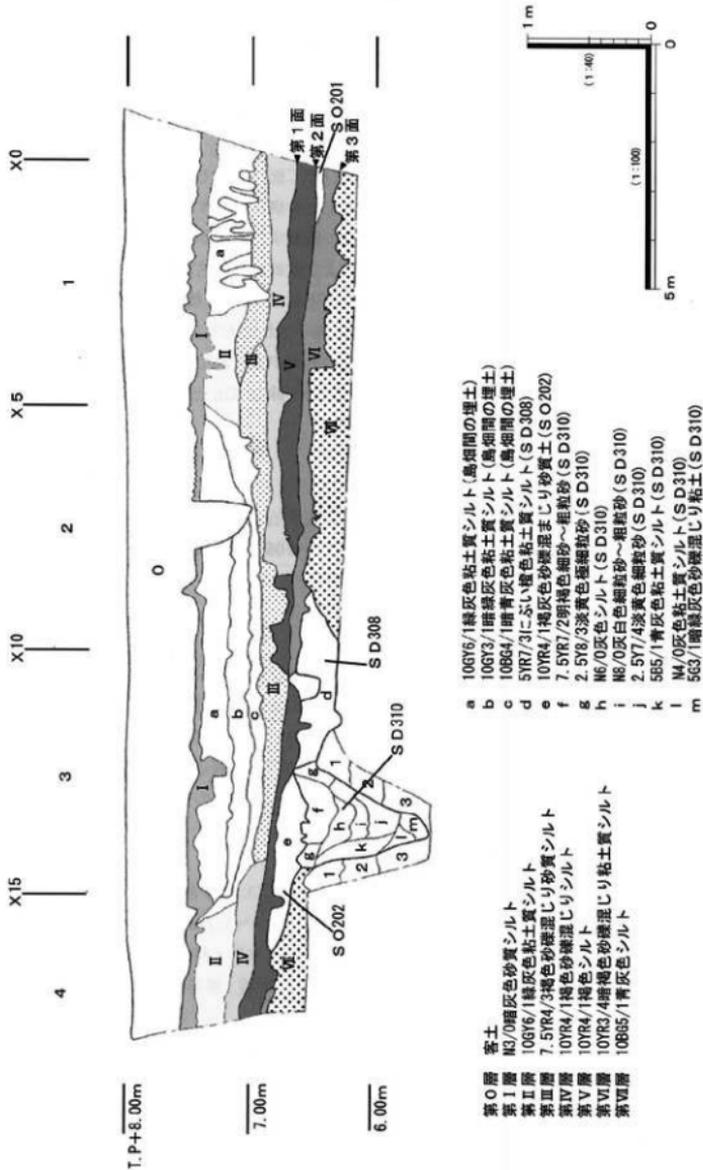
第II層：10GY6/1緑灰色粘土質シルト。近世の耕作層。島畑の上部ないしは、島畑間の水田部分の作土。層厚0.1～0.3m。

第III層：7.5YR4/3褐色砂礫混じり砂質シルト。層厚0.1～0.5m。中世の遺物を含む。全般に洶汰が不良で、出土遺物から中世の耕作土であると推定される。

第IV層：10YR4/1褐色砂礫混じりシルト。層厚0.1～0.3m。上層には酸化鉄分が多く付着する。古墳時代前期(布留式期)から平安時代の遺物を含む。

第V層：10YR4/1褐色シルト。下部に礫が混じる。層厚0.1～0.4m。奈良時代から平安時代前期の遺物を含む。本層の上面(T.P.+6.8m前後)において平安時代前期を中心とする遺構を検出した(第1面)。

第VI層：10YR3/4暗褐色砂礫混じり粘土質シルト。層厚0.1～0.25m。古墳時代初頭から前期の遺物を含む。土壌化が著しく、硬く締まっている。本層下面(T.P.+6.5m前後)で古墳時代中期の遺構を検出した(第2面)。



第2図 西壁断面図(水平S=1/100、垂直V=1/40)

- 第0層 客土
 第1層 Ⅲ/0暗灰色砂質シルト
 第2層 10GY6/1緑灰色粘土質シルト
 第3層 7.5YR4/3褐色砂礫混じり砂質シルト
 第4層 10YR4/1褐色砂礫混じりシルト
 第5層 10YR4/1褐色シルト
 第6層 10YR3/4暗褐色砂礫混じり粘土質シルト
 第VII層 10B65/1青灰色シルト

- a 10GY6/1緑灰色粘土質シルト(鳥畑岡の埴土)
 b 10GY3/1暗緑灰色粘土質シルト(鳥畑岡の埴土)
 c 10B64/1暗青灰色粘土質シルト(鳥畑岡の埴土)
 d 5YR7/3にふい灰色粘土質シルト(S D 308)
 e 10YR4/1褐色砂礫混じり砂質土(S O 202)
 f 7.5YR7/2暗褐色細砂~粗粒砂(S D 310)
 g 2.5Y8/3淡黄色極細粒砂(S D 310)
 h Ⅲ/0灰色シルト(S D 310)
 i Ⅲ/0灰白色極細砂~粗粒砂(S D 310)
 j 2.5Y7/4淡黄色細粒砂(S D 310)
 k 5B5/1青灰色粘土質シルト(S D 310)
 l Ⅳ/0灰色粘土質シルト(S D 310)
 m 5E3/1暗緑灰色砂礫混じり粘土(S D 310)

第VII層:10BG5/1青灰色シルト。層厚0.1~0.3m。本層上面(T.P.+6.8~6.3m)で古墳時代前期(布留式期)の遺構を検出した(第3面)。

第3節 検出遺構と出土遺物

今回の調査では、二分割した調査区(北区・南区)で二面にわたる調査を実施した。そのうち、上面の調査においては、第V層上面ないし第VI層上面を構築面とする遺構面を同一面として捉えた結果、北区と南区で遺構配置や先後関係について齟齬する部分が一部に認められている。それらを考慮して、調査終了報告作成時点で、層位および遺物から①古墳時代前期(布留式期)、②古墳時代中期~後期、③平安時代前期(一部中世および近世を含む)の概ね三時期を3面(第1面~第3面)の遺構面に区別した図面が調査担当者により提示されており、本文作成においてもそれに従った。そのため、一部、検出面と時期が整合しないものが含まれている。以下、各面ごとに概観する。なお、遺構図面の掲載については、掘立柱建物を除けば出土遺物を掲載した遺構のみに限定した。

1) 第1面(第3図)

第1面は、現地地表下m(T.P.+6.8m前後)付近に存在する第V層上面で古墳時代中期、平安時代前期、江戸時代に比定される掘立柱建物6棟(SB101~106)、土坑19基(SK101~119)、溝7条(SD101~107)、小穴131個(SP101~1131)を検出した。

掘立柱建物(SB)

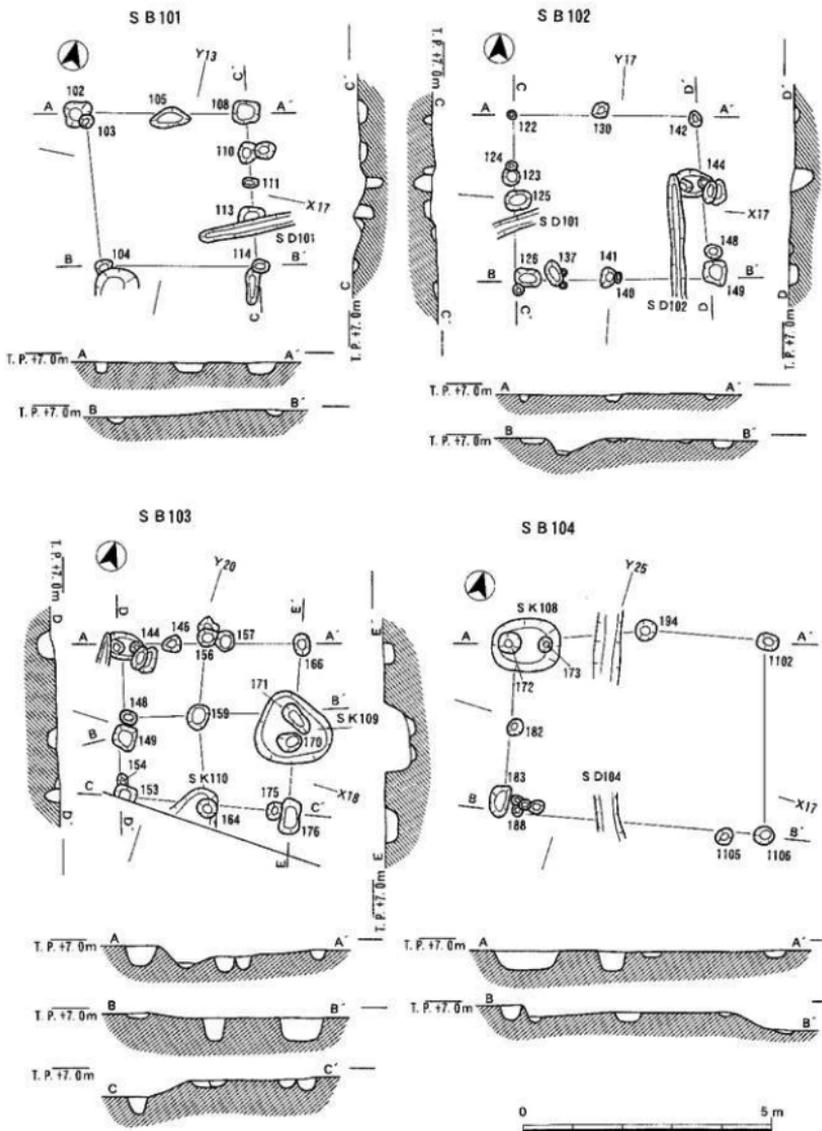
6棟(SB101~106)を検出した。SB106を除き調査区の南東部に集中しており、南接する第47次調査地で検出した掘立柱建物群を主体とする居住域の北部と推定される。建物の主軸方位から、主軸をN5°Wに持つSB102のAグループ、N13°~20°Wに主軸を持つSB101・103~105のBグループ、とN30°Wに主軸を持つSB106Cグループがある。周辺で検出された遺構との関係から構築時期は飛鳥時代から平安時代前半が推定され、第47次調査の東部で検出した掘立柱建物群との関係が推定される。

SB101(第4図)

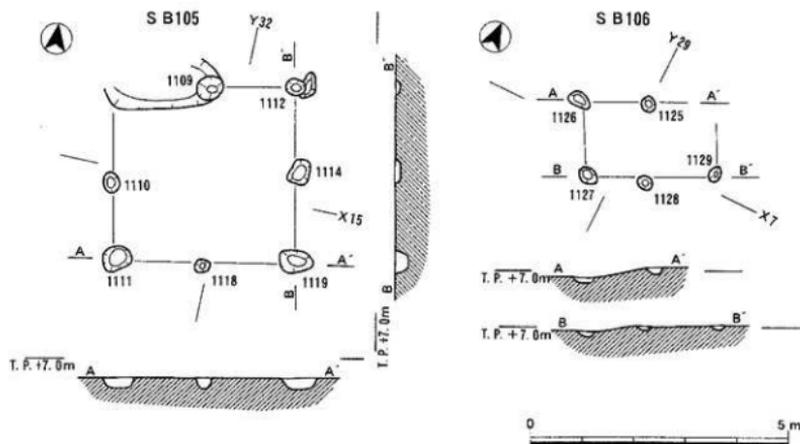
4C地区で検出した。東西2間(3.2~3.5m)、南北2間(3.2m)を測る。一部の柱穴を欠くが、桁行(東西)方向の柱間が1.6m、梁間(南北)方向の柱間が1.4~1.7mを測る。主軸方向はN18°Wで床面積は約10.7㎡を測る。柱穴の掘方形状は円形・隅丸方形・楕円形・不定形がある。法量は径0.23~0.77m、深さ0.13~0.33mを測る。各柱穴から土師器・須恵器・製塩土器が出土した他、SP102には柱根が遺存していた。

SB102(第4図)

SB101の東側で検出した。東西2間(3.8~4.0m)、南北2間(3.2~3.3m)を測る。桁行(東西)方向の柱間が1.8~2.2m、梁間(南北)方向の柱間が1.5~1.8mを測る。主軸方向はN5°Wで床面積は約12.1㎡を測る。柱穴の掘方形状は円形・隅丸方形・不定形がある。法量は径0.11~0.70m、深さ0.09~0.2mを測る。各柱穴内から土師器・製塩土器・須恵器の細片が少量出土している。



第4圖 SB101~SB104断面圖(S=1/100)



第5図 SB105・SB106 平面断面図(S=1/100)

SB103(第4図)

SB102の東側で重複する形で検出した。規模は東西2間(3.4~3.7m)、南北2間(3.0~3.5m)を測る総柱建物である。柱間は1.6~1.9mを測る。主軸方向は $N20^{\circ}W$ で床面積は約 $11.5m^2$ を測る。柱穴の平面形状は円形・隅丸方形・楕円形・不定形で、法量は径0.23~0.70m、深さ0.07~0.47mを測る。各柱穴内からは土師器、須恵器の細片が少量出土している。なお、SK109については出土遺物からSP171の廃絶後に構築されたものである。

SB104(第4図)

SB103の東側に併行している。一部の柱穴を欠くが東西2間(5.3m)、南北2間(3.2~3.7m)を測る東西棟建物である。桁行(東西)方向の柱間が2.5~2.7m、梁間(南北)方向の柱間が1.5~1.6mを測る。主軸方向は $N15^{\circ}W$ で床面積は約 $18.3m^2$ を測る。柱穴の平面形状は円形・隅丸方形・楕円形で、法量は径0.20~0.72m、深さ0.04~0.30mを測る。各柱穴内からは土師器の細片が少量出土した他、SP182に根石が存在していた。

SB105(第5図)

SB104の東側に併行している。建物北西隅の柱穴がSK114と重複しており検出できなかったが、規模は東西2間(3.5m)、南北2間(3.3m)を測る。桁行(東西)方向の柱間が1.6m前後、梁間(南北)方向の柱間が1.5mを測る。主軸方向は $N13^{\circ}W$ で床面積は約 $11.5m^2$ を測る。柱穴の法量は径0.14~0.48m、深さ0.10~0.23mを測る。各柱穴内からは土師器・須恵器の細片が僅かに出土している。

SB106(第6図)

2FG地区で検出した。東西2間(2.5m)、南北1間(1.5m)を測る東西棟の小型建物である。桁行(東西)方向の柱間が1.1~1.3m、梁間(南北)方向の柱間が1.5mを測る。主軸方向は $N30^{\circ}W$ で床面積は約 $3.8m^2$ を測る。柱穴の平面形状は円形・楕円形で、法量は径0.26~0.45m、深さ0.09~0.15mを測る。各柱穴内から遺物は出土していない。

土坑(SK)

SK101・102

いずれも2CD地区で検出した。共に南部は削平を受けているが、残存部分からみて隅丸方形を呈するものと思われる。遺構本来の構築面は第IV層上面である。検出部分での規模は、SK101が東西幅2.3m、南北幅1.0m、深さ1.5m、SK102が東西幅0.9m、南北幅1.5m、深さ1.5mを測る。埋土は共に淡灰色シルト混粘土である。遺物は肥前系の磁器碗の細片が少量出土している。遺構の壁面がほぼ垂直に掘られており、第VIII層5B2/1青黒色粘土質シルトにまで達していることから粘土を採掘するための採掘坑であった可能性が高い。

SK103

4C地区で検出した。平面の形状は南北方向に長い楕円形を呈する。規模は長径1.0m、短径0.64m、深さ0.27mを測る。断面の形状は半円形を呈する。埋土は10YR4/1褐灰色粘質土である。遺物は土師器、須恵器の細片が少量出土したが時期を明確にし得たものは無い。

SK104

4C地区で検出した。北部でSP104を切り、南側は調査区外に至る。検出部で東西幅0.85m、南北幅0.82m、深さ0.26mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色粘質土である。遺物は土師器の細片が極少量出土したが時期を明確にし得たものは無い。

SK105

4D地区で検出した。北側をSD101、南西側をSP136により切られているが、検出部分からみて南北方向に長い楕円形を呈する。規模は東西幅0.9m、南北幅0.95m、深さ0.52mを測る。断面の形状は半円形を呈する。埋土は10YR4/1褐灰色粘質土である。遺物は古墳時代中期と推定される土師器の細片が少量出土したが図化し得たものは無い。

SK106(図版一)

4D地区で検出した。東側をSD102に切られているが、検出部分からみて南北方向に長い楕円形を呈する。規模は検出部で東西幅0.28m、南北幅1.10m、深さ0.05mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色粘質土である。遺物は古墳時代中期に比定される土師器、須恵器の細片が少量出土したが図化し得たものは無い。

SK107(図版一)

3DE地区で検出した。SD103の北端部分を切っている。隅丸長方形を呈する。東西幅1.3m、南北幅0.65m、深さ0.27mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は10YR4/1褐灰色粘質土である。遺物は出土遺物していないが、古墳時代中期に比定されるSD103を切ることから、構築時期はそれ以降が想定される。

SK108(第6・7図、図版一・一〇)

4E地区で検出した。SD103を切っている。平面の形状は東西方向に長い楕円形を呈する。規模は東西径1.4m、南北径1.1m、深さ0.31mを測る。底部に奈良時代の掘立柱建物であるSB104を構成するSP172・SP173が存在している。堆積状況からみて土坑埋没後に構築されたものと推定される。土坑内の埋土は1層10YR4/1褐灰色粘質土、2層10YR5/1褐灰色粘土、3層10YR5/3にぶい黄褐色砂質土である。遺物は1層内から平安時代前半～中頃にかけての須恵器、土師器の碗・甕等が少量出土している。そのうち図化できたものは、土師器碗5点(1～5)、土師器甕2

点(6・7)の計7点である。

1～3は高台を持たない土師器碗Aである。3が完形品、

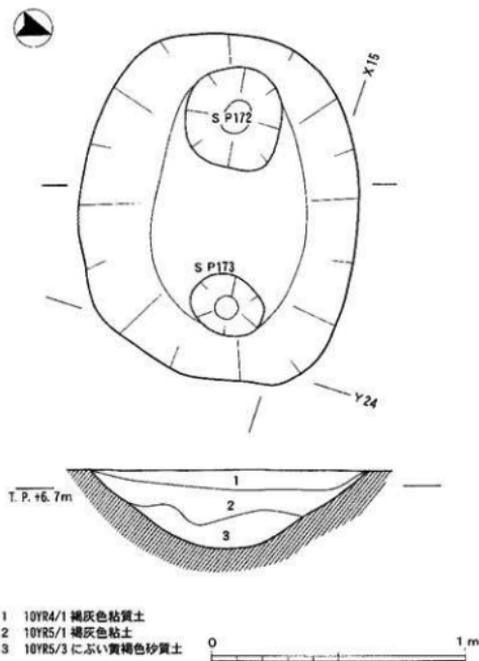
1・2が1/2以上残存している。

口縁部はいずれも強めのヨコナデ、体部外面は2を除いては、いずれも体部外面に指頭圧痕が顕著に認められる。

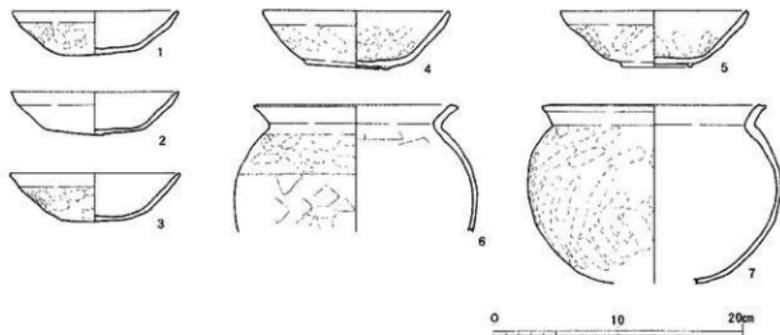
4・5は高台を持つ土師器碗Bで、共に完形品である。高台は形骸化した貼付け高台で、4については高台高や幅が不揃で楕円形に廻らされている。

6・7は土師器甕Bである。双方とも球形に近い体部から外反する口縁部を呈し、端部は上面に沈線が廻る平坦面を有している。いずれも体部外面の指頭圧痕が顕著である。

7の体部外面に煤が付着している。佐藤編年の平安時代Ⅱ期古(9世紀前半～中葉)に比定される。



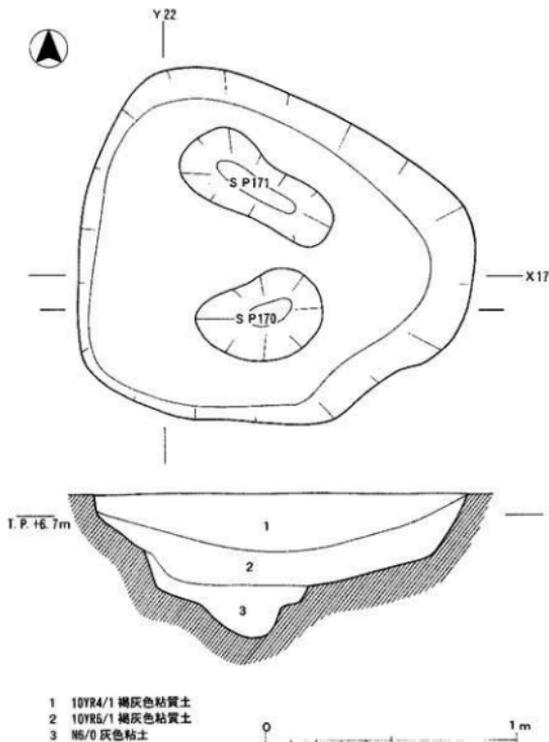
第6図 SK108 平面図(S = 1/20)



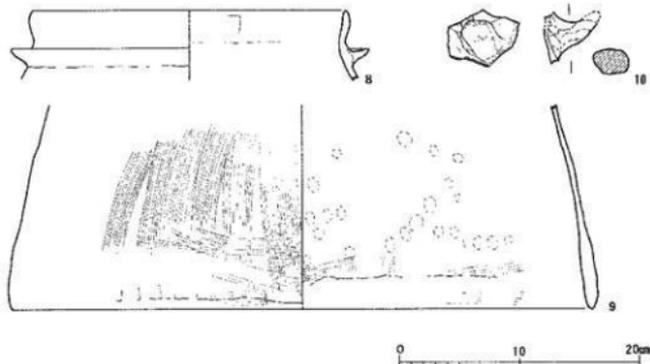
第7図 SK108 出土遺物実測図

SK109(図8・9図、図版二・一〇)

4E地区で検出した。平面の形状は不整形を呈する。規模は東西幅1.58m、南北幅1.35m、深さ0.55mを測る。底面にSB103を構成した柱穴であるSP170・171がある。埋土は3層から成る。遺物は1層内から奈良時代末～平安時代初頭にかけての須恵器、土師器の羽釜、甕等が出土した。そのうち図化できたものは、土師器羽釜1点(8)、甕1点(9)、甕あるいは鍋の把手1点(10)の計3点である。8はやや斜め上向きに短く伸びる銚と上外方に直立気味に伸びる口縁部を持つ土師器羽釜である。生駒西麓産。9は甕の裾部片である。外面はハケ調整を多用している。生駒西麓産である。10は土師器の把手である。把手裏面に面取りが行わ



第8図 SK109 平断面図 (S=1/20)



第9図 SK109 出土遺物実測図

れている。

SK110(図版一)

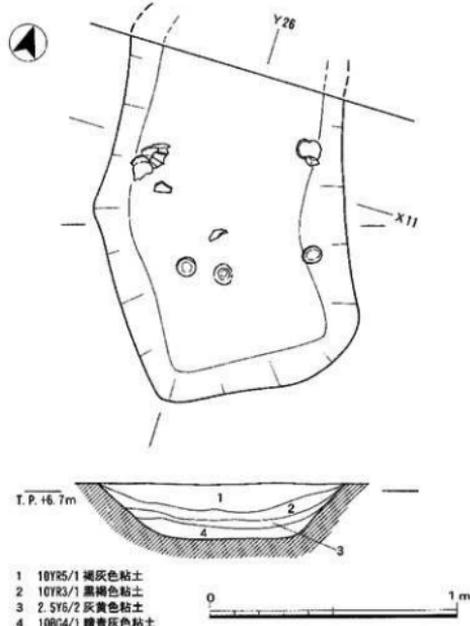
4 E 地区で検出した。南部は調査区外に至り、SP165を切り東部でSP164により切られている。検出部で東西幅1.35m、南北幅0.78m、深さ0.25mを測る。埋土は10YR4/1褐色粘質土である。遺物は平安時代前期の土師器の細片が少量出土したが図化し得たものは無い。

SK111(図版一)

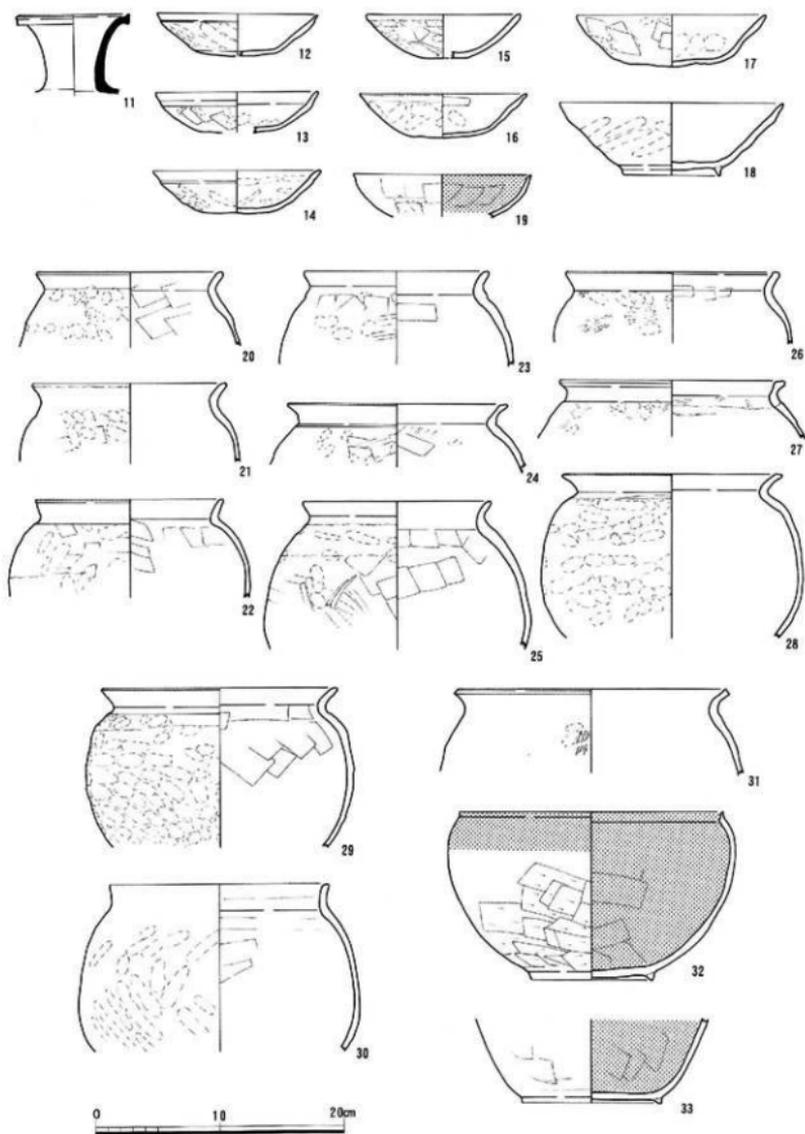
3 E 地区で検出した。北部が調査時の掘削ならびに西側がSP193、SD104、東部がSK112により切られている。検出部で東西幅0.9m、南北幅0.45m、深さ0.09mを測る。埋土は10YR4/1褐色粘質土である。遺物は土師器、須恵器の細片が極少量出土したが時期を明確にし得たものはない。

SK112(第10・11図、図版一・二・一・二)

2・3 F 地区で検出した。北部の一部が調査時の掘削を受けている他、西部でSK111を切っている。検出部から南北方向に長い楕円形が想定される。検出部で東西幅2.1m、南北幅3.6m、深さ0.43mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は上から1層10YR5/1褐色粘土、2層10YR3/1黒褐色粘土、3層2.5Y6/2灰黄色粘土、4層10BG4/1暗青灰色粘土の4層に分層できる。遺物は1・2層から土師器の皿・杯・碗・甕・鉢、須恵器の杯・壺・甕、黒色土器の碗・鉢の細片が多量に出土している。そのうち図化できたものは、須恵器壺1点(11)、土師器碗7点(12~18)、土師器甕12点(20~31)、黒色土器碗1点(19)・鉢2点(32・33)の23点である。11は須恵器壺の口縁部である。平城宮分類の壺Lに分類される。12~17は高台を持たない土師器碗Aで、平底の底部から斜上方に伸びる口縁部を呈し、口縁部は強めのヨコナデを施す。体部外面の指頭圧痕は顕著に認められる。18は高台を有する土師器碗Bである。高台は低く、「ハ」の字形を呈する。口縁部は強めのヨコナデで、体部外面には指頭圧痕が顕著に認められる。杯部内面に煤が付着している。19は黒色土器A類碗の細片である。20~31は土師器甕Bである。すべて外反する口縁部と球形に近い体部を呈するもので、体部外面の指頭圧痕は顕著である。しかし、口縁端部の形態を見ると、丸みをもつもの(20~23・25)、上面に平坦な面をもつもの



第10図 SK112 平面図(S=1/20)



第11圖 SK112出土遺物実測図

の(24・26～29)、内傾する面をもつもの(30)、外傾する面をもつもの(31)の4種類に分類できる。32・33は共に断面三角形の低い高台を有する黒色土器A類鉢で、33は下半部のみが残存である。32は完形品に近いもので、半球形の体部に、内傾する幅広の端面を持つ。佐藤編年の平安時代Ⅱ期古(9世紀前半～中葉)に比定される。

S K113(図版一)

2・3 F 地区で検出した。掘方の北側は側溝掘削時に削平を受けているが、遺存する部分からみてやや北東-南西方向に長い不整形円形を呈するものと思われる。規模は東西幅1.63m、南北幅1.62m、深さ0.33mを測る。埋土は1層10YR5/1褐色灰色砂礫混粘質土、2層10YR5/3にぶい黄褐色砂質土に分層できる。遺物は1層から飛鳥時代前期に比定される土師器、須恵器の細片が少量出土しているが図化し得たものはない。

S K114(図版一)

3 F G 地区で検出した。掘方の北側は側溝掘削時に削平を受けている他、S P1107を切り、S P1108に切られている。検出部分から平面形状は「L」字形を呈するもので、検出部分で最大長5.3m、幅1m前後、深さ0.16mを測る。埋土は10YR6/1褐色灰色粘質土である。遺物は飛鳥時代後半に比定される土師器、須恵器の細片が少量出土しているが図化し得たものはない。

S K115(図版一)

4 E F 地区で検出した。南側が調査区外に至り、さらに一部がS P191によって切られている。検出部で東西幅4.0m、南北幅0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/1褐色灰色粘質土である。遺物は平安時代前期に比定される土師器、黒色陶の細片が少量出土したが図化し得たものはない。

S K116

2 F 地区で検出した。隅丸方形を呈する。東西幅0.77m、南北幅0.68m、深さ0.17mを測る。断面の形状は腕形を呈する。埋土は10YR4/1褐色灰色微砂混粘質土である。遺物は土師器の細片が極少量出土したが図化し得たものはない。

S K117

2 F 地区で検出した。北西-南東方向に長い楕円形を呈する。規模は長径1.6m、短径0.44m、深さ0.11mを測る。断面の形状は皿形を呈する。埋土は10YR4/1褐色灰色砂礫混粘土である。遺物は出土していない。

S K118

2 G 地区で検出した。南側は側溝掘削時に削平を受けている。検出部分で東西幅1.05m、南北幅0.75m、深さ0.06mを測る。埋土は10YR4/1褐色灰色微砂混粘質土である。遺物は出土していない。

S K119

3 E 地区で検出した。北側の一部は側溝掘削時に削平を受けている。残存部分からみて東西方向に長い楕円形を呈する。検出部分で東西径2.1m、南北径0.5m、深さ0.27mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土はN6/0灰色微砂混粘土である。遺物は出土していない。

溝(SD)

SD101(図版一)

4CD地区で検出した。南西-北東方向に直線的に伸びるもので、SK105・SP113・SP134・SP135を切っている。全長3.9m、幅0.15~0.25m、深さ0.15mを測る。断面の形状は半円形を呈する。埋土は7.5YR6/2灰褐色粘質土である。遺物は出土していない。

SD102(図版一)

4D地区で検出した。南-北方向に直線的に伸びるもので南端は調査区外に至り、SK106・SP144を切っている。検出長3.2m、幅0.2~0.25m、深さ0.1mを測る。断面の形状は半円形を呈する。埋土は7.5YR6/2灰褐色粘質土である。遺物は土師器、須恵器の細片が少量出土したが時期を明確にし得たものはない。

SD103(図版一)

3・4E地区で検出した。北西-南東方向に直線的に伸びるもので、北端がSK107、南端がSP184、中央部より南でSK108により切られている。検出長6.3m、幅0.15~0.35m、深さ0.16mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は7.5YR6/2灰褐色粘質土である。遺物は土師器の細片が極少量出土したが時期を明確にし得たものはない。

SD104(図版一)

3E~4F地区で検出した。北西-南東方向に伸びるもので、北端は側溝掘削時に削平、南部は調査区外に至る。各遺構との関係では、SK111、SP185を切り、SK115、SP192に切られている。検出長9.6m、幅0.33~0.65m、深さ0.15mを測る。断面の形状はU字形を呈する。埋土は10YR4/1褐灰色粘質土である。遺物は平安時代前期に比定される土師器、須恵器、屋瓦の細片が少量出土しているが図化し得たものはない。

SD105(図版一)

4F地区で検出した。北西-南東方向に伸びるもので、南部は調査区外に至る。検出長2.1m、幅0.2~0.73m、深さ0.17mを測る。断面の形状は皿形を呈する。埋土は10YR4/1褐灰色砂礫混粘質土である。遺物は平安時代前期に比定される土師器、須恵器、黒色土器の細片が少量出土しているが図化し得たものはない。

SD106(図版一)

4F地区で検出した。SD105の東側に並行する。南部は調査区外に至る。検出長0.75m、幅0.22m、深さ0.26mを測る。断面の形状はU字形を呈する。埋土は10YR4/1褐灰色砂礫混粘質土である。遺物は土師器、須恵器の細片が極少量出土しているが時期を明確にし得たものはない。

SD107(図版一)

調査区東部にあたる2G~4H地区間で検出した。南東-北西方向に伸び、南東部は調査区外に至る。検出部分で検出長10.2m、幅0.6~1.2m、深さ0.27~0.46mを測る。埋土は上層がN6/0灰色微砂混粘質土、下層が7.5YR8/1灰白色微砂混粘土の2層に分層できる。遺物には、土師器、須恵器、屋瓦の他、肥前系磁器を含むことから、本来の構築面は第II層上面が推定される。

小穴・柱穴(SP)

当時期の小穴・柱穴は既述したように掘立柱建物を構成する柱穴も含めて131個(SP101~

1131)を検出した。平面の形状を大まかに類別した割合でみると、円形が3割、楕円形が2割、隅丸方形が1割、不定形が4割を示す。法量は径0.1~0.9m、深さ0.1~0.5mを測る。調査区内全域の分布では、南部中央に集中する。各小穴・柱穴内からは土師器及び須恵器の小破片が少量出土したほか、SP102には柱根、SP182には根石が遺存していた。各小穴・柱穴の法量等の詳細は第1表に示した。

第1表 第1面小穴・柱穴法量表

遺構番号	地区	平面形	法量 (cm)			出土遺物	備考
			長さ	短径	深さ		
SP101	4 B	楕円形	0.33	0.21	0.11		
SP102	4 C	不定形	0.58	(0.30)	0.23	土師器、須恵器 平安前	SB101 柱根
SP103	#	円形	0.26	0.24	0.20		
SP104	#	不定形	0.36	0.23	0.14	土師器	SB101
SP105	#	隅丸方形	0.77	0.36	0.17	土師器 古墳中期	SB101
SP106	#	#	0.43	0.32	0.13	黒色土器	
SP107	#	#	0.41	0.35	0.29	土師器 古墳中期	
SP108	#	隅丸方形	0.45	0.40	0.24	土師器、製塩土器、須恵器 6 C	SB101
SP109	#	円形	0.36	0.34	0.10	土師器 5 C	
SP110	#	楕円形	0.44	0.30	0.17	土師器、須恵器	
SP111	#	隅丸方形	0.42	0.29	0.33		SB101
SP112	#	円形	0.19	0.15	0.07		
SP113	#	不定形	0.57	0.21	0.33	土師器、須恵器 6 C後	
SP114	4 CD	円形	0.30	0.23	0.13		SB101
SP115	4 C	楕円形	0.71	0.18	0.07	土師器 平安前	
SP116	4 CD	不定形	0.93	(0.30)	0.14		
SP117	3 C	楕円形	0.31	0.20	0.40	土師器、須恵器	
SP118	3 D	#	0.28	0.21	0.33	土師器 飛鳥	
SP119	#	#	0.39	0.24	0.12		
SP120	3 C	円形	0.31	0.24	0.17	土師器、黒色土器、須恵器	
SP121	#	不定形	(0.38)	0.33	0.25	土師器 5 C	
SP122	4 C	円形	0.12	0.11	0.18		SB102
SP123	4 CD	#	0.33	0.30	0.37		
SP124	#	#	0.21	0.16	0.19		
SP125	#	隅丸方形	0.46	0.37	0.15	土師器、須恵器 5 C	SB102
SP126	4 D	#	0.50	0.35	0.11	土師器	SB102
SP127	#	円形	0.19	0.17	0.23	土師器、須恵器 平安前	
SP128	#	不定形	0.09	(0.08)	0.04		
SP129	3 D	隅丸方形	0.59	0.46	0.24		
SP130	#	#	0.35	0.25	0.16	製塩土器 5 C	SB102
SP131	4 D	#	0.45	0.35	0.17	土師器 平安前	
SP132	#	#	0.21	0.15	0.10		
SP133	#	楕円形	0.35	0.17	0.20	土師器	
SP134	#	不定形	0.45	0.44	0.28	土師器、須恵器 平安前	
SP135	#	#	0.22	0.17	0.23		
SP136	#	隅丸方形	0.37	0.32	0.29	土師器、黒色土器 平安前	
SP137	#	楕円形	0.53	0.27	0.08	土師器	
SP138	#	円形	0.13	0.11	0.19		
SP139	#	#	0.08	0.05	0.05		
SP140	#	円形	0.18	0.11	0.03		
SP141	#	不定形	0.34	0.30	0.09	土師器、黒色土器 平安前	SB102
SP142	3・4 D	円形	0.25	0.20	0.11	土師器	SB102
SP143	4 D	#	0.32	0.26	0.34	土師器、製塩土器、須恵器 5 C	
SP144	#	楕円形	0.70	0.55	0.20	土師器、須恵器 5 C	SB102・SB103
SP145	#	#	0.45	0.26	0.15	土師器	

遺構番号	地区	平面形	法量 (cm)			出土遺物	備考
			長径	短径	深さ		
SP146	4 D	不定形	0.51	(0.20)	0.10		
SP147	#	隅丸方形	0.26	0.20	0.32	土師器、黒色土器、平安前	
SP148	#	円形	0.34	0.27	0.07	土師器	
SP149	#	隅丸方形	0.49	0.38	0.20	土師器、須恵器 平安前	SB103
SP150	#	不定形	(0.33)	0.28	0.11		
SP151	#	#	(0.36)	0.35	0.07		
SP152	#	隅丸方形	0.27	0.22	0.12	土師器 平安前	
SP153	#	不定形	(0.43)	0.31	0.35	土師器	SB103
SP154	#	#	(0.20)	0.18	0.08		
SP155	#	三角形	0.32	0.27	0.09		
SP156	4 DE	円形	0.39	0.31	0.32	土師器、須恵器	SB103
SP157	4 E	#	0.42	0.32	0.32		
SP158	4 DE	不定形	0.42	0.23	0.22	土師器 平安前	
SP159	4 E	楕円形	0.51	0.40	0.47	土師器、須恵器 5 C	SB103
SP160	#	円形	0.17	0.14	0.11		
SP161	#	#	0.22	0.13	0.10		
SP162	#	#	0.21	0.18	0.14		
SP163	#	#	0.36	0.31	0.19		
SP164	#	#	0.45	0.33	0.23	土師器、須恵器 平安前	SB103
SP165	#	不定形	0.34	(0.17)	0.17		
SP166	#	隅丸方形	0.36	0.36	0.21	黒色土器、須恵器 平安前	SB103
SP167	#	不定形	0.73	(0.38)	0.30	土師器、須恵器	
SP168	#	#	0.46	(0.35)	0.36		
SP169	#	#	0.60	(0.20)	0.37		
SP170	#	楕円形	0.51	0.33	0.08	土師器、石製品	
SP171	#	#	0.65	0.23	0.23		SB103
SP172	#	円形	0.42	0.38	0.04	土師器 平安前	SB104
SP173	#	#	0.30	0.24	0.05	土師器、黒色土器 平安前	SB104
SP174	#	#	0.17	0.14	0.13	土師器、須恵器 平安前	
SP175	#	#	0.33	0.27	0.22		
SP176	#	隅丸方形	0.66	0.31	0.33	土師器、須恵器 6 C	SB103
SP177	#	#	0.29	0.22	0.15		
SP178	#	不定形	0.55	(0.28)	0.13	土師器	
SP179	3 DE	楕円形	0.38	0.21	0.12	土師器、須恵器 平安前	
SP180	3 E	#	0.79	0.31	0.31	土師器、須恵器 平安前	
SP181	4 E	円形	0.24	0.23	0.12	土師器、須恵器 平安前	
SP182	#	#	0.30	0.25	0.23	土師器	横石・SB104
SP183	#	隅丸方形	0.72	0.46	0.30		SB104
SP184	4 EF	円形	0.37	0.35	0.02	土師器	
SP185	4 F	#	0.41	0.32	0.40		
SP186	4 E	#	0.42	0.31	0.24	土師器、須恵器 平安前	
SP187	#	不定形	0.21	0.13	0.10		
SP188	#	#	0.21	(0.20)	0.15		
SP189	#	円形	0.31	0.29	0.20		
SP190	4 F F	隅丸方形	0.30	0.27	0.22		
SP191	4 F	円形	0.36	0.29	0.11		
SP192	#	不定形	0.32	0.27	0.10		
SP193	3 E	楕円形	0.41	0.22	0.10		
SP194	3 F	円形	0.41	0.40	0.10		SB104
SP195	4 F	#	0.32	0.31	0.13		
SP196	#	#	0.29	0.26	0.16		
SP197	#	#	0.26	0.17	0.11		
SP198	#	#	0.22	0.19	0.11	土師器、須恵器 平安前	
SP199	#	楕円形	0.67	0.38	0.36		
SP1100	#	不定形	(0.29)	0.23	0.22	土師器、須恵器 平安前	
SP1101	3 F	楕円形	0.33	0.19	0.16	土師器	

遺構番号	地区	平面形	法量(cm)			出土遺物	備考
			長径	短径	深さ		
SP1102	#	隅丸方形	0.58	0.43	0.19		SB104
SP1103	4 F	円形	0.31	0.26	0.17	須恵器	
SP1104	#	#	0.24	0.20	0.14		
SP1105	#	#	0.31	0.28	0.11		
SP1106	#	楕円形	0.32	0.26	0.13		SB104
SP1107	3 F	不定形	0.59	(0.30)	0.08		
SP1108	#	円形	0.16	0.14	0.05		
SP1109	3 G	#	0.48	0.38	0.20		SB105
SP1110	4 F G	円形	0.39	0.30	0.13	土師器	SB105
SP1111	4 G	#	0.49	0.46	0.20		SB105
SP1112	3 G	#	0.30	0.14	0.10		SB105
SP1113	#	不定形	0.60	(0.20)	0.15		
SP1114	#	隅丸方形	0.45	0.31	0.11	土師器	SB105
SP1115	3・4 G	#	0.24	0.15	0.11	土師器 5 C	
SP1116	#	不定形	0.33	(0.22)	0.13	土師器、須恵器	
SP1117	#	円形	0.16	0.12	0.15		
SP1118	#	#	0.31	0.28	0.23	土師器、須恵器 飛鳥前	SB105
SP1119	#	隅丸方形	0.45	0.40	0.19		SB105
SP1120	4 G H	楕円形	0.74	0.48	0.18		
SP1121	4 H	円形	0.20	0.19	0.13		
SP1122	2 D	不定形	(0.71)	0.48	0.10		
SP1123	1 F	円形	0.15	0.14	-		
SP1124	#	#	0.22	0.16	-		
SP1125	2 F	#	0.29	0.26	0.12		SB106
SP1126	#	楕円形	0.45	0.28	0.10	土師器	SB106
SP1127	#	円形	0.31	0.26	0.10	土師器	SB106
SP1128	#	#	0.28	0.25	0.10		SB106
SP1129	2 G	#	0.28	0.23	0.08		SB106
SP1130	1 G	楕円形	0.62	0.40	0.08		
SP1131	#	円形	0.30	0.25	0.13		

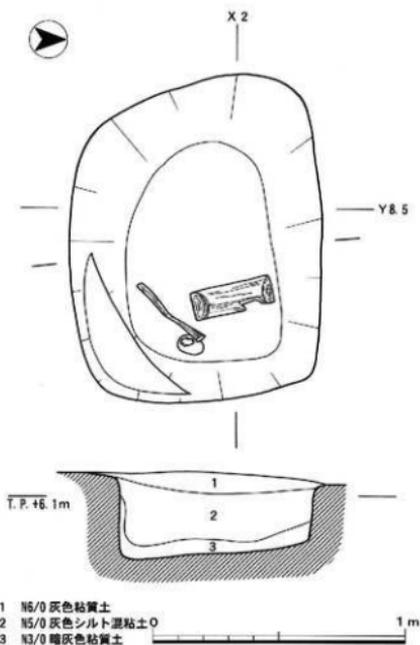
2) 第2面(第14図、図版三)

第2面は第V層上面を構築面とするもので、古墳時代前期(布留式期)、古墳時代中期、平安時代前期に比定される土坑6基(SK201~206)、溝3条(SD201~203)、小穴26個(SP201~226)、落ち込み2箇所(SO201・202)、自然河川3条(NR201~203)がある。

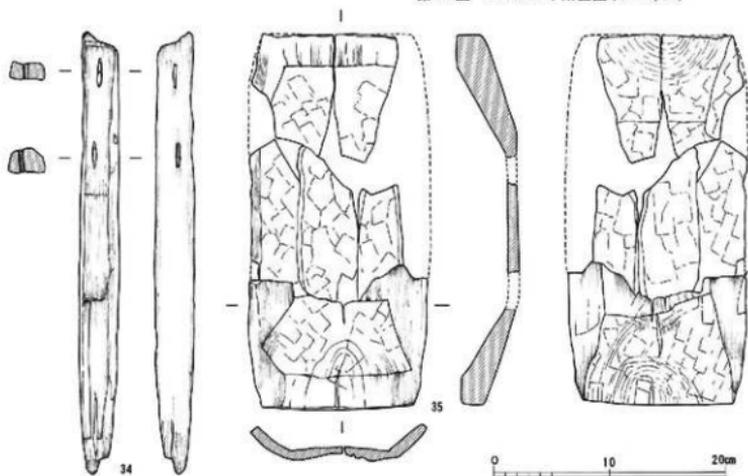
土坑(SK)

SK201(第12・13図、図版四・一二)

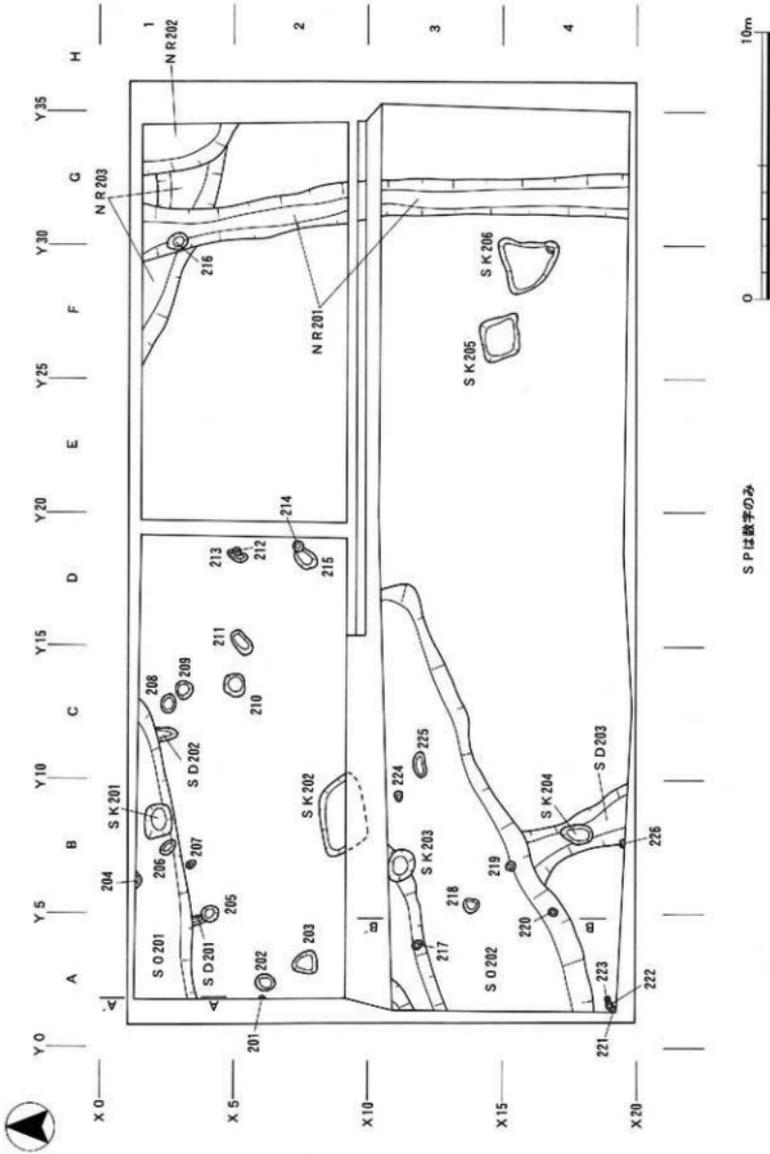
1B地区で検出した。SO201を切っている。平面の形状は隅丸方形を呈する。規模は東西幅1.3m、南北幅1.0m、深さ0.37mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は3層から成る。遺物は2層から土師器甕の細片、須恵器甕・杯の細片ほか木製容器・部材、種子等が出土している。2点(34・35)を図化した。34は部材の一部と考えられる。両端部が折れて欠損している。残存長38.2cm、最大



第12図 SK201 平面図(S=1/20)



第13図 SK201 出土遺物実測図



第14図 第2面検出遺構平面図(1/200)

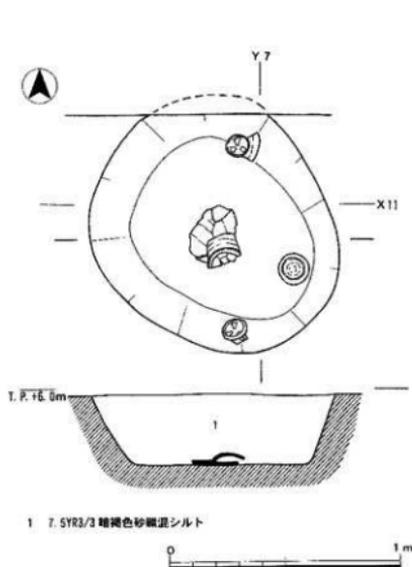
幅3.2cm、厚さ1.3cmを測る。残存部分の断面形状は長方形で、幅広の面に縦方向に幅0.3cm、長さ2.5cmの貫通した柄穴が4cmの間隔を置き2箇所に穿たれており、その柄穴に近接した上下に横方向に僅かに段状となる加工が施されている。柄穴内には、樺と推定される樹皮が存在することから、他の部材と結束されていた可能性がある。樹種はスギである。35は木製容器の槽である。半裁した丸太材の内部を逆台形に抉るもので、長方形を呈し底部は平坦面を持つ。一部を欠くが残存部で、幅15.3cm、長さ32.0cm、高さ5.4cmを測る。内面および外面の表面に工具痕が認められた。樹種は広葉樹である。図化をし得ていないが、須恵器杯の小片から構築時期は古墳時代中期と推定される。

S K 202

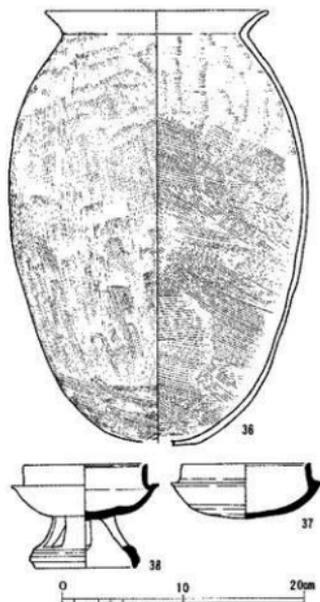
2 B 地区で検出した。南部が側溝掘削時に削平を受けているため全容は不明である。検出部分で東西幅3.0m、南北幅1.0m、深さ0.05mを測る。埋土は10YR4/1褐色粘質土である。遺物は出土していない。

S K 203 (第15・16図、図版四・一二)

3 B 地区で検出した。平面の形状は北西-南東方向にやや長い楕円形を呈する。規模は長径1.2m、短径0.95m、深さ0.3mを測る。埋土は7.5YR3/3暗褐色砂礫混シルトの単一層である。遺物は古墳時代中期に比定される土師器、須恵器が少量出土している。そのうち図化できたものは、土師器甕1点(36)、須恵器杯身1点(37)、有蓋高杯1点(38)の3点である。36は体部が倒卵形を呈



第 15 図 S K 203 平面図 (S = 1/20)



第 16 図 S K 203 出土遺物実測図

する長胴甕ではほぼ完形に復元できる。体部は外面が縦方向、内面が水平ないしは左上がりのハケ調整が行われている。37はほぼ完形品である。ほぼ水平な受部から、立ち上がりが上内方に直線的に伸び内傾する平坦面をもつ口縁部に至る。体底部はやや丸みをもつ。38の有蓋高杯の脚部には三方に台形状の透かしを有する。37・38は田辺編年のTK208型式(5世紀中葉)に比定される。遺構の帰属時期は古墳時代中期である。

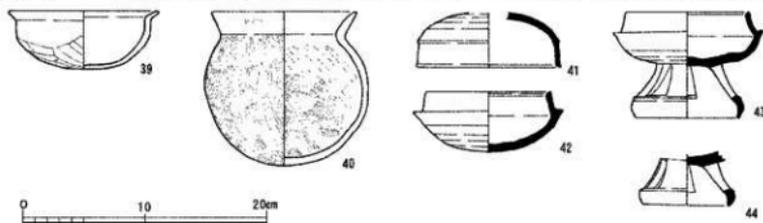
S K204(第17・18図、図版三・五・一三)

4 B 地区で検出した。S D203に切られている。平面の形状は南北に長い楕円形を呈する。規模は長径1.25m、短径0.8m、深さ0.3mを測る。断面の形状は二段掘方で緩いV字形を呈する。埋土は7.5YR3/3暗褐色粘土質シルトの単一層で、内部から土師器高杯・鉢、須恵器甕・高杯・蓋杯が少量出土している。そのうち図化できたものは、土師器鉢1点(39)、土師器甕1点

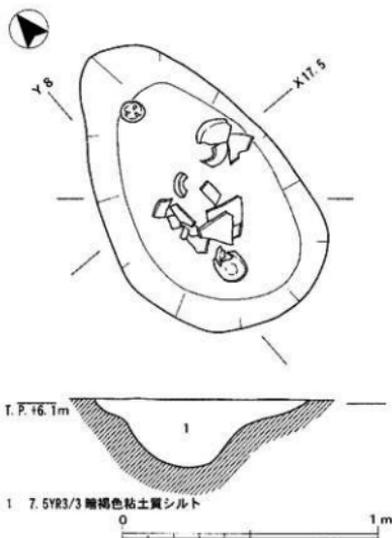
(40)、須恵器蓋杯2点(41・42)、須恵器有蓋高杯2点(43・44)の6点である。39は扁平気味の体部に短く屈曲する口縁部が付く鉢である。ほぼ完形品である。40は小形甕である。球形の体部から斜上方へ伸びる口縁部が付くもので、端部は尖り気味に終る。体部は内外面ともにハケ調整が行われている。外面に煤が付着している。41は半球状の天井部を呈し、口縁端部は内傾する凹面をもつ。42の口縁端部は内傾する平坦面を有し、体底部は丸みをもつ。43の口縁端部は内傾する面を有し、杯部は丸みをもつ。43・44の脚部にはいずれも三方向に台形状の透かしを有する。41～44は田辺編年のTK23型式(5世紀後半)に比定される。遺構の帰属時期は古墳時代中期後半が推定される。

S K205

3・4 F 地区で検出した。平面の形状は隅丸方形を呈する。規模は東西幅1.7m、南北幅1.36m、深さ0.09mを測る。断面の形状は皿形を呈する。埋土は10YR5/1褐灰色粘質土である。遺物は



第18図 S K204 出土遺物実測図



第17図 S K204 平面断面図(S=1/20)

土師器羽釜、須恵器の細片が少量出土しているが時期を明確にし得たものは無い。

S K 206

3・4 F G 地区で検出した。平面の形状は隅丸三角形を呈する。規模は幅2.2m前後、深さ0.01mを測る。断面の形状は皿形を呈する。埋土は10YR6/1褐色灰色粘質土である。遺物は土師器、須恵器の細片が少量出土しているが時期を明確にし得たものは無い。

溝(S D)

S D 201

1 A 地区で検出した南北方向に伸びる小溝である。北部をS O 201、南部をS P 205によって切られる。検出長0.5m、幅0.3m、深さ0.08mを測る。断面の形状は楕形を呈する。埋土は10YR6/1褐色灰色粘土である。遺物は出土していない。

S D 202

1 C 地区で検出した南北方向に伸びる小溝である。北部をS O 201によって切られる。規模は検出長0.7m、幅0.3m、深さ0.22mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は10YR6/1褐色灰色粘土である。遺物は土師器の細片が少量出土しているが時期を明確にし得たものは無い。

S D 203(図版三)

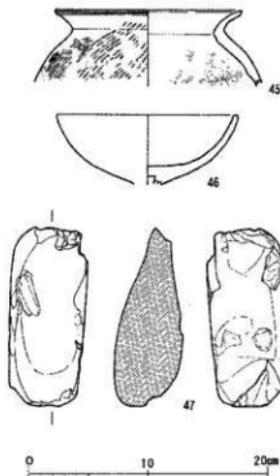
4 B 地区で検出した。南東-北西方向に伸びる溝で南東部は調査区外に至り、北西端でS O 202、検出部のほぼ中央部でS K 204に切られている。検出長4.4m、幅1.3~2.4m、深さ0.19mを測る。埋土は10YR4/1褐色粘質土である。飛鳥時代に比定される土師器高杯、須恵器蓋杯・高杯、馬歯等が出土しているが図化し得たものは無い。

小穴・柱穴(S P)

総数で26個(S P 201~226)を検出した。平面の形状を類別すると、円形を呈するもの12個、楕円形を呈するもの7個、不定形を呈するもの5個に分けられる。規模は径0.1~1.0m、深さ0.05~0.52mを測る。出土遺物は土師器・須恵器の細片化したものが大半で、図化できるものは少ない。小穴・柱穴については、調査区北西部にほぼ集中しており、S P 201のように柱根が残存するものが認められたが、建物跡を復元するに至っていない。そのうち遺物が出土したものは、S P 203・207・209~213・216・218・220・221・223である。各小穴・柱穴の法量・詳細等に付いては第2表に示した。

S P 216出土遺物(第19図、図版五)

3点(45~47)を図化した。45は土師器甕片である。体部外面は粗い右上がりのハケの後、一部左上がりの単位の細いハケで消されている。46は土師器楕形高杯の杯部片である。完存しており口径15.4cm、杯部高5.8cmを測る。



第19図 SP 216出土遺物実測図

第2表 第2面 小穴・柱穴測量表

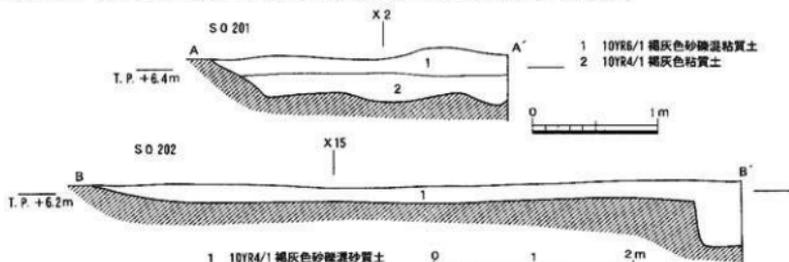
遺構番号	地区	平面形	法量(m)			出土遺物	備考
			長径	短径	深さ		
SP201	2A	不定形	0.24	0.10	0.40		柱根
SP202	#	円形	0.68	0.57	0.10		
SP203	#	楕円形	1.00	0.86	0.19	土師器、須恵器	5C
SP204	1B	不定形	0.64	0.43	0.18		
SP205	1AB	円形	0.58	0.55	0.20		
SP206	1B	楕円形	0.57	0.36	0.14		
SP207	#	楕円形	0.30	0.24	-	須恵器	7C
SP208	1C	円形	0.68	0.59	0.30		
SP209	#	#	0.68	0.61	0.27	土師器、須恵器	7C
SP210	1・2C	#	0.90	0.84	0.30	土師器	平安前
SP211	1・2CD	隅丸方形	0.92	0.48	-	土師器、須恵器	5C
SP212	1・2D	円形	0.30	0.26	0.27	土師器	5C
SP213	#	楕円形	0.75	0.37	0.28	土師器	
SP214	2D	円形	0.40	0.36	0.16		
SP215	#	隅丸方形	0.66	0.63	0.16		
SP216	1FG	円形	0.69	0.61	0.52	土師器	5C
SP217	3A	楕円形	0.38	0.22	0.07		
SP218	3B	円形	0.57	0.49	0.05	土師器	5C
SP219	4B	#	0.34	0.30	0.10		
SP220	4AB	#	0.32	0.26	0.10	土師器、須恵器	
SP221	4A	不定形	0.28	0.19	0.06	土師器	
SP222	#	楕円形	0.31	0.23	0.08		
SP223	#	円形	0.22	0.15	0.10	土師器	
SP224	3B	楕円形	0.36	0.26	0.05		
SP225	3C	#	0.93	0.46	-		
SP226	4B	#	0.33	0.21	0.13		

47は砥石で2面に使用面がある。石材は砂岩である。時期は弥生時代後期後半である。

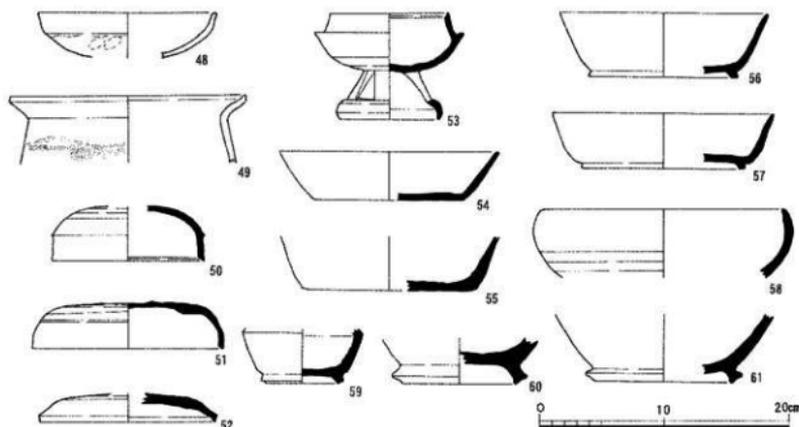
落ち込み(SO)

SO201(第20図)

1A～1C地区で検出した。南層の一部を検出したのみで、北部および西部は調査区外に至る。検出部分でSD201・202を切り、SK201、SP204、SP206に切られている。東西長11.5m、南北長2.5m以上、深さ0.1～0.27mを測る。埋土は上から1層10YR6/1褐色砂礫混粘質土、2層10YR4/1褐色粘質土の2層に分層できる。遺物は両層から古墳時代中期の土師器甕・高杯・器台、須恵器甕・蓋杯等が多量に出土したが細片化が顕著で図化し得たものは無い。



第20図 SO201(S=1/40)、SO202(S=1/50)断面図



第21図 SO202出土遺物実測図

SO202(第20・21図、図版三・一四)

調査地の南区の南西部で検出した。北東-南西方向に溝状に広がる落ち込みである。検出部分で、検出長約16m、幅6m以上、深さ0.16~0.2mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色砂礫混砂質土である。遺物は古墳時代中期後半から奈良時代に比定される土師器甕・高杯・杯・鉢・羽釜・甌(把手)、須恵器壺・甕・蓋杯・鉢の細片が多量に出土した。そのうち図化できたものは、14点(48~68)である。内訳は土師器2点(48・49)、須恵器12点(50~61)である。48は土師器杯の細片である。49は土師器甕の細片。肩の張りの少ない長胴形を呈するもので口縁端部は僅かに摘み上げられる。50~52は須恵器杯蓋である。50は丸味のある天井部を持つ。田辺編年のTK23型式(5世紀後半)。51の口縁端部は内傾する凹面をもち、稜を有さない。天井部は扁平である。52は摘みが欠損したものである。53は有蓋高杯である。口縁端部は内傾する凹面をもち、受部は僅かに外上方へ伸びる。脚部には3方向に台形状の透かしを有する。端部は内彎する。54~57は杯身である。54・55は平坦な底部から斜上方へ直線的に伸びる口縁部を有する。54の端部は丸く収めるが、55は破損のため不明である。56・57はいずれも平坦な底部の外寄りに高台を貼り付けるものである。口縁端部は56が摘み上げ、57は丸く収める。58は鉄鉢形を呈する鉢片である。口縁部は体部から内彎して立ち上がり、端部は僅かに外傾する。59~61は壺底部の細片である。59は残存部分から肩部に稜角を持つ小型壺と推定される。60・61はいずれも外傾する重厚な高台を有する壺底部である。最も新しい遺物からみて遺構廃絶時期は奈良時代前半が推定される。

自然河道(NR)

NR201(第22・23図、図版六・一四)

1FG~4G地区で検出した。南-北方向に流下した河道である。南北端は調査区外に至る。検出長19.5m、幅1.3~2.3m、深さ1.2~1.5mを測る。断面の形状は鈍いV字形を呈する。埋土は大まかに上層が灰白色系シルト、下層が灰黄色系微砂~細砂の2層に分かれ、下層にはラミナ

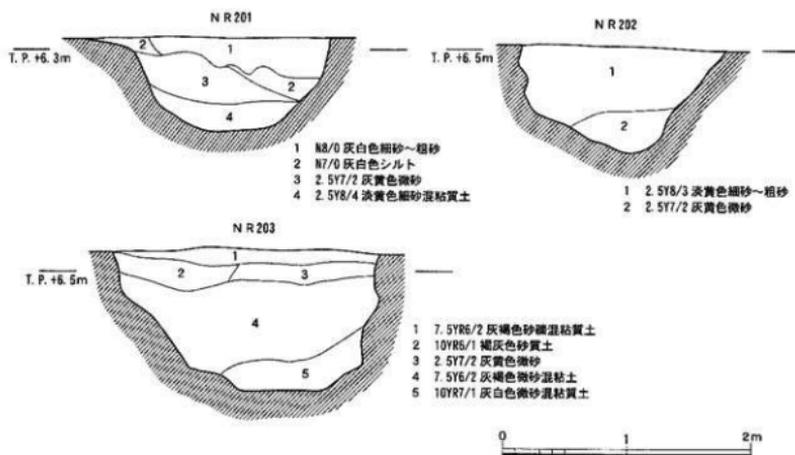
がみられる。遺物は弥生時代後期(畿内第V様式)の壺片、布留式甕の細片が少量出土している。2点(62・63)を図化した。62は口縁端部を垂下させ幅広の端面を持つ弥生時代後期の壺片である。口縁端面に波状文、体部外面上部に直線文と波状文が施文されている。63は布留式甕の細片である。遺構の帰属時期は古墳時代前期前半(布留式古相)が推定される。

NR202(第22・23図、図版六・一五)

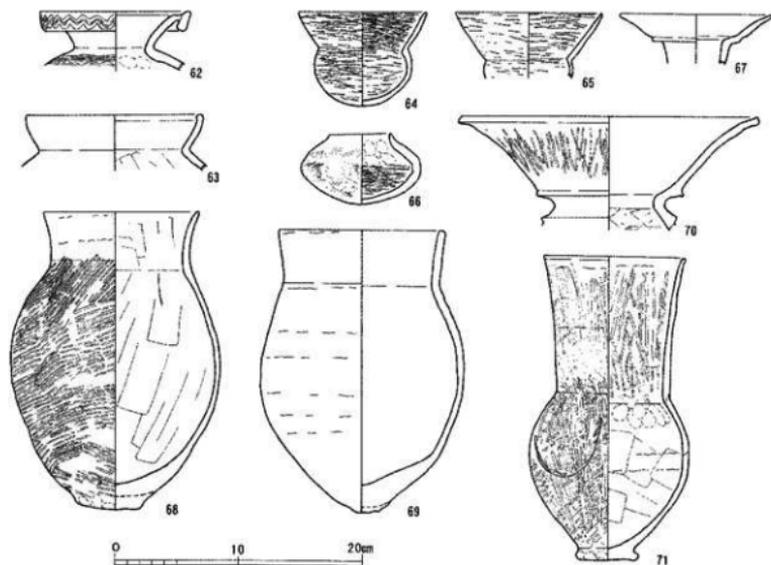
調査区北東隅1G地区で検出した。河道の西屑の一部を検出した。検出長3.75m、幅1.85m、深さ0.72mを測る。埋土は黄灰色系微砂～細砂でシルトがブロック状に混入し、ラミナがみられる。遺物は弥生時代後期(畿内第V様式)の弥生土器の細片、古墳時代前期前半(布留式古相)の古式土師器が出土している。古式土師器を7点(64～70)を図化した。64～66は小形丸底壺である。64・65は器面調整に横方向のヘラミガキを多用する精製品の小形丸底壺(小形壺B₂)である。66は扁球形の体部に外面にハケ調整を行うもので、擬口縁を境に口縁部が欠損している。67は二重口縁壺(複合口縁壺B₂)の細片である。口径12.2cmを測る小形品である。68・69は長胴壺(長胴壺A)である。68は突出した平底、69は小さな平底で安定感を欠く。68の体部外面はタタキ調整、69はナデによる調整が行われている。70は屈曲部に段を有する山陰系の鼓形器台(器台C)で脚部を欠く。色調・胎土から山陰地方から搬入されたものである。遺構の帰属時期は、古墳時代前期前半(布留式古相後半)布留II期にあたる。

NR203(第22・23図、図版六・一五)

1F～G地区で検出した。遺構の中央をNR201、東部をNR202によってそれぞれ切られる。検出状況からみて東から北西に向けての流下したものと思われる。検出長9.6m、最大幅2.3m、深さ1.2～1.5mを測る。断面の形状はU字型を呈する。埋土は褐灰色系微砂～細砂で一部シルトが混入してレンズ状の堆積をしており、ラミナが確認できる。遺物は弥生時代後期(畿内第V様式)



第22図 NR201～NR203 断面図(S=1/40)



第23図 NR201(62・63)、NR202(64~70)、NR203(71)出土遺物実測図

の長頸壺が完形で1点のほか、土師器の細片が出土した。1点(71)を図化した。71は突出平底を持つ張りの少ない球形体部から口頸部が上外方に直線的に伸びる長頸壺である。体部外面に「U」の字状の記号がヘラにより施文されている。弥生時代後期後半に盛行するものである。完形の弥生時代後期の長頸壺が出土しているが、古式土師器を伴うことから帰属時期は古墳時代前期前半以前と考えられる。

3) 第3面〔古墳時代前期前半から後半(布留式古相から新相)〕(第24・25図)

第3面はT.P.+6.7~6.5mに存在する第VI層上面で、古墳時代前期前半から後半(布留式古相から新相)に比定される竪穴住居2棟(S I 301・302)、土坑6基(S K 301~306)、小穴8個(301~308)、溝10条(S D 301~310)、土器集積2箇所(SW301・302)、落ち込み1箇所(S O 301)を検出した。

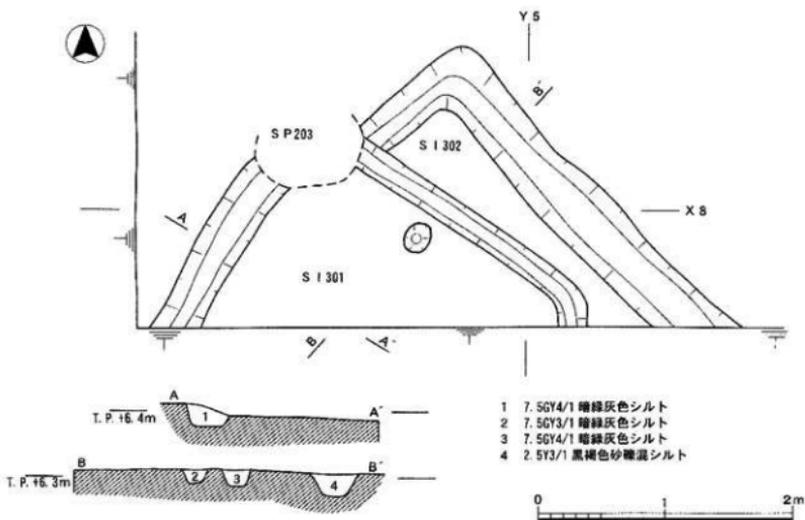
竪穴住居(S I)

S I 301(第24図、図版七)

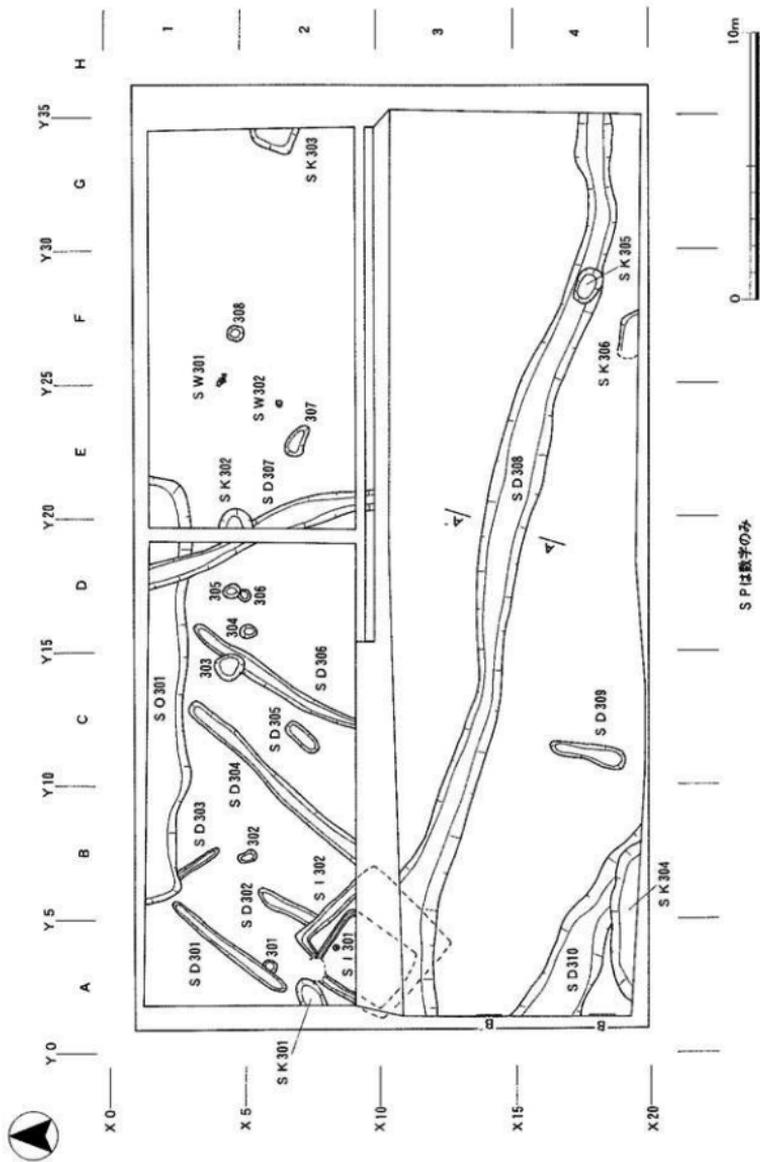
2・3 A B地区で検出した。竪穴住居北部の約1/2を検出した。南部は未調査部分、さらに北東コーナーにあたる箇所はS I 302の北周溝を切り、S P 203により切られている。不明な点が多いが残存部分から規模を推定復元すれば、床面が3m前後の比較的小規模な方形プランをもち、その外周を幅0.2~0.3m、深さ0.08m前後の壁溝が巡る竪穴住居であったと推定される。床面には主柱穴と断定できる明確な柱穴は検出できなかった。住居内からは古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される布留式甕の細片が少量出土しているが、図化し得たものはない。

S I 302(第24図、図版七)

S I 301と同様、住居の約半分程度を検出した。S I 301、S P 203、S D 308に切られ、S D 302を切る関係にある。北周溝部分がS I 301の北周溝と重複しており、さらに南部が未調査部分であるため不明な点が多いが、検出部分からみて床面は4.5m前後の方形プランをもち、その外側に幅0.3~0.5m、深さ0.1m前後の壁溝が巡るものとおもわれる。柱穴はS I 301内で検出した小穴が位置関係から主柱穴になる可能性がある。遺物は出土していないが、本遺構を切るS I 301が古墳時代前期前半(布留式古相)の遺物が出土しているため、構築時期はそれ以前が推定される。



第24図 S I 301、S I 302 平面図(S=1/40)



第25図 第3面検出遺構平面図(S=1/200)

土坑(SK)

SK301

2A地区で検出した。東部の一部は上層遺構のSP203により切られ、西部は調査区外に至る。検出状況からみて北東-南西に長い楕円形を呈すると推定される。検出部分で東西幅0.76m、南北幅0.96m、深さ0.08mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色粘質土で、遺物は出土していない。

SK302(第26図・27図、図版八・一六)

1・2DE地区で検出した。西部は遺構確認調査で削平を受けている。検出状況からみて平面形状は円形状を呈していたものと思われる。規模は残存部分で東西幅0.87m、南北幅1.26m、深さ1.0mを測る。埋土は3層から成り、3層からはほぼ完形品の布留式甕2

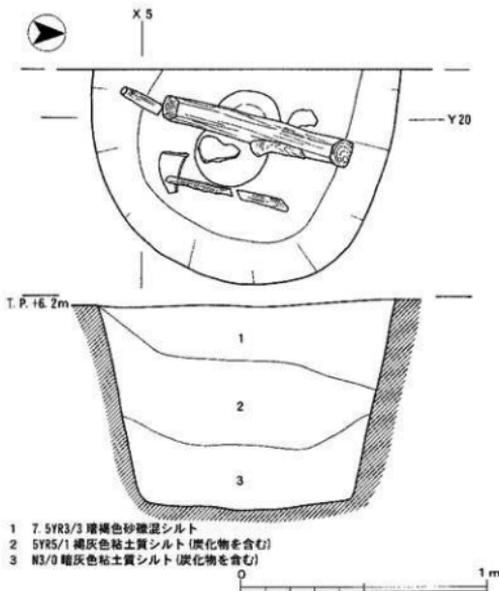
個体分および吉備系甕、木製容器等が出土している。そのうち5点(72~76)点を図化した。72・73は布留式甕(甕F₁)である。74は吉備系甕(甕J₁)。75は板材で、両端部に丸味を持つ。長さ72.0cm、最大幅18.6cm、厚さ2.2cmを測る。樹種は広葉樹と推定される。形状からみて一本式樋の水かき部分の可能性がある。76は木製容器で、約1/3が残存している。やや浅めで底部に平坦面を持つ盤に分類した。残存部分で、長さ55.8cm、幅9.5cm、深さ3.5cmを測る。樹種はスギと推定される。遺構の帰属時期は古墳時代前期前半(布留式古相)が推定される。

SK303

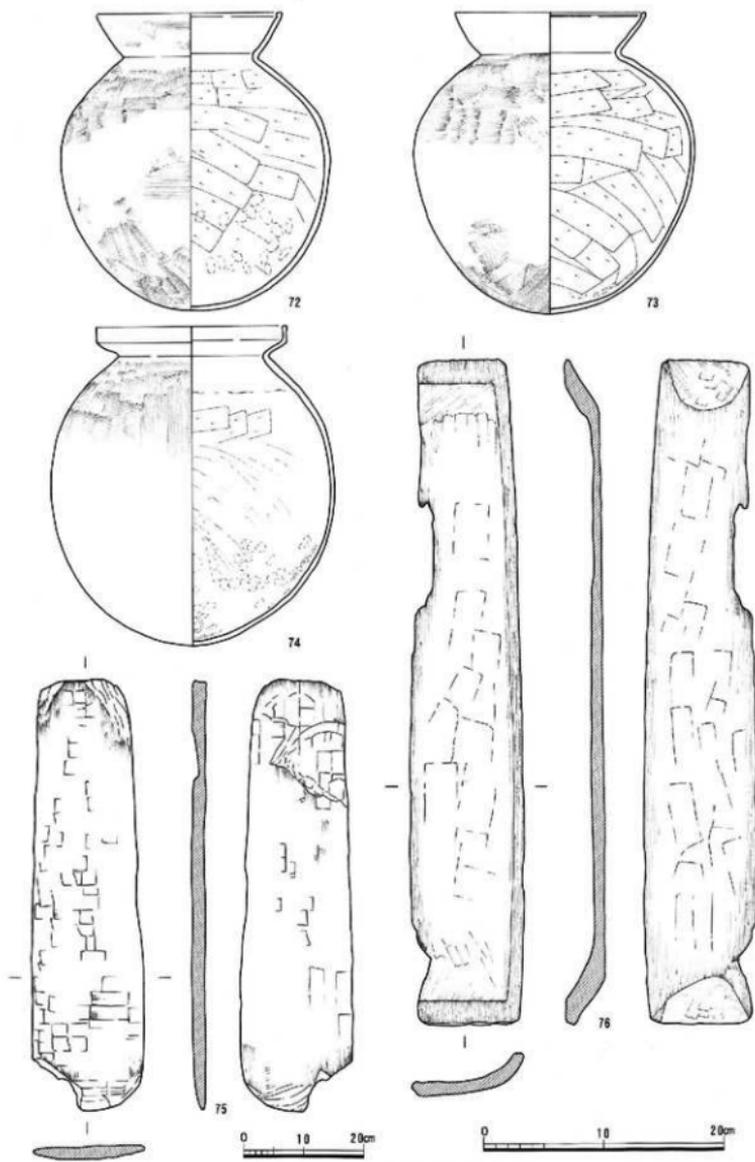
2G地区で検出した。東部は側溝掘削時に削平を受けている。検出部分で東西幅0.8m、南北幅1.75m、深さ0.07mを測る。埋土は暗灰色粘質土である。遺物は出土していない。

SK304(第28・29図、図版一七)

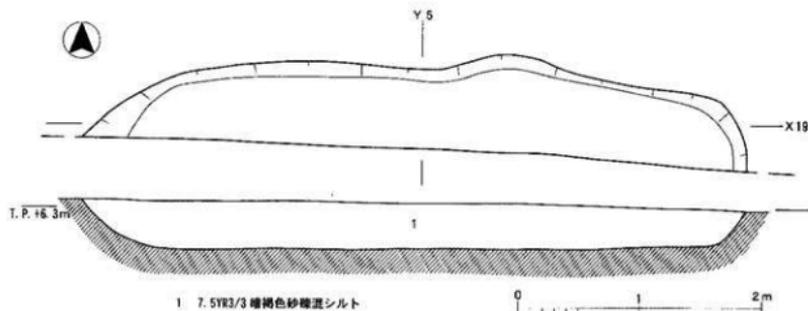
調査区の北西部にあたる4AB地区で検出した。SD310を切り、南部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅5.46m、南北幅0.7~0.95m、深さ0.38~0.48mを測る。埋土は7.5YR3/3暗褐色砂礫混じりシルトである。遺物は弥生時代後期の弥生土器、古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される古式土師器の壺・甕が出土している。そのうち図化できたものは2点(77・78)である。77はV様式甕の細片。78は球形の体部に斜上方に短く直線的に伸びる口縁部が付く小型壺の完形品である。外面の器面調整はハケを多用している。一部、弥生土器等の夾雑物を含むが、遺構の帰属時期は古墳時代前期後半(布留式新相)である。



第26図 SK302 平面図(S=1/20)



第27図 SK302出土遺物実測図



第28図 SK304 平面断面図(S=1/40)

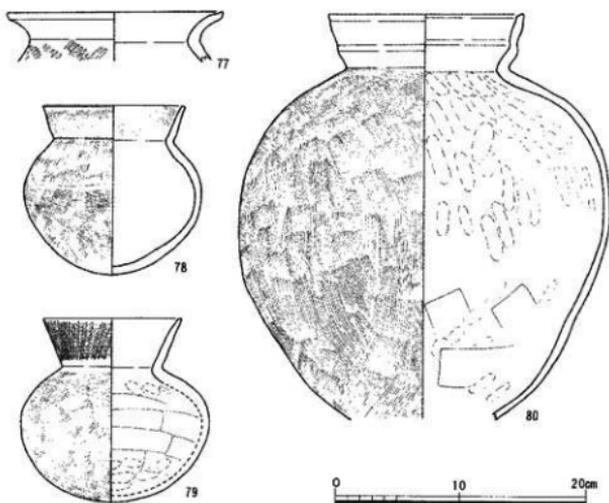
SK305

4F地区で検出した。SD308を切っている。隅丸長方形を呈するもので、東西幅1.4m、南北幅0.9m、深さ0.11mを測る。断面の形状は皿形を呈する。埋土は上層が10YR5/1褐色粘質土、下層が10YR4/1褐色砂質土の2層に分層できる。遺物は出土していない。

SK306(第29・30図、図版八・一七)

調査区の南東部の4F地区で検出した。掘方の南部は調査区外に至るうえ、西部はSD104によって切られている。検出規模は東西幅1.08m、南北幅0.77m、深さ0.1~0.15mを測る。埋土は10YR4/1褐色砂礫混じり粘土質シルトである。遺物は、古墳時代前期後半(布留式新相)に比定される古式土師器の壺・甕が出土した。そのうち図化できたものは直口壺1点(79)、壺1点(80)の2点である。

79は体部中位に最大径をもつ直口壺である。口縁部外面は横方向に密にヘラミガキした後、さらに放射状のヘラミガキが施される。体部外面は横位のハケを多用している。80は複合口縁壺E₃から変化した大形壺である。端部は内傾する面を有する。体部はやや長胴で、外面は丁寧なハケ調整が行われている。

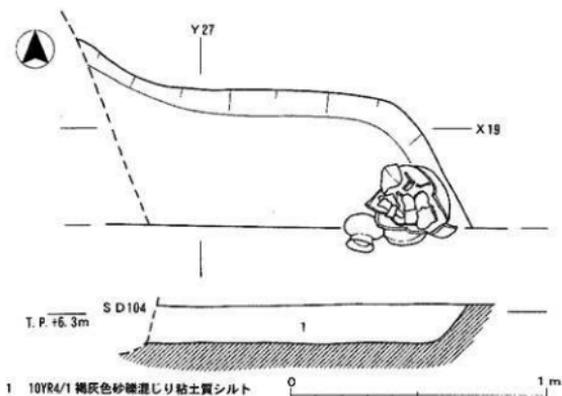


第29図 SK304(77・78)、SK306(79・80)出土遺物実測図

小穴・柱穴(S P)

S P 301~308

調査地の北地区のみで総数8個(S P 301~308)を検出した。建物を構成するとみられる柱穴は確認できていない。平面の形状で類別すると円形、楕円形、不定形である。規模は径0.3~1.2m、深さ0.01~0.3mを測る。そのうち、遺物が出土したのはS P 308のみである。各小穴・柱穴についての法量・詳細については第3表に示した。



第30図 S K 306 平断面図 (S=1/20)

第3表 第3面 小穴・柱穴法量表

遺構番号	地区	平面形	法量 (cm)			出土遺物	備考
			長径	短径	深さ		
S P 301	2 A	不定形	0.53	0.39	0.09		
S P 302	1・2 B	#	0.75	0.42	0.1		
S P 303	1 C	円形	1.15	0.94	0.15		
S P 304	1・2 D	#	0.61	0.51	0.13		
S P 305	1 D	#	0.62	0.54	0.09		
S P 306	1・2 D	#	0.47	0.44	0.14		
S P 307	2 E	楕円形	1.20	0.58	0.11		
S P 308	1 F	円形	0.57	0.48	0.18	土師器	

溝(S D)

S D 301~S D 306 (図版七)

調査区北東部1・2 A~D地区で検出した。溝6条の内、S D 303を除く他の5条は南西-北東方向に並行して直線的に伸びる。規模は幅0.29~0.68m、深さ0.06~0.22mを測る。断面の形状は碗形を呈する。埋土はすべて10YR5/1褐灰色シルト混粘質土である。そのうち、遺物はS D 305から土師器片が少量出土しているが細片のため時期を明確に得たものは無い。

S D 307

1・2 DE地区で検出した。検出部のほぼ中央がS K 302によって一部切られている。南地区においては遺構の続きが確認されていない。検出部分で検出長9.32m、幅0.55~1.2m、深さ0.24~0.35mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は上層が10YR5/1褐灰色粘質シルト、下層が10YR4/1褐灰色粘土の2層で、2層下部においては植物遺体の堆積が認められた。遺物は出土していない。

S D 308 (第31・32図、図版一七)

調査区南部の全域で検出した。南東-北西方向に緩く蛇行しながら伸びる溝である。北西端でS I 301・302を切る他、東部ではS K 305、N R 201に切られている。検出長34.3m、幅0.8~1.8

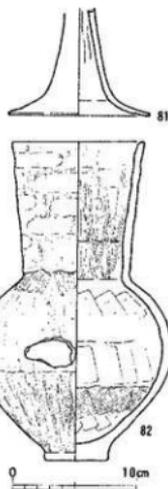
m、深さ0.09～0.52mを測る。埋土は5YR7/3にぶい橙色粘土質シルトの1層に分層できる。遺物は弥生土器、古式土師器が少量出土した。2点(81・82)を図化した。81は古式土師器高杯の脚部。82は弥生土器の長頸壺である。調査区西に古墳時代前期前半(布留式古相)のS 1302があるためこの遺構構築時期迄に機能を停止したものと推定される。

S D309

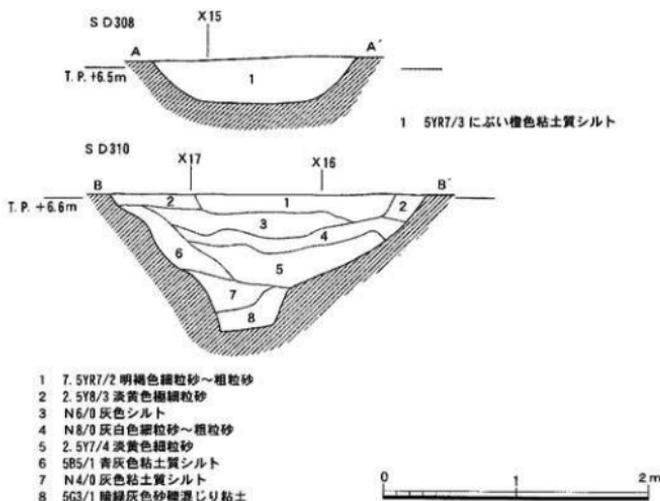
4C地区で検出した。南北方向に伸びる。規模は全長2.9m、幅0.45～0.7m、深さ0.05～0.13mを測る。断面の形状は逆台形を呈する。埋土は10YR5/1褐灰色シルト混粘質土である。遺物は古墳時代中期に比定される土師器、須恵器の細片が僅かに出土しているが図化し得たものはない。

S D310(第32・33図、図版一七・一八)

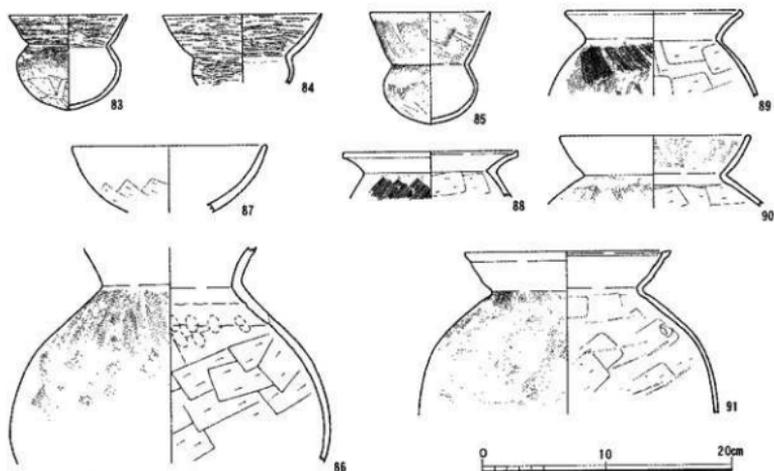
調査区南西隅にあたる3・4ΔB地区で検出した。南東-北西方向に伸びる溝である。南端部分でS K304に切られている他、両端部は調査区外に至る。検出長7.2m、幅1.5～2.1m、深さ1.2m前後を測る。埋土は西壁部分で8層(1～8層)から成る。遺物は古墳時代前期前半から中葉(布留式古相～中層)に比定される古式土師器が多数出土している。そのうち9点(83～91)を図化した。83～85は小形丸底壺である。83が小形壺B₃、84が小形壺B₂、85が小形壺B₁にあたる。86は口縁端部に欠くが大形直口壺である。87は小形鉢の細片。88・89は河内型庄内式甕の細片。90・91は布留式甕の細片である。



第31図 S D308 出土遺物実測図



第32図 S D308、S D310 断面図(S=1/40)



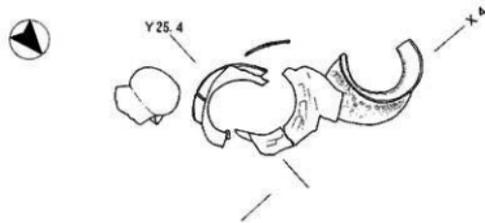
第33図 SD310出土遺物実測図

90が甕F₁、91が甕F₂に分類される。85からみて古墳時代前期前半まで存続したものと推定される。

落ち込み(SO)

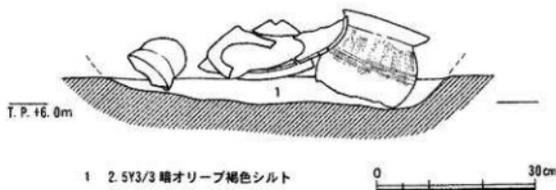
SO301

北地区北端1B～1E地区にかけて検出した。東西方向に伸びるもので、北部が調査区外に至る他、西部でSD203を切り、東部でSD307に切られている。検出部分で検出長16.2m、幅0.56m、深さ0.1mを測る。埋土は10YR4/1褐灰色粘質土である。遺物は古墳時代前期に比定される庄内式甕の細片、布留式期の高杯脚部等が出土している。



土器集積(SW)

土器集積は北区東部の1・2EF地区で2箇所(SW301・302)で検出した。共に調査時に上部を削平してしまっただため、掘方の上部形状が不明であり、本来は土坑として捉えるべき遺構であったと考えられる。



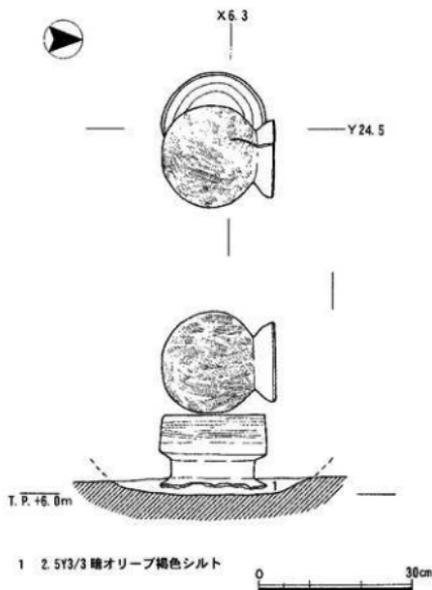
第34図 SW301 平断面図(S=1/10)

SW301(第34・36図、図版九・一八)

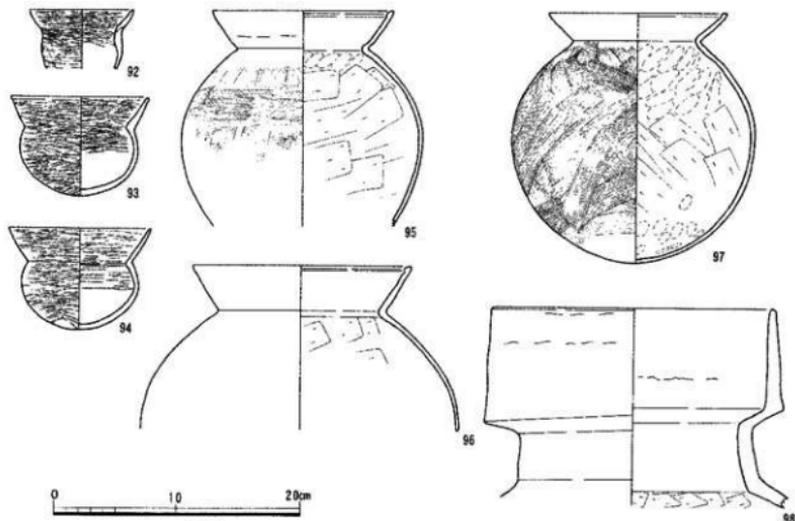
1 E F 地区で検出した。SW302の北東に隣接している。掘方の上部は削平のため不明である。埋土は2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトである。土器の集積範囲は、幅0.2m、長さ0.6m前後で北西-南東方向に広がる。遺物の内訳は小形丸底壺2個体・甕2個体である。小形丸底壺の方は遺存度が良いが、甕の方は遺存状況が非常に悪い。5点(92~96)を図化した。92~94は小形丸底壺(小形壺B₂)である。精製品で93・94は完形品である。95・96は布留式甕(甕F₂)である。古墳時代前期前半(布留式古相)に布留I期に比定される。

SW302(第35・36図、図版九・一八)

2 E 地区で検出した。掘方の上部は削平により明瞭でない。埋土は2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトである。掘方部分の中央部に大形複合口縁壺の口頭部を正位に置き、その上に東よりにややずれて完形の布留式甕の口縁部を北にして横位に設置している。



第35図 SW302 平面図(S=1/10)



第36図 SW301(92~96)、SW302(97・98)出土遺物実測図

出土状況から見て、複合口縁壺の内部に土が充填されてから上部に布留式甕が設置されたことが窺える。土器棺ないしは何らかの埋葬施設と想定した場合、小さな盛土が存在した可能性が推定される。2点の土器内から遺物は出土していない。97は布留式甕である。98は大型複合口縁壺(複合口縁壺E₁)で体部上半以下が欠損している。古墳時代前期前半(布留式古相)の布留I期に比定される。

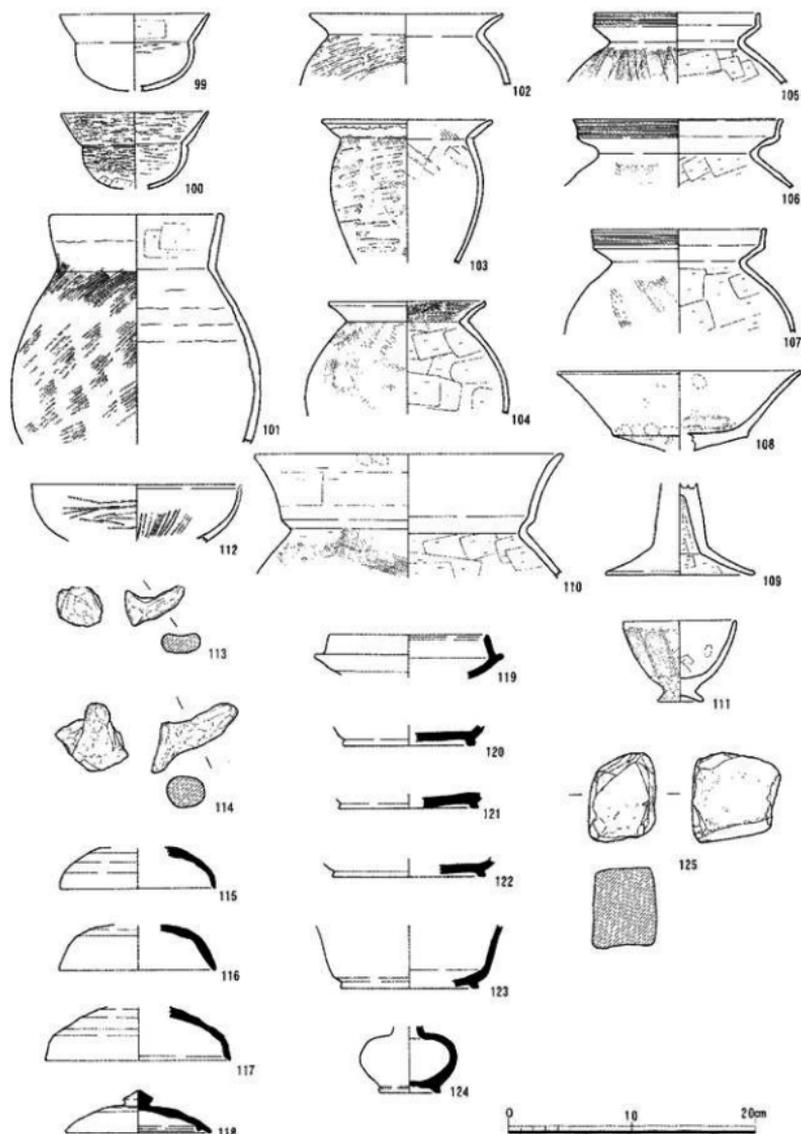
4) 遺構に伴わない出土遺物

・ 第三層出土遺物(第37図、図版一九・二〇)

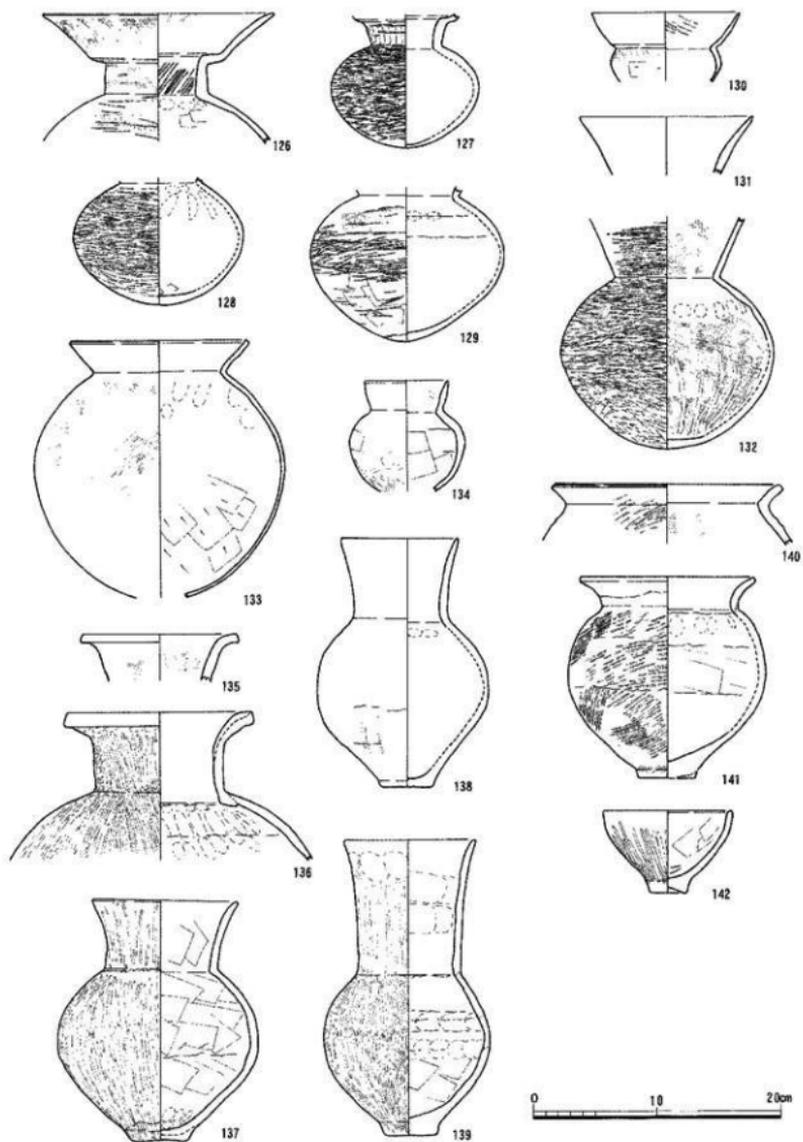
古式土師器、土師器、須恵器、石製品の27点(99~125)を掲載した。時期的には、弥生時代後期後半から飛鳥時代までのものがある。99・100は小形丸底壺(小形壺B₃)の細片である。古墳時代前期前半(布留式古相後半-布留II)に盛行する器種である。101は長胴壺(長胴壺A)の細片である。体部外面に右上がりのタタキ調整が行われている。古墳時代前期前半(布留式古相)に盛行するが量的には少ない器種である。製塩土器の可能性もある。102・103はV様式系甕の細片である。104は体部外面の調整にハケを多用する古式土師器甕の細片である。布留式影響の庄内式甕(甕D)に分類される。古墳時代前期前半(布留式古相)に盛行する器種である。105~107は吉備系甕(甕J₁)である。108・109は高杯である。108は深めの杯部を持つ高杯(高杯A₁)の杯部。109は脚部である。110は山陰系の大形鉢(鉢I₁)と推定される。111は台付き鉢(台付き鉢A₁)である。112は杯の細片である。体部外面に横位のヘラミガキ、内面に放射状ヘラミガキが施されている。飛鳥時代前半(7世紀前半)に比定される。113・114は把手である。115~124は須恵器である。115~117は杯蓋の細片。田辺編年のTK43型式(6世紀後半)。118は宝珠摘みを持つ杯蓋である。内面口縁部付近に返りを持つ。飛鳥時代中期(7世紀中葉)。119は須恵器杯身片である。田辺編年のMT15型式(6世紀前半)。120~123は高台を有する杯身である。全て細片である。124は小形壺で口縁部を欠く。125は砥石である。3面に使用面がある。石材は安山岩である。

・ 第四層出土遺物(第38図、図版二〇・二一)

弥生土器および古式土師器を17点(126~142)掲載した。時期的には、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半(布留式古相)のものである。126~133は古式土師器である。126・127は二重口縁壺(複合口縁壺B₃)のみに分類される。共に精製品で126が大型品、127が小形品である。128・129は共に精製品で口頸部を欠くが、二重口縁壺ないしは直口壺の体部と推定される。128が丸底、129が尖り底である。130は小形丸底壺(壺B₃)の細片。131・132は直口壺(直口壺A₁)である。131が口縁部の細片。132が口縁端部付近を欠く。132はこの器種に特有な密なヘラミガキを多用する精製品である。133は古式土師器の甕である。口縁端部および屈曲部の形状や体部外面の器面調整の特徴から、古墳時代前期前半(布留式古相)に盛行する布留傾向甕(甕E)に分類される。134~142は弥生時代後期後半に比定される弥生土器である。134は小形の直口壺の細片である。135・136は広口壺である。135が細片、136が口縁部から体部上半が残存しており〔広口壺B₁〕に分類される。137~139は長頸壺である。そのうちやや口頸部が短い137〔長頸壺A₂〕と通有の形状を持つ138・139〔長頸壺A₁〕がある。140はV様式甕の口縁部細片。141はV様式甕で、器高数値から中形品の〔甕A-II〕に分類される。142は突出で裏面が窪む底部を持つ小形鉢〔小形鉢C〕である。



第37圖 第三層出土遺物実測図



第38圖 第IV層出土遺物実測圖

4) 出土遺物法量表

遺物 番号	種別 番号	図版 番号	遺構・層位	器 種	法量 (cm)	残存度	色 調	備 考
1	7	一〇	SK108	土師器 甕A	口径:(13.2) 器高:3.5	1/2	外:5YR7/6橙 内:7.5YR8/3浅黄橙	
2	7	一〇	SK108	土師器 甕A	口径:(13.4) 器高:3.5	1/2	2.5YR7/8橙	
3	7	一〇	SK108	土師器 甕A	口径:13.6 器高:3.9	ほぼ完形	7.5YR7/8黄橙	
4	7	一〇	SK108	土師器 甕B	口径:14.8 器高:4.7 高台径:6.6 高台高:0.2~0.5	ほぼ完形	5YR7/6橙	
5	7	一〇	SK108	土師器 甕B	口径:14.9 器高:4.6 高台径:5.6 高台高:0.5	ほぼ完形	外:2.5YR7/8橙 内:5YR7/4にぶい橙	
6	7	一〇	SK108	土師器 甕B	口径:(15.2) 体部最大径:(19.6)	口縁部2/3	2.5YR7/8橙	
7	7	一〇	SK108	土師器 甕B	口径:(15.2) 体部最大径:(19.6)	3/5	2.5YR7/8橙	体部外面に黒斑
8	9	一〇	SK109	土師器 羽釜	口径:(26.0) 径径:(30.0)	口縁部~ 踵部1/6	2.5YR7/8橙	
9	9	一〇	SK109	土師器 移動式甕	裾部径:(48.3)	裾部1/4	5YR4/2灰褐	内面に煤
10	9	一〇	SK109	土師器 把手			5YR6/6橙	内面に煤
11	11	---	SK112	須恵器 甕L	口径:9.0	口縁部のみ	5P85/1暗青灰	
12	11	---	SK112	土師器 甕A	口径:13.0 器高:3.4	1/4	外:2.5YR6/8橙 内:5YR7/6橙	
13	11	---	SK112	土師器 甕A	口径:(13.0)	1/2	2.5YR7/8橙	
14	11	---	SK112	土師器 甕A	口径:(13.3) 器高:3.5	1/3	5YR7/8橙	
15	11	---	SK112	土師器 甕A	口径:(12.3) 器高:(3.6)	1/4	外:5YR7/6橙 内:10YR6/2灰黄褐	外面に煤
16	11	---	SK112	土師器 甕A	口径:13.5	3/4	外:2.5YR7/8橙 内:5YR7/4にぶい橙	
17	11	---	SK112	土師器 甕A	口径:13.1 器高:4.2	5/6	5YR7/6橙	
18	11	---	SK112	土師器 甕B	口径:(18.0) 器高:5.9 高台径:(7.8) 高台高:0.6	1/4	2.5YR6/4にぶい橙	外面に黒斑、 内面に煤
19	11	---	SK112	黒色土師 A類甕	口径:(14.3)	口縁部1/6	外:10YR5/2灰黄褐 内:5YR4/1褐灰	
20	11	---	SK112	土師器 甕B	口径:(14.6)	口縁部1/4	5YR4/4にぶい赤褐	
21	11	---	SK112	土師器 甕B	口径:(16.6)	口縁部1/6	外:2.5YR7/8橙 内:7.5YR7/4にぶい橙	外面に煤
22	11	---	SK112	土師器 甕B	口径:(16.0)	口縁部~ 肩部1/3	7.5YR4/2灰褐	
23	11	---	SK112	土師器 甕B	口径:(14.8)	口縁部1/6	7.5YR7/6橙	体部外面に煤
24	11	---	SK112	土師器 甕B	口径:(17.6)	口縁部1/6	7.5YR5/4にぶい橙	
25	11	---	SK112	土師器 甕B	口径:(15.0) 体部最大径:(21.5)	口縁部~ 体部1/3	外:2.5YR7/8橙 内:7.5YR7/4にぶい橙	
26	11	---	SK112	土師器 甕B	口径:(17.1)	口縁部1/6	7.5YR7/6橙	体部外面に煤
27	11	---	SK112	土師器 甕B	口径:(18.1)	口縁部1/4	7.5YR5/4にぶい橙	
28	11	一一	SK112	土師器 甕B	口径:(16.7) 体部最大径:(21.2)	口縁部~ 体部1/3	外:2.5YR7/8橙 内:5YR7/4にぶい橙	外面に煤

遺物番号	棟号	回廊番号	遺構・層位	器種	法量(cm)	残存度	色調	備考
29	11		S K112	土師器 甕 B	口径：(18.8) 体部最大径：(21.6)	口縁部～ 体部1/3	外：2.5YR7/8橙 内：5YR7/4にぶい橙	
30	11		S K112	土師器 甕 B	口径：(17.6) 体部最大径：(22.7)	1/3	5Y5/8明赤褐	
31	11		S K112	土師器 甕 B	口径：(21.6)	1/3	2.5YR5/8明赤褐	
32	11	一 二	S K112	黒色土器 (A類)鉢	口径：21.2 体部最大径：23.2 器高：13.6 高台径：9.8 高台高：0.7	3/5	5YR6/8橙	口縁部外面に煤
33	11		S K112	黒色土器 (A類)鉢	高台径：(10.8) 高台高：0.5	体部～ 底部1/4	5YR7/8橙	内面に煤
34	13	一 三	S K201	木製部材	残存長：18.2 最大幅：3.2 厚さ：1.3			
35	13	二	S K201	檜	幅：15.3 長さ：32.0 高さ：5.4			
36	16	一 二	S K203	土師器 長胴甕	口径：18.2 体部最大径：24.3 器高：(36.1)	5/6	2.5Y6/4にぶい橙	体部外面に黒斑
37	16	一 三	S K203	須恵器 杯身	口径：10.6 受部径：12.5 器高：4.6	口縁部の一 部欠損	N8/0灰	T K208型式(5 c 中)
38	16	一 三	S K203	須恵器 高杯	口径：10.1 器高：8.6 胴部径：12.2	3/5	5P95/1青灰	T K208型式(5 c 中)
39	18	一 二	S K204	土師器 鉢	口径：12.0 体部最大径：11.1 器高：4.8	口縁部の一 部欠損	5YR7/8橙	体部外面に黒斑
40	18	一 三	S K204	古式土師器 小形甕	口径：11.7 体部最大径：13.4 器高：12.8	5/6	5YR7/8橙	体部外面に黒斑
41	18	一 三	S K204	須恵器 杯蓋	口径：(11.8) 径径：(11.6)	1/2	5P96/1青灰	T K23型式(5 c 後)
42	18	一 三	S K204	須恵器 杯身	口径：10.2 受部径：12.3 器高：5.0	口縁部の一 部欠損	N7/0灰	T K23型式(5 c 後)
43	18	一 三	S K204	須恵器 有蓋高杯	口径：10.0 受部径：12.4 胴部径：(8.4) 器高：8.8	脚部1/2欠損	5P95/1暗青灰	T K23型式(5 c 後)
44	18	一 三	S K204	須恵器 有蓋高杯	胴部径：7.0	脚部のみ	5P95/1暗青灰	T K23型式(5 c 後)
45	19	一 三	S P216	古式土師器 甕	口径：(15.6)	口縁部～ 肩部1/3	7.5YR6/4にぶい橙	
46	19	一 三	S P216	土師器 高杯	口径：15.0 杯部高：5.8	杯部のみ	2.5YR7/8橙	
47	19	一 三	S P216	石製品 磁石	長さ：15.0 幅：6.1		5YR6/1灰	砂岩製
48	21		S O202	土師器 杯	口径：(14.2)	口縁部1/6	外：2.5YR7/8橙 内：5YR7/6橙	
49	21		S O202	土師器 甕	口径：(19.0)			
50	21	一 四	S O202	須恵器 杯蓋	口径：(12.3) 径径：(12.4) 器高：(1.4)	口縁部1/4	N6/0灰	
51	21	一 四	S O202	須恵器 杯蓋	口径：15.2 器高：3.8	5/6	5P95/1青灰	T K23型式(5 c 後)

遺物番号	博覧番号	図版番号	遺構・層位	器種	法量(cm)	残存度	色調	備考
52	21	一四	S O 202	須恵器 杯蓋	口径:(14.0) 器高:(2.3)	1/2	5P96/1青灰	
53	21	一四	S O 202	須恵器 有蓋高杯	口径:9.6 肩部径:12.1 頸部径:8.0 器高:8.6	3/5	5P96/1青灰	
54	21	一四	S O 202	須恵器 杯身	口径:(17.6) 器高:3.9 底径:(12.0)	1/3	N6/0灰	
55	21	一四	S O 202	須恵器 杯身	口径:(14.0)	底部1/2	5P96/1青灰	
56	21		S O 202	須恵器 杯身	口径:(16.8) 器高:(5.2) 底径:(12.0)	口縁部1/6	7.5YR7/4にぶい橙	
57	21	一四	S O 202	須恵器 杯身	口径:(17.7) 器高:4.5 高台径:(13.0) 高台高:0.5	1/6	5P96/1青灰	
58	21	一四	S O 202	須恵器 鉢	口径:(19.2)	口縁部1/4	N7/0灰	
59	21	一四	S O 202	須恵器 小形壺	高台径:(5.8) 高台高:0.7	体部～ 底部1/3	N6/0灰	
60	21	一四	S O 202	須恵器 壺	高台径:(9.2) 高台高:1.5	底部1/3	N7/0灰	
61	21		S O 202	須恵器 甕	高台径:(11.0) 高台高:1.0	体部～ 底部1/4	5P96/1青灰	
62	23	一四	NR 201	弥生土器 複合口縁壺	口径:12.2	口縁部のみ	2.5YR6/8橙	
63	23	一四	NR 201	古式土師器 布留式甕	口径:(14.2)	口縁部1/2	7.5YR8/4浅黄褐	
64	23	一五	NR 202	古式土師器 小形丸底壺	口径:10.4 体部最大径:7.9 器高:7.6	5/6	2.5YR7/8橙	
65	23		NR 202	古式土師器 小形丸底壺	口径:(11.8)	口縁部1/6	7.5YR8/4浅黄橙	
66	23	一五	NR 202	古式土師器 小形丸底壺	口径:5.0 体部最大径:9.7 器高:5.8	完形	10YR6/2灰黄褐	
67	23	一五	NR 202	古式土師器 二重口縁壺	口径:12.2	口縁部5/6	7.5YR7/4にぶい橙	
68	23	一五	NR 202	古式土師器 短頸直口壺	口径:12.6 体部最大径:17.0 器高:24.3 底径:5.2	3/5	外:5YR7/8橙 内:5YR7/4にぶい橙	
69	23	一五	NR 202	弥生土器 短頸直口壺	口径:13.3 体部最大径:16.5 器高:23.1	6/7	5YR7/4にぶい橙	外面に煤
70	23	一五	NR 202	古式土師器 鼓形器台	口径:24.0	口縁部1/4	外:7.5YR8/4浅黄褐 内:2.5YR6/4にぶい橙	山陰系
71	23	一五	NR 203	弥生土器 長頸壺	口径:11.3 体部最大径:13.0 器高:24.9	5/6	7.5YR7/8橙	体部外面にヘラ線刻、 外面に煤
72	27	一六	S K 302	古式土師器 布留式甕	口径:15.3 体部最大径:22.5 器高:25.1	体部の一部 欠損	外:7.5YR3/1黒褐 内:10YR4/3にぶい黄褐	体部外面に煤
73	27	一六	S K 302	古式土師器 布留式甕	口径:15.7 体部最大径:23.4 器高:25.3	口縁部および 体部の一部 欠損	外:7.5YR3/1黒褐 内:10YR4/3にぶい黄褐	体部外面に煤

遺物番号	博覧番号	図版番号	遺構・層位	器種	法量(cm)	残存度	色調	備考
74	27	一六	SK302	古式土師器 壺	口径: 15.9 体部最大径: 23.6 器高: 26.8	5/6	10YR4/2灰黄褐	吉備系
75	27	一六	SK302	板材	長さ: 72.0 幅: 18.6 厚さ: 2.2			
76	27	一六	SK302	盤	長さ: 55.8 幅: 9.5 厚さ: 3.5	1/3		
77	29		SK304	土師器 V様式壺	口径: (17.2)	口縁部～ 肩部1/3	5YR7/6橙	
78	29	一七	SK304	古式土師器 丸底壺	口径: 11.0 体部最大径: 14.2 器高: 13.8	完形	7.5YR8/8黄橙	体部外面に黒斑 小形丸底壺B1-II
79	29	一七	SK306	古式土師器 直口壺	口径: 11.0 体部最大径: 15.2 器高: 15.0	ほぼ完形	7.5YR8/8黄橙	体部外面に黒斑 複合口縁壺B2
80	29	一七	SK306	古式土師器 複合口縁壺	口径: 15.5 体部最大径: 29.8	3/5	7.5YR8/6浅黄橙	体部外面に黒斑
81	31	一七	SD308	古式土師器 高杯	器部径: 11.5	器部1/2	5YR7/6橙	
82	31	一七	SD308	弥生土師 長頸壺	口径: 10.5 体部最大径: 15.9 器高: 26.1 底径: 4.7	5/6	7.5YR7/6橙	体部に穿孔1ヶ所
83	33	一七	NR301	古式土師器 小形丸底壺	口径: 9.5 体部最大径: 8.3 器高: 7.7	3/5	7.5YR8/6浅黄橙	小形壺B2
84	33		NR301	古式土師器 小形丸底壺	口径: (12.8) 体部最大径(8.2)	口縁部1/6	7.5YR6/3にぶい褐	内面に煤 小形壺B3
85	33	一七	NR301	古式土師器 小形丸底壺	口径: 9.7 体部最大径: 7.6 器高: 9.1	3/5	10YR7/4にぶい黄橙	小形壺B4
86	33		NR301	古式土師器 大形直口壺	体部最大径: (26.0)	頸部～ 体部1/3	外: 7.5YR8/8黄橙 内: 7.5YR7/4にぶい黄橙	内外面に煤
87	33	一七	NR301	古式土師器 鉢	口径: (15.6)	口縁部～ 体部1/3	10YR7/2にぶい黄橙	
88	33		NR301	古式土師器 庄内式壺	口径: (13.8)	口縁部1/6	10YR4/2灰黄褐	内外面に煤
89	33	一八	NR301	古式土師器 庄内式壺	口径: (14.0)	口縁部～ 肩部1/3	10YR3/1黒褐	外面に煤
90	33	一八	NR301	古式土師器 布留式壺	口径: 15.1	口縁部のみ	7.5YR8/3浅黄橙	外面に煤
91	33		NR301	古式土師器 布留式壺	口径: (16.6)	口縁部～ 体部1/3	2.5Y6/3にぶい黄	体部外面に黒斑
92	36	一八	SW301	古式土師器 小形丸底壺	口径: (8.3) 体部最大径: (6.6)	1/2	5YR7/8橙	小形壺B2
93	36	一八	SW301	古式土師器 小形丸底壺	口径: 11.1 体部最大径: 9.7 器高: 8.1	6/7	7.5YR6/6橙	小形壺B2
94	36	一八	SW301	古式土師器 小形丸底壺	口径: 11.6 体部最大径: 9.7 器高: 8.3	5/6	5YR7/6橙	小形壺B2
95	36	一八	SW301	古式土師器 布留式壺	口径: (14.4) 体部最大径: (19.6)	1/3	2.5YR7/8橙	
96	36	一八	SW301	古式土師器 布留式壺	口径: (17.5)	1/4	2.5YR7/6橙	

遺物 番号	挿入 番号	図版 番号	遺構・層位	器 種	法量 (cm)	残存度	色 調	備 考
97	36	一八	SW302	古式土師器 布留式甕	口径: 14.3 体部最大径: (19.7) 器高: (20.5)	6/7	7.5YR6/3にぶい橙	
98	36	一八	SW302	古式土師器 複合口縁甕	口径: 22.3	口縁部～ 肩部	7.5YR7/4にぶい橙	複合口縁甕E1
99	37		第三層	古式土師器 小形丸底甕	口径: 12.1 体部最大径: (9.7) 器高: (7.3)	1/2	5YR7/4にぶい橙	小形甕B3
100	37	一九	第三層	古式土師器 小形丸底甕	口径: (12.0) 体部最大径: (8.6)	1/5	外: 5YR7/6橙 内: 7.5YR7/2明褐灰	小形甕B3
101	37	一九	第三層	弥生土師 長脚甕	口径: (13.5) 体部最大径: (20.3)	1/4	10YR7/1灰白	長脚甕A
102	37		第三層	古式土師器 V様式系甕	口径: (15.6)	口縁部～ 肩部1/5	5YR6/4にぶい橙	
103	37	一九	第三層	古式土師器 V様式系甕	口径: (13.8) 体部最大径: (12.5)	1/4	5YR5/4にぶい赤褐	
104	37	一九	第三層	古式土師器 甕	口径: (12.7) 体部最大径: (16.6)	口縁部～ 体部1/4	外: 10YR7/1灰白 内: N4/0灰	内外面に煤 塊D
105	37	一九	第三層	古式土師器 甕	口径: (13.4)	1/6	外: 7.5YR7/3にぶい橙 内: 10YR6/1褐灰	吉備系 甕J4 内外面に煤
106	37	一九	第三層	古式土師器 甕	口径: (17.0)	口縁部～ 肩部1/3	7.5YR6/6橙	吉備系 甕J4 内外面に煤
107	37		第三層	古式土師器 甕	口径: (14.2)	口縁部～ 体部1/3	外: 7.5YR8/6黄褐 内: 7.5YR8/1灰白	吉備系 甕J4
108	37		第三層	古式土師器 高杯	口径: (19.8) 杯部高: 6.5	杯部のみ	外: 7.5YR5/3灰褐 内: 10YR7/2にぶい黄褐	外面に黒斑 高杯A4
109	37		第三層	古式土師器 高杯	口径: (12.0)	脚底部1/3	5YR7/8橙	
110	37	一九	第三層	古式土師器 大形鉢	口径: (25.0)	口縁部1/2		鉢I2
111	37	一九	第三層	弥生土師 台付鉢	口径: 9.0 器高: 6.6 底径: 3.6	3/5	7.5YR6/3にぶい橙	内外面に煤 台付きA2
112	37		第三層	土師器 杯	口径: (17.0)	口縁部～ 体部1/6	7.5YR6/4にぶい橙	内面に煤
113	37	一九	第三層	土師器 把手		把手完存	5YR7/6橙	
114	37	一九	第三層	土師器 把手		把手完存	5YR7/6橙	
115	37		第三層	須恵器 杯蓋	口径: (12.5)	1/6	5PB6/1青灰	口縁部外面に灰被り
116	37	二〇	第三層	須恵器 杯蓋	口径: (12.7)	1/3	N8/0灰	
117	37	二〇	第三層	須恵器 杯蓋	口径: (15.0)	1/6	5PB5/1青灰	
118	37	二〇	第三層	須恵器 杯蓋	口径: 11.6 器高: 3.4 幅み径: 2.3 幅み高: 1.2	5/6	N7/0灰白	
119	37		第三層	須恵器 杯身	口径: (12.8) 受部径: (15.4)	口縁部～ 体部1/4	N4/0灰	
120	37		第三層	須恵器 杯	高台径: (10.6) 高台高: 1.7	底部1/3	N6/0灰	

遺物 番号	博覧 番号	図版 番号	遺構・層位	器種	法量(cm)	残存度	色調	備考
121	37	○	第三層	須恵器 杯	高台径:(11.2) 高台高:0.5	底部1/6	外:N7/0灰白 内:7.5YR8/1灰白	
122	37		第三層	須恵器 杯	高台径:(12.2) 高台高:0.4	底部1/3	N6/0灰	
123	37		第三層	須恵器 杯	高台径:(11.0) 高台高:0.5	腰部～ 底部1/6	5P66/1青灰	
124	37	二〇	第三層	須恵器 小形壺	体部最大径:7.8 高台径:1.8 高台高:0.5	頸部～ 底部	5P66/1青灰	
125	37	二〇	第三層	石製品 匙 石	長さ:7.4 幅:7.0 厚さ:5.0		N7/0灰白	安山岩 使用面3面
126	38	二〇	第六層	弥生土器 二重口縁壺	口径:(18.7)	口縁部～頸 部1/4	5YR7/6橙	
127	38	二〇	第六層	古式土器器 直口縁壺	体部最大径:12.0	口縁部欠損	5YR7/6橙	体部外面に黒斑 複合口縁壺B3
128	38	○	第六層	古式土器器 直口壺	体部最大径:13.8	体部～ 底部	10YR8/8赤橙	
129	38	二〇	第六層	古式土器器 直口壺	体部最大径:15.7	体部～ 底部2/3	5YR8/4淡橙	
130	38	二〇	第六層	古式土器器 小形丸底壺	口径:(12.0) 体部最大径:(9.0)	口縁部～ 体部1/5	外:5YR7/6橙 内:10YR7/1灰白	
131	38		第六層	弥生土器 直口壺	口径:(13.9)	口縁部1/3	7.5YR8/4浅黄橙	直口壺A1
132	38	二一	第六層	古式土器器 直口壺	体部最大径:17.3	2/3	5YR7/8橙	直口壺A1
133	38	二一	第六層	古式土器器 布留式傾向壺	口径:14.2 体部最大径:20.4	3/5	7.5YR6/4にぶい橙	堯E
134	38		第六層	弥生土器 直口壺	口径:(6.7)	口縁部～ 体部1/3	2.5YR7/8橙	
135	38	二一	第六層	弥生土器 広口壺	口径:(12.4)	口縁部1/6	7.5YR5/3にぶい橙	
136	38	二一	第六層	弥生土器 広口壺	口径:14.4	1/4	外:7.5YR6/4にぶい橙 内:7.5YR6/2灰橙	広口壺B1
137	38	二一	第六層	弥生土器 長頸壺	口径:11.5 体部最大径:16.4 器高:19.7 底径:4.1	口縁部の 部欠損	7.5YR6/4にぶい橙	
138	38	二一	第六層	弥生土器 長頸壺	口径:(9.3) 体部最大径:13.9 器高:20.3 底径:3.9	3/5	2.5YR6/8橙	
139	38	二一	第六層	弥生土器 長頸壺	口径:10.5 体部最大径:13.5 器高:24.0 底径:3.9	3/5	7.5YR5/2灰橙	
140	38	二一	第六層	弥生土器 壺	口径:(18.0)	口縁部～ 肩部1/6	5YR6/4にぶい橙	
141	38	二一	第六層	弥生土器 壺	口径:14.0 体部最大径:16.1 器高:16.4 底高:4.4	6/7	7.5YR7/3にぶい橙	
142	38	二一	第六層	弥生土器 鉢	口径:10.3 器高:6.7 底径:2.8	3/5	7.5YR4/1褐灰	

第3章 まとめ

隣接する第47次・第48次調査を含めて、弥生時代後期後半、古墳時代前期前半(布留式古相)、古墳時代前期後半(布留式新相)、古墳時代中期、飛鳥時代、奈良時代後半～平安時代初頭を中心とする居住域を構成した遺構・遺物を検出した。以下、検出した各時代順の様相と東郷遺跡東部における既往の調査成果とを照合しながら記述する。

・弥生時代後期後半

弥生時代後期後半の遺構としては第48次でNR203を検出した。断片的な検出で、しかも自然河川という性格のため、出土遺物については移動等を考慮する必要があるが、大半が比較的良好な資料で時期的にも弥生時代後期後半〔古相〕に限定されるため、近隣に当該期の居住域の存在が想定できる。

東郷遺跡では、第39図で示したように弥生時代中期に遺跡推定範囲の東部を縦断する大規模な河川が存在したことが第20次・第36次・第39次・第47次・第48次・第55次・第60次・第64次の各調査で確認されている。これらの調査成果を総合すれば、河川に伴う砂層の範囲が約150～250m幅に及んでおり、当該期において恒常的にこの規模を維持した河川とは想定されないものの、砂層堆積範囲内で流路を変化しつつ流下した河川であったと推定される。この河川は、東郷遺跡の南側に位置する小阪合遺跡と成法寺遺跡の境界付近を南北方向に流下し、東郷遺跡東部の八尾市荘内一・二丁目、桜ヶ丘一丁目、光町一・二丁目付近で北西に流路を変え、萱振遺跡南西部の北本町四丁目を経て近畿道建設に伴う友井東(その1・2)で検出された弥生時代中期中葉(畿内第Ⅲ様式)の自然河川群に繋がるものと推定される。このため東郷遺跡東部の弥生時代の居住域は、この河川流路の両岸に沿った展開が認められる。居住域の成立時期は弥生時代中期後半で、河川の左岸にあたる第15次・第49次調査で当該期の遺構が検出されているが、共に断片的で面的な広がりを有さないため短時間で小規模な集落であったと推定される。そのうち、第49次調査からは、紀伊地方から搬入された壘形土器(広口長頸壺)が出土しており、当該期における地域間交流の一端が推定される。一方、東郷遺跡南東部から成法寺遺跡北端部の河川左岸では、成法寺遺跡第18次調査で中期前半(畿内第Ⅱ様式)の居住域や隣接する大阪府教育委員会による平野中公安線拡幅工事に伴う調査で、中期後半(畿内第Ⅳ様式)の方形周溝墓1基が検出されており、この付近一帯に中期前半から後半にかけての比較的安定した集団の集落域が想定される。

弥生時代後期後半以降の集落は、この時期までに埋没を完了した河川跡の周辺に展開している。右岸域にあたる東部では、河川跡に沿って第13次・第24次・第33次・第48次調査で後期後半〔古相〕に成立した東部居住域が検出されている。一方、左岸域に当たる西部では、第69次・第71次調査で後期後半〔新相〕に成立した西部居住域が検出されている。第69次・第71次調査では、多量の弥生土器類を廃棄した溝が検出されており、当該期中河内地域の各遺跡で散見される溝における土器多量廃棄行為の背景にある社会相や精神文化等を考えるうえで貴重な資料となろう。このように、後期に成立する居住域は埋没河川跡を挟んで、東部居住域(後期後半〔古相])と西部居住域(後期後半〔新相])の2箇所があるが、いずれも短時間で小規模な居住域であったと推定される。したがって、第48次調査で検出した後期後半〔古相〕に比定されるNR203につ



第39図 東郷遺跡東部の弥生時代中期から後期の遺構分布図

いては、東郷居住域を構成した第33次調査地との関係が推定される。

・古墳時代前期前半(布留式古相)

古墳時代前期(布留式期)の遺構は第47次調査で小穴3個(S P 201~203)、溝1条(S D 201)、落込み1箇所(S O 201)、土器集積1箇所(S W 201)、第48次調査で竪穴住居2棟(S I 301・302)、土坑6基(S K 301~306)、溝10条(S D 301~310)、土器集積2箇所(S W 301・302)、小穴8個(S P 301~308)を検出した。第47次調査では、調査期間等の制約から調査区南東部のみで検出したに過ぎないが、第48次調査の調査成果や包含層から出土した遺物から勘案して広範な広がりを持つものであったと想定される。時期的には、第48次調査で検出したS K 304が古墳時代前期後半(布留式新相一布留IV期)である以外は古墳時代前期前半(布留式古相後半一布留II期)にあたる。

古墳時代前期前半(布留式古相後半一布留II期)の居住域は、第48次調査の西部で検出した竪穴住居(S I 301・302)を包括して展開したものと推定される。この竪穴住居から南に約3.5mの間隔を開け、併行して伸びるS D 310が存在している。この溝は第47次調査の南東部で検出したS D 201と方向や時期が共通することから同一の溝であったと推定されるため、居住域内の南側を画する区画溝であった可能性がある。

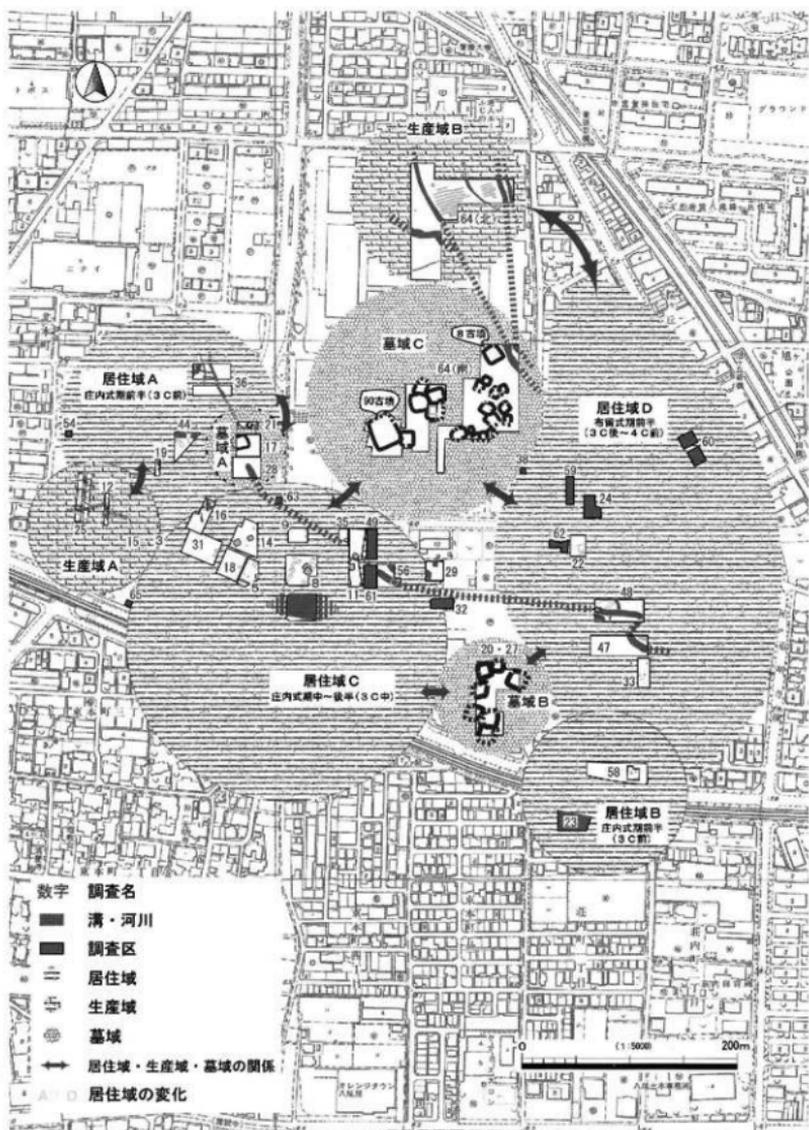
一方、本調査で検出した古墳時代前期前半(布留式古相)以前にあたる古墳時代初頭(庄内式期)を包括した東郷遺跡東部での集落分布を第40図で示した。図が示すように、東郷遺跡東部では、古墳時代初頭前半(庄内式古相)から古墳時代前期後半(布留式新相)を通じて継続的に集落が営まれている。集落内の選地については、基本的には弥生時代中期に機能し、後期前半以降に廃絶した自然河川流路の両岸に沿った高燥な微高地に沿って居住域が展開しており、墓域や生産域は埋設河川の流路部分に沿った分布が認められる。当該期を通じて集落を構成した居住域が4箇所(居住域A~D)、墓域が3箇所(墓域A~C)、生産域が2箇所(A・B)で検出されている。

まず、古墳時代初頭前半(庄内式古相)にあたる居住域は、居住域A・Bで検出されている。居住域Aは第4次・第16次・第19次・第25次・第36次・第44次・第71次調査を中心としており、関連する墓域は第17次・第21次調査を中心に方形周溝墓2基が検出された墓域A、生産域は南部に隣接した第12次・第25次調査で検出された水田を中心とする生産域A付近一帯が考えられる。居住域Bは、居住域Aの南東約350mに位置している。第23次・第58次調査を中心とする小規模な居住域である。生産域や墓域との関係は明確でない。

続く初頭後半(庄内式新相)の居住域Cは、居住域AとB間の第5次・第8次・第11次・第14次・第35次調査を中心に、竪穴住居や掘立柱建物を中心とする居住域を構成している。居住域Cに関連した墓域としては、北に隣接する第64次調査の南部を中心とする墓域Cと東に隣接する第20次・第27次調査を中心に方形周溝墓7基が検出された墓域Bが考えられる。生産域は生産域Aとの関係が推定される他、これまでの調査で居住域Cの南部に沼沢地状の地形が想定されているため、南部一帯に生産域を構成した水田が広がっていた可能性がある。

前期前半(布留式古相)の居住域Dは、東部を中心とする第22次・第24次・第33次・第47次・第48次・第58次・第60次調査で検出されている。墓域との関係では、墓域B・Cとの関係が推定される。生産域との関係では、生産域Bが想定され水田の他、畑作に伴う畝溝群が検出されている。

一方、墓域Cは古墳時代初頭前半(庄内式古相)~前期中葉(布留式新相)に至る墳墓・土器棺墓・



第40図 東郷遺跡東部の古墳時代初頭(庄内式期)から古墳時代前期(布留式期)の遺構分布